

医家芸術 2018年 前期号 目次

62巻 通巻634号 (2018年)

年頭所感

日本医師会会長	横倉 義武	2
日本薬剤師会会長	山本 信夫	5
東京都医師会会長	尾崎 治夫	6

第65回医家美術展	8
第47回医家写真展	22
第56回ドクターズファミリーコンサート	31
第62回邦楽祭	34

◇医家随想

トキコ青春	
田辺聖子「私の大阪八景」を楽しむ	
鈴木 啓之	42
チューホフを読む(15)	
藤倉 一郎	50
シジュウカラ(四十雀)とのつきあい	
浜名 新	51
ヒトとライオン	
出来 尚史	56
北アルプスでの診療	
八潮 弘三郎	69
病院と楽しくつきあう方法	
橋爪 康子	93
フランス通信、他	
吉元 昭治	98
記備談語—10—	
佐藤 玄祥	102
ワインの中に真実がある	
豊泉 清	117
謹賀新年 御挨拶	121

医芸俳壇	124
医芸柳壇	124
医芸歌壇	125

◇ほん

『チャクラ・丹田・奇経八脈と禅』	
吉元 昭治 著	127
『老医・八十二歳の日記』	
藤倉 一郎 著	127
江川政昭画文集	
『稚拙なれどもロマンに富む —古希を迎えて—』	
江川 政昭 著	128
クラブ通信	129
透視像	130
編集後記	130

表紙の言葉	126
原稿募集のお知らせ	126

【お詫び】

当初、新年号として原稿を募集したため、新年の挨拶及び年賀広告が掲載されております。発行時期が遅れたため戴いた内容が季節外れとなってしまうこと深くお詫び申し上げます。

年頭所感

2018年（平成30年）

日本医師会

会長

横倉 義武



明けましておめでとうございませう。国民の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

昨年は、7月に甚大な被害をもたらした九州北部豪雨や9月の大型台風21号の発生など、各地で大雨や台風を始めとする天候不順により自然災害が相次ぎ、多くの方々被災され避難生活を余儀なくされました。

被災された方々には、改めてお見舞い申し上げます。

昨年10月、世界医師会（WMA）シカゴ総会において、私は第68代WMA会長に就任いたしました。日本人としては、1975年の故武見太郎元会長、2000年の故坪井榮孝元会長に続く3人目になります。

WMAは、1947年に設立された114の各国医師会が加盟する世界の医師を代表する組織です。本部はジュネーブ近郊のフェルネイ・ボルテア（フランス）に所在し、WHOや国連等の国際機関と連動して世界中の人々の健康水準の維持、向上に努めています。日本医師会は、1951年の第5回WMA総会で加盟し、現在、会長、理事3を有してその活動

に貢献しています。

私は今回の就任に際し、国民の健康寿命を世界トップレベルにまで押し上げてきた我が国の優れた医療システムを世界に発信し、グローバルなレベルでの健康長寿社会の実現に寄与して参りたいという強い思いを述べました。年を新たにし、改めてさまざまな分野での医療協力・パートナーシップを深め、人材の能力開発・生涯教育の一層の推進など、WMAの果たすべき任務を遂行してゆく責任の重さを痛感しています。

また、昨年9月には、アジア大洋州医師会連合（CMAAO）東京総会を第35代CMAAO会長として主宰いたしました。CMAAOの活動をより活性化させ、地域住民の健康の

増進に努めながらWMAとの関わりをより一層緊密なものとし、当該地域の医師の声がWMAに届くよう努めることは、両団体の活動に深く携わる日本医師会長、CMAA会長、そしてWMA会長としての私のもうひとつの大きな使命であると位置づけています。

歴史を振り返りますと、我が国が世界のトップレベルの健康長寿を達成してきた背景には、国民皆保険の下、我々医療従事者の献身的な努力があったという事実があります。戦後の経済復興の過程には、国民が安心して仕事をし、生活を送るための基盤として国民皆保険がありました。国連が2016年に開始した2030年に向けての「持続可能な開発目標、SDGs」には「誰一人取り残さない」という国民皆保険に通じる理念があります。1961年に実現した我が国の国民皆保険は50年以上

に亘り国民の健康を支え、Universal Health Coverage (UHC) のあるべきモデルとして高く評価されており、何としてもその仕組みを堅持していかなければならないと考えています。

高齢社会の抱える問題のひとつである終末期医療については、会内の生命倫理懇談会でも提言を取りまとめて頂きましたが、WMAでもそのあり方、とりわけ安楽死などの問題を検討してきました。WMAの地域会議として開催されたCMAA東京総会における「終末期医療」をテーマとしたシンポジウムでは、アジア諸国にはさまざまな宗教が存在し、宗教が終末期のあり方にも影響していること、また、膨大な人口、家族、地域共同体の結びつきが非常に強固であり、終末期医療における意思決定にも関わっていることが報告されました。昨年11月にはバチカン市国において「WMA欧州地域終末期医

療シンポジウム」が開催され、医療、法律、緩和ケア及び医療倫理の専門家、神学者、哲学者などが参加し、患者の権利と治療の制限など、終末期医療に関する世論への理解を深めるための議論が行われました。また、3月にはラテンアメリカで、本年2月にはアフリカで同様の会議がそれぞれ開催され、今後、各地域の意見を集約したWMAとしての方針を政策文書としてまとめていくことになっていきます。

一方、国内に目を転じますと、働き方改革が重要な課題となっております。日本医師会はこの問題に関して、医療現場の実情と「心招義務」に配慮した方策を強く求めてきました。その結果、政府は「医師の働き方改革に関する検討会」を設置し、医師の働き方について別途議論を進めています。3月までには、会内に設置した「医師の働き方検討委員会」の答申も取り

まとめられる予定でありますので、それらの意見も踏まえながら、引き続き、国に対して意見を述べていきたいと思っております。

また、少子高齢化の一層の進行が予想される中で、社会保障費は、医療、介護などを中心に今後も増加することが見込まれ、その財源をどのようにに賄っていくかについても大きな課題となっております。財政緊縮の立場から、成長戦略や規制緩和の名の下に、保険給付範囲を狭める圧力が予想されますが、国民皆保険を堅持していくためにも、我々医療側から生涯保健事業の体系化による健康寿命の延伸など、過不足のない医療が提供できるよう、適切な医療を提言し、時代に即した改革を進めていく必要がございます。

我が国では、フリーアクセスによる外来へのアクセスの良さが病気の早期発見・早期治療に寄与してい

ます。その中心を担う「かかりつけ医」をまず受診することで、適切な受療行動、重複受診の是正、薬の重複投与の防止等も可能となり、医療費の適正化も期待できます。日本医師会としては引き続き「かかりつけ医機能研修制度」を実施することで、「かかりつけ医機能」の更なる向上を目指して参る所存です。

また、日本医師会では、より良い医療の在り方について、国民と医師とが共に考えながら、更なる国民医療の向上に寄与していくことを目的として、日本医師会の設立記念日と「いい（11）医（1）療」の語呂合わせにより、11月1日を「いい医療の日」に制定しました。広く国民に周知されるよう、今後もさまざまな活動に取り組んでいきたいと思っております。

最後になりますが、私は国民に寄り添い、国民の健康を守ることが医師の役割であり、その医師の声を基

に、国に対してさまざまな政策を提言していくことが日本医師会の役割であると考えています。今後もWMAとCMAAOの会長として、日本のみならず世界に広く目を向け、理念を高く掲げ、人々の健康、福祉の向上に努めて参りますので、国民の皆様のご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。



日本薬剤師会

会長

山本 信夫



新年あけましておめでとうござい
ます。皆様におかれましては、輝かし
い新年をお迎えのこととお慶び申し
上げますとともに、平素より日本薬
剤師会の諸事業に格別のご理解とご
協力を賜っておりますことに、厚く
御礼申し上げます。

世界的にも突出した速さで少子高
齢化が進む中、社会保障制度改革へ
の取組が急務となり、特に本年は診
療報酬・介護報酬等の同時改定や医
療・介護等に係る各種計画の節目の
年として、これらを有機的に連携さ
せた取り組みが進められようとして

います。こうした中で薬剤師と薬局
には、「患者のための薬局ビジョン」
に示された「かかりつけ」として、地
域包括ケアシステムの構築に貢献し
ていくことが求められています。

「経済財政運営と改革の基本方針
2017」では、調剤報酬見直しの方
向性として、対物業務の適正化と対
人業務の重視、薬局の機能分化のあ
り方の検討、保険薬局が果たす機能
に応じた評価、かかりつけ薬剤師に
よる服薬情報の一元的・継続的な把
握等の推進が示されました。平成28
年4月より法に位置付けられた「健
康サポート薬局」は、かかりつけ薬剤
師・薬局の機能に加え薬や健康、介護
用品などの相談にも応じる地域包括
ケアシステムの中で重要な役割を担
うものです。本会では、同薬局に常駐
が義務付けられた薬剤師の資質確保
のための「健康サポート薬局研修」を
引き続き提供し、着実な普及推進を

図つていくこととしております。

一方、昨年は、偽造医薬品の流通や
調剤報酬の付け替え請求、無診察処
方という不祥事が続発しました。い
ずれも経済的な視点での不正行為で
あり、保険調剤や薬剤師・薬局が築き
上げてきた国民の信頼を貶めるもの
です。こうした事態を真摯に受け止
め、すべての薬剤師が倫理観と専門
職としての矜持をもって、社会から
信頼される医療人として業務に取り
組まなければなりません。薬剤師の
具体的な行動の価値判断の基準とし
て策定している「薬剤師行動規範」に
基づき、社会に対する責任を全うし
ていくよう求めてまいりたいと考え
ます。

本年4月の診療報酬・調剤報酬の
改定の方向性は、患者本位の医薬分
業の実現に向けて、薬剤師・薬局が実
際に果たしている機能を反映したも
のとなることが想定されます。医薬

品等の供給とともに地域包括ケアシステムの多職種と連携して住民の相談役としての役割を果たし、国民の健康寿命の延伸に貢献していくことは、私たちの重要な使命です。地域において医薬品の一元的・継続的な薬学管理指導と薬と健康等に関する多様な相談に対応し、医薬品等の供給体制の確保とともにセルフメディケーションを支援する、かかりつけ薬剤師・薬局の推進に引き続き力を尽くしていく所存であります。

本年が、皆様方にとって、実り多い一年となりますことを心よりお祈り申し上げますとともに、今後とも本会事業にご理解、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

東京都医師会
会長
尾崎 治夫



明けましておめでとうございます。日本医家芸術クラブの皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

日頃は、東京都医師会の会務運営並びに諸事業にわたり、格別のご協力を賜り厚く御礼申し上げます。本年も役員一同協働して、引き続き熱意と使命感をもって医師会活動に邁進してまいりますので、変わらぬご支援、ご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、昨年からの北朝鮮問題、日本を含めた各国の対応、トランプ大統領のアメリカの行方、イギリスのEU離脱問題、スペインバルセロナでのテロ、そしてカタルーニャ州のスペインからの独立騒動、ドイツのメルケル政権の不安定化など、世界を取り巻く環境は、より不安定さを増してきています。その中で我が国は、社会保障の一層の充実と皆保険制度の堅持により、国民、都民への今後の暮らしに対する安心感を与えることを第一とすべきであろうと考えております。2025年に向けた地域医療構想の実現を左右する、診療報酬・介護報酬の改定については、全体では1.9%の引き下げとなりましたが、本体部分は0.55%、介護報酬は0.54%引き上げという結果となりました。東京都医師会といたしましては、今後も日本医師会と連携して努力していく覚悟でございます。

平成30年度の東京都保健医療計画の改定にあたっては、従来の二次医療圏に拘ることなく、東京都の地域特性を生かした事業展開を柔軟に行っていくとして、本会が強く主張していた、「事業推進区域」の概念を書き込むことが出来ました。また、本会が求めていた受動喫煙防止対策の強化、COPD対策、介護予防の要であるフレイル対策、東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、飛躍的に増える訪日外国人医療についても計画に盛り込まれました。これらを踏まえ、平成30年度の諸事業を推進していく所存であります。

さて、地域医療構想については、調整会議が既に複数回開かれており、今後は公的病院と民間病院の役割分担が大きなテーマとなっていくものと思われれます。また、調整会議のともに地域包括ケアワーキング部会もスタートしており、これにより着実

に地域包括ケアのシステム化が進むことを期待しております。

一方、逼迫する東京都の救急医療体制の中で、『時々入院、ほぼ在宅』の包括ケアシステムが円滑に動くためには、病院救急車による高齢者搬送システムの構築が必要と考えており、東京都の協力のもと、モデル事業として既に葛飾区、八王子市、町田市で、高齢者が転倒骨折、軽い脳卒中、肺炎などの際、在宅や介護施設等と地域密着型病院を結ぶ病院救急車による搬送システムが動いておりますが、今年もモデル地区の増加が見込まれます。

また、一定期間経過した東京消防庁の救急車を病院救急車に再利用することが検討されるなど、全都的展開に向けて着実に動いていることをご報告いたします。

いずれにしましても、皆様の協力はこれら東京都で解決すべき

課題への対応は到底実現しないものと考えておりますので、日本医家芸術クラブの先生方におかれましてもご支援ご協力の程何卒よろしくお願い申し上げます。

結びとなりますが、日本医家芸術クラブの限りないご発展と各位のご清祥を祈念いたしまして新年の挨拶とさせていただきます。

第65回 医家美術展

2017年11月19日(日)～25日(土)

東京交通会館 B1 ゴールドサロンにて

【 19日 美術展懇談会 】

美術展となりました。

懇親会では作品にかけた想いや近況などを話し合い有意義な時間をもにしました。

今年は、画家・素材史家の吉留邦治氏に美術展の総評を戴きました。今回は総評を掲載させて戴き、作品は写真掲載のみとさせて戴きます。



医家芸術クラブ美術展について

吉留 邦治

過日有楽町交通会館ゴールドサロンにおいて開催された恒例の同展にて、僭越ながら、美術部委員の白矢勝一先生により批評の任を仰せつかった。作品は展示場所の関係から出品者個人ごとに纏めたものでなかったし、不在の出品者もいたし、時間的制

約もあり、全作についてきめ細かに語ることはできなかったくらいはあるが、一点一点何度も廻って拝見した。当稿は改めてその総括的な感想をまとめたものである。

個人的にもかなり以前から絵を描くお医者さんは多いと知っていたが、同展においても、かなりのキャリアを感じさせる、既に自分の世界が構築されているような、相当のレベルとの印象を得た。

事に当たる前、挨拶を兼ねて筆者の存念を申し述べた、趣旨は以下である。

《絵画とは当然ながら、作家の諸々の資質、嗜好に応じて作品傾向は違ってくる。したがって論ずる方も、画一的でない、その作品傾向に応じた観方が必要で、例えば自由奔放な絵に、デッサンとかヴァールとか言う、アカデミックな概念を余りに厳格に適用するのは返ってその可能性

平成二十八年九月二日(水)～四日(日)、ギャラリー銀座『悠玄』にて、第六十四回医家美術展が開催されました。

今年は二十名による三十七作品が
出展され、力作ぞろいのすばらしい

を遮るようなことになるので不適當であろう。

しかしそうした諸々の作品傾向にも一つ共通したものがある。それは「絵画的価値」とでも言うべきものである。例えば、長く描いていると、いつか各種展覧会で他者の鑑賞の目に供したい、あるいは何かの公募展などで力試ししてみたいなどと思うのも自然の流れである。そういう場合問われるのがその「絵画的価値」の如何であり、客観的評価は必ずしも絶対のものとは言えないが、一人よがりには陥らない一つの目安にはなるだろう。

しばしば「描きたいものを描きたいように描けば良い、楽しければ良い」と言う声を聞く。勿論それは一番大事なことで、その通りなのであるが、描きたいものを描きたいように描けなければ楽しくもないだろう。どうせやるなら絵画芸術としての精

髓を究めたいものである。

ここに一定の造形的修行、外部の批評を聞いたたり、他人の絵を觀たりするという努力も必要になってくる。》

右記のようなことを最初に述べ、口幅つたくも、私は実作者であると同時に、美術史学科の出身であり、内外の美術館や画集などで、おそらく数万点の他人の絵を觀ているので、その経験からピントはずれの批評をすることはないだろうというように趣旨も言った。先に述べた通り、全体に相當なレベルを認めつつも、その絵画的価値と言う意味でなお研鑽すべき余地を感じた事柄を纏めてみる。先ず、多くが油彩画であったが、油絵具とは素材としての展開の可能性は他の素材に比し群を抜いている。その重厚さ、コク、味わいなどの如何もその絵画的価値の要素である。一部に「アラプリマ」と呼ばれる画法に

類する、「速戦即決型」の作品もあつたが、その確かなアツサン力、達者な筆さばきには感服するが、その限りでは素材的意義は限界がある。油彩である以上、その素材の味わいや特性はもつと生かしたい。

ただ闇雲に特定の色味を厚塗りしても、油彩の場合はいかえって重苦しく単調になる。こういう場合は、他の色味を「混合」、「透層（グラシ）、「並置」などの方法で加え、結果的にその色味を「感じさせる」と言う工夫により画面の単調さは逃れることになる。また、ペインティングナイフやローラーの使用、地塗り、ナイフや紙やすり、ストリッパー（剥離剤）などによる「引き算画法」等で絵具層を絡み合わせたり、下層の色味を覗かせたりするという画法を併用すれば、画面は味わいを増すものとなる。もう一つ単調さを避けるという意味では、例えばリングゴはリングゴの色、

バナナはバナナの色、皿は皿の色で塗り、背景を青系とした場合、それらをはつきり塗り分けると、これも単調な画面となる。この場合リンゴの陰の部分に背景の青の色味を入れ、逆に背景にりんごの赤い色味を「スパイス効果」のように散りばめ、バナナも皿も色のニュアンスを効かす。こうしたことで色彩がハーモニーを持つて響きあうような豊かな画面となる。因みにこの辺りは印象派が参考となる。

よく「描きこみが足りない」と言うマイナス評価を聞くが、これは描画密度だけではなく、こうした「絵作り」上の工夫の不足という場合もある。ただし、懲りすぎて工芸品的になつても行き過ぎである。

次に、先に一律に「厳格な」アカデミックな概念の適用は適切でないと言ったが、アカデミックな要素は排除してよいという意味ではない。

周知のように古典主義とは、デッサン、調子(トーン)、グラデーションの概念、ヴァルルール(物と物・パート相互間の明度等の関係性)などの正確な把握が要求され、これにより写真主義、リアリズムが成り立つ。これに対し印象派以降は色彩、フォルム、マティエール等個々の造形要素固有の生命が解放されていくが、上記古典主義の造形的意義は広義な意味に形を変えつつ受け継がれるものである。今でも基礎修行機関でデッサンなどそれらの修行をしないところはないのはその証左である。

描画対象たる万物は、フォルムとトーン(前出)で出来ている。したがって、具象絵画である以上このフォルムとトーンの把握は重要であることは言うまでもない。このことから造形世界の原則論に、以下のようなものがある。《人物や静物は現物以上に大きく描かない。風景画では、省略

は「可」だが、実際に無いものを描き足すのは要注意。なぜならそれは、フォルムとトーンについて「虚」の部分を導入することになるからである。虚の部分があると形も正確に描けない。さらにこれは全体とのバランスを崩す恐れもある。観る方にもどこか収まりが悪く、不自然に映ずる。小さく描いたり、省略したりするのは虚が入る余地がないので許される。

ただしこれらはあくまで原則論であり、例えばポイントとして点景に人物を描き入れたりすることはよくある。またルーブルにあるような巨大画面などでは実際より大きく描くこともある。本展出品作に一部実際より大きめの作品が見られた。

そのフォルムとトーンの処理如何は画面全体にも関わる。絵画空間としての「奥行」や「広がり」の表現は重要である。それにはモチーフに立体感が必要である。立体感がなく

ベタツとしていたら背景もベタツとしてしまう。山が屏風のように平面的だったら背景の空の広がりや高さや自然の雄大さも感じることができない。静物画、人物画の背景も同様である。

その立体感とは、件のフォルムとトーンの、できるだけ正確な把握無くして出ない。出品作に、立体感ももう少しあれば完成度はもつと高くなると思う作品が何点かあった。なお、写実性が一層強まれば、これに質感とか量感(塊、重さ)に係る概念)とかの表現が要求される。例えば石も雲も立体感はあるが、雲には重さはない、これを描き分けなければならぬ。

もつと自由奔放な絵画、デフォルメを旨とする絵画、幻想画やイメージ画、半具象、あるいはマティエールや素材そのものの面白さを追究する絵画、主情主義等々具象画の可能性

はまだまだあるし、出品作にもそういう傾向の作品が見られた。これらに一律に、上記のような意味のフォルム、トーン、立体感等を求めることはできないが、別の絵画的価値が求められることになる。

絵画とはバランスの芸術である。美術史上どんな奔放な絵でも結果的には構図・構成、色彩、フォルム、トーンなどに破調はなく、バランスある絵画空間が構成されているものである。例えば特定モチーフが「主人公」とするなら背景はそれが活躍する「舞台」である。ただの背景ではなく、舞台たる絵画空間として奥行を感じさせたい。この場合も背景のトーン処理が重要である。ベタツとした平面に主人公が貼りついているようなものは避けたい。その方法もいくつかあるが、一番暗い部分、一番明るい部分、その中間の階調(グラデーション)を上手く塗り分けることで

美しい深みが出る。

また色彩も、例えばクラッシクな色調、パステルトーンのようなブルーフトーンの中に調和を乱すような原色に近い色を入れるのは警戒を要する。明度の繋がり、明暗の対比、色調の統一性など諸々配慮することも多い。

構成やフォルムの妙をベースにした作品もあった。これもグラデーシヨンのほかフォルムの面積に粗密の差を設ける、「間(ま)」の取り方の工夫、特定色面にアクセントある色味を加えるなどにより画面に「メリハリ」をつければ一層見応え絵画となるだろう。

最後に参考までに、以下一般的にも認知されている有効な画法だが意外にやらない人が多い事例を紹介したい。

長時間描いていると悪い意味で眼が慣れてしまい、おかしな所に気づ

かないことがある。その場合通常は離れて見る、写真を撮ってみる、他人の作品と並べて見るなどの方法があるが、もっと手取り早く有効なのは《鏡で逆画像を見る》ということがある。

これは、デッサンの狂いやトーンの破調が一目瞭然となる。人物画など時に愕然とする時がある。

もう一つは、人物画などの場合、一生懸命になり過ぎモチーフばかりを見てしまうが、時にはモチーフの輪郭線の外側の形を見るのである。つまり、ポジではなくネガの方を見る。例えば腰に曲げた腕を当てているポーズの場合、その腰と腕が作る三角形の空間の形、角度や面積を見る。このポジ・ネガ画法の併用で正しい形が決められていく。いずれも習慣づけると良い。

なお、ガラス工芸とトールペイントも展示されていた。筆者は門外漢

であるが、ともにどこに出しても通用する完成度の高いものと判断した。

(吉留邦治 画家・素材史家)

【吉留邦治氏出展作品】

『ポイントワーズ』 P 12 油彩



『クラマールの森』 F 10 油彩



出展作品の紹介



榎本 貴夫『袋田の滝』
F20 油彩



榎本 貴夫
『月宵—賽峯湖』(中国)
B2 油彩



榎本 貴夫
『朱昏—賽峯湖』(中国)
B2 油彩



海老原 隆郎
『ぶどう』(ベニパレード)
8 水彩



海老原 隆郎『戸賀湾の入陽』
8 水彩



荻野 公嗣『海賊』
B3 油彩



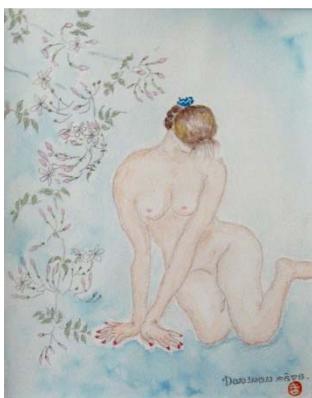
荻野 公嗣『桜』
F8 油彩



奥田 哲章『彼岸花』
F30 油彩



奥田 哲章『二十歳の門出』
F50 油彩



落久保 万里子『夢の中Ⅱ』
F3 水彩



落久保 万里子『夢の中Ⅰ』
F3 水彩



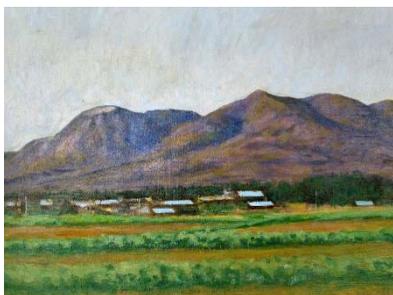
押切 八重子
 トールペイント『Patisserie』
 30×20 工芸



押切 八重子
 トールペイント『Patisserie』
 30×20 工芸



木村 典子『玄関先』
 F10 油彩



金古 進『赤城山』
 P12 油彩



坂下 昇『抱かれたアリス I』
 F10 油彩



齋藤 壽子『ひまわり』模写
 F2 油彩



坂下 昇『愛しのアリス』
F10 油彩



坂下 昇『抱かれたアリスII』
F10 油彩



白幡 雄一『裸婦』
F50 油彩



杉岡 宏
『立山連峰（雨晴海岸から）』
F10 油彩



白矢 勝一『私の花』
F3 油彩



白矢 勝一『My Flower』
F3 油彩



清水 妙子『その先へ』
15×15
フュージングガラス



白矢 勝一『モンマルトルの坂』
F8 油彩



清水 妙子『まぶたのうら』
15×15
フュージングガラス



清水 妙子『整列した融合』
15×15
フュージングガラス



鈴木 博『ルベシカ』
F10 油彩



鈴木 博『加代子さん』
F10 油彩



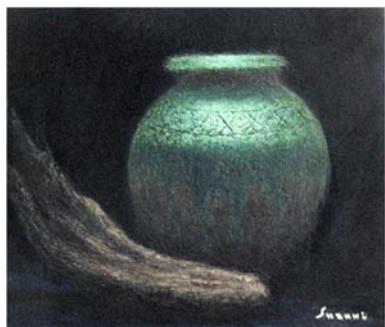
鈴木 啓之『能登の御陳乗太鼓』
F50 油彩



鈴木 啓之『青森ねぶた祭』
F10 油彩



長沼 弘三郎『亀美の杜』
F30 油彩



鈴木 啓之『流木と信楽の壺』
F8 油彩



野口 眞利『アルルの郊外』
F6 水彩



野口 眞利『雪の道』
F8 水彩



橋本 英明『夜会』
F20 油彩



野口 眞利『秋のモンマルトル』
F8 水彩



矢ヶ崎 千良『大バラ』
F12 油彩



矢ヶ崎 千良『ハンガリー衣装』
F12 油彩



安田 修一『白馬岳』
80 油彩



山崎 嘉弘『望月さんの木』
S50 アクリル水彩



山崎 嘉弘『K嬢』
F20 アクリル水彩



山田 治『港夕景』
F30 油彩



山下 婦美子『ELCARDENAL』
F30 油彩



第 6 5 回 医家美術展

2017年11月19日～25日

氏名	作品名	サイズ	種別	専門科目	所属
榎本 貴夫	袋田の滝	F 2 0	油彩	脳神経外科	つくば市
	朱昏一寶峯湖 (中国)	B 2			
	月宵一寶峯湖 (中国)	F12			
海老原 隆郎	戸賀湾の入陽 ぶどう (ベニバラード)	8	水彩	内科	東京・江戸川区
荻野 公嗣	桜	F 8	油彩	眼科	東京・練馬
	海賊	B 3			
奥田 哲章	二十歳の門出	F 50	油彩	整形外科	広島
	彼岸花	F 30			
落久保 万里子	夢の中Ⅰ 夢の中Ⅱ	F3	水彩	家族	広島
押切 八重子	トールペイント「Patisserie」 トールペイント「Patisserie」	30×20	工芸	家族	東京・武蔵村山市
金古 進	赤城山	P 1 2	油彩	外科	前橋
木村 典子	玄関先	F 1 0	油彩	内科	東京・杉並
齋藤 壽子	ひまわり 模写	F 2	油彩	眼科	東京・国分寺市
坂下 昇	抱かれたアリスⅠ	F 1 0	油彩	外科	広島
	抱かれたアリスⅡ				
	愛しのアリス				
杉岡 宏	立山連峰 (雨晴海岸から)	F 1 0	油彩	整形外科	東京・東大和市
白幡 雄一	裸婦	F 5 0	油彩	耳鼻科	東京・千代田区
白矢 勝一	My flower	F 3	油彩	眼科	東京・小平市
	私の花	F 3			
	モンマルトルの坂	F 8			
清水 妙子	その先へ 整列した融合 まぶたのうら	15×15	フュージングガラス	甲状腺科	東京・花小金井
鈴木 博	加代子さん	F 1 0	油彩	耳鼻科	東京・板橋
	ルパシカ	F 1 0			
鈴木 啓之	青森ねぶた祭	F 1 0	油彩	皮膚科	川口市
	能登の御陳乗太鼓	F 5 0			
	流木と信楽の壺	F 8			
長沼 弘三郎	奄美の杜	F30	油彩	泌尿器科	宮崎
野口 眞利	雪の道	F 8	水彩	内科	東京・練馬
	アルル郊外	F 6			
	秋のモンマルトル	F 8			
橋本 英明	夜会	F 20	油彩	内科	東京・杉並
矢ヶ崎 千良	ハンガリー衣装 大バラ	F 12	油彩	外科	茨城・水戸市
安田 修一	白馬岳	80	油彩	内科	横浜市・内科
山崎 嘉弘	K嬢	F 2 0	アクリル水彩	内科	静岡市
	望月さんの木	S 5 0			
山下 婦美子	ELCARDENAL	F30	油彩	内科	東京・杉並
山田 治	港夕景	F30	油彩	精神神経科	東京・板橋
吉留 邦治	クラマールの森	F 1 0	油彩	画家	東京
	ポントワーズ	P 1 2			

第47回 医家写真展

平成29年10月11日(水)～15日(日)

JCII フォトサロンクラブ 25にて

今年も千代田区にあるJCII Iフォトサロンにて、十月十一日から十五日に第四十七回医家写真展が開催されました。

二十三名の会員により四十五作品が展覧され、今回も力作揃いの写真展となりました。

会期中、中日に行われた懇親会では、撮影秘話や近況報告などを語り合い、有意義な時間を過ごしました。今回は出展作品のみご紹介いたします。

◆石井 光子

『ソックスになった大統領』

☆ユーモア賞☆



『九品仏のオブジェ』(浄真寺)



◆入江 利明

『湯の湖』



☆新人賞☆

『湯の元』



☆特別賞☆



◆岩瀬 光
『人生の坂道』(岩国錦帯橋)

『夕陽と干潟』(熊本御輿来海岸)



◆大森 佐一郎
『あやめ』



『太鼓』

☆銀 賞☆



◆押切 勝
『元気に開花』

☆銅 賞☆



『煌めくチューリップ』



◆木村 典子

『マーメイド』（ワルシャワ）



『恐怖の有刺鉄線』（アウシュヴィッツ）



◆佐々木 正

『アルプスの雲海』



『房総の春』

☆入 選☆



◆白矢 勝一

『ディナーズポット』



『レストランビューウ』



◆白矢 泰三
『日本の灯り』



『朱のひさし』



◆白矢 輝靖
『ちよい遊び』



『ちよい歩き』



☆ユーモア賞☆

◆白矢 智靖
『サンセットビーチ』



『トワイライト』



☆入 選☆

◆杉岡 宏

『三陸鉄道リアス線

「たろう駅」周辺』

☆新人賞☆



◆竹腰 昌明

『おじさんと遊ぼう』

☆入 選☆



『ヨセミテ寸景』



◆竹中 康雄

『何だろう?』



『仲良し狐』

☆銅 賞☆



☆銅 賞☆



『水面のスターダスト』

◆中野 一義
『光芒』



☆金 賞☆



『手と手』

◆中野 義宏
『段ボールの箱からこんにちは』



☆入 選☆



『湯の丸高原』

◆逸見 和雄
『つつじと白樺』



◆本村 美雄

『ポンドカサルテ水道橋』(ウエールズ)

☆特別賞☆



『仮装した尼僧』(チエスター)



◆本村 香都子

『タワーブリッジ』(ロンドン)



『衛兵交代式』(ハッキンガム宮殿)



◆松本 俊一

『放牧帰途』(ミャンマー)

☆入 選☆



『巡礼者』(チベット)



◆村上 泰
『桔梗』



『夜明けのグランドキャニオン』



◆山本 健一
『冬牡丹1』



『冬牡丹2』



☆入 選☆

◆吉元 勝彦
『雨上がりの武蔵野公園』



『武蔵野霧海』



☆銀 賞☆

第47回 医家写真展 作品目録

2017年10月11日～15日

氏名	作品Ⅰ		作品Ⅱ		専門科目
石井 光子	ソックスになった大統領(S,F)	D	九品仏のオブジェ(浄真寺)	D	品川区・歯科
入江 利明	湯の湖	D	湯の元	D	小平・内科
岩瀬 光	人生の坂道 (岩国錦帯橋)	D	夕陽と干潟(熊本御興来海岸)	D	立川・眼科
大森 佐一郎	あやめ	D	太鼓	D	盛岡・整形外科
押切 勝	煌めくチューリップ	D	元気に開花	D	東大和市・眼科
木村 典子	マーメイド(ワルシャワ)	N	恐怖の有刺鉄線(アウシュヴィツ)	N	杉並区・内科
佐々木 正	房総の春	D	アルプスの雲海	D	新宿区・整形外科
白矢 勝一	レストランビュウ(イタリア)	D	ディナースポット(イタリア)	D	小平市・眼科
白矢 泰三	日本の灯り(京都)	D	朱のひさし(京都)	D	明石市・歯科
白矢 智靖	サンセットビーチ	D	トワイライト	D	小平市・眼科
白矢 輝靖	ちよい歩き	D	ちよい戯び	D	明石市・歯科
杉岡 宏	三陸鉄道北リアス線「たろう駅」周辺	D			東大和市・整形外科
竹腰 昌明	ヨセミテ寸景	D	おじさんと遊ぼう	D	調布市・耳鼻科
竹中 康雄	仲良し狐	D	何だろう?	D	広島・眼科
中野 一義	水面のスターダスト	D	光芒	D	新宿区
中野 義宏	手と手	D	段ボールの箱からこんにちは!	D	小平・産婦人科
逸見 和雄	つつじと白樺	N	湯の丸高原	N	本庄市・眼科
本村 美雄	ポンドカサルテ水道橋(ウェールズ)	D	仮装した尼僧(チェスター)	D	品川区・耳鼻科
本村 香都子	タワーブリッジ(ロンドン)	D	衛兵交替式(バッキンガム宮殿)	D	品川区・耳鼻科
松本 俊一	放牧帰途(ミャンマ)	D	巡礼者(チベット)	D	新宿区・皮膚科
村上 泰	桔梗	D	夜明けのグランドキャニオン	D	京都・耳鼻科
山本 健一	冬牡丹1	D	冬牡丹2	D	港区・精神科
吉元 勝彦	雨上がりの武蔵野公園	D	武蔵野霧海	D	小平・内科

D(デジタル) P(ポジ) N(ネガ)

第56回ドクターズファミリーコンサート

2017年11月12日(日)シラヤアートスペースにて開催

医家芸術ファミリーコンサート



2017年11月12日

開演：14：00

シラヤアートスペース

開会の挨拶 松木 耀子

司会：玉澤 明人

- 1 テノール 浅野 尚 (千葉・耳鼻科) ピアノ 西島 麻子
燃える秋 作詞：五木寛之 作曲：武満 徹
悲しみ 作詞：リッカルド・マツツォーラ 作曲：トステイ
 - 2 ピアノ独奏 清水 裕子 (武蔵境・眼科)
ピアノソナタNo.17 テンペスト 3 楽章 作曲：ベートーベン
 - 3 ソプラノ 松木 耀子 (小平市・眼科)
帰れソレントへ 作曲：ナポリターナ
さくら
 - 4 女声コーラス 小川昭子 (狛江市・小児科) 松木耀子 (小平市・眼科) ピアノ 刑部美也子
1 埴生の宿 2 菩提樹
5 倉本 慶子ピアノ (三鷹市・眼科) 原 章彦テナーサクソ (狛江市 外科)
Overjoyed 作曲：Stevie Wonder
What a wonderful world 作曲：George Douglas
 - 6 歌 白矢 勝一 (小平市・眼科) 井上斉 (小平・耳鼻科) 中野義宏 (小平市・産婦人科)
1 この広い野原いっぱい 2 バラが咲いた
3 若い広場「NHKドラマひよっこ主題歌」 4 涙くんさようなら
休憩
 - 7 クラリネット演奏 萩原 博道 (三鷹市 外科) ピアノ長 由美子 ベース
小さな花 作曲：S. Becher
Fly me to the moon 作曲：Bart Howard
 - 8 小沢 尚 サックス 萩野 仁志 ピアノ
1 L-O-V-E 2 Blue Bossa
 - 9 原 章彦 テナーサクソ (狛江市 外科) ピアノ萩野 仁志 (町田市・耳鼻科)
オルフェのサンバー 作曲
Is't she lovely 作曲：
 - 10 奥村 秀 (小平・眼科) 萩野仁志
My favorite things 2 True love
 - 11 萩野 仁志 ピアノ (町田市・耳鼻科) ベース ドラム
作曲：
作曲：
作曲：
 - 12 フルートとピアノの合奏 高野 征夫 (小平市・胃腸科) ピアノ 竹内 綾
ノクターンとアレグロスケールツェンド 作曲 Philippe Gabert
- 閉会の挨拶 萩野 仁志

昨年11月12日に行われた洋楽部主催のドクターズファミリーコンサートが、東京都小平市にある白矢眼科医院併設のシラヤアールスペースにて開催されました。前回に続き、北多摩医師会美術展とのコラボで行われました。

今回もたくさんの方にご参加いただき、賑やかな楽しいコンサートとなりました。

今年もドクターズファミリーコンサートを開催する予定です。次回の出演者大募集です。観覧のみも大歓迎です。是非足をお運びください。日程など決まりましたら、日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』やホームページなどでご報告いたします。

一部ですが、写真を掲載しました。楽しい雰囲気伝わればと思います。皆様のご参加お待ちしております。





第六十二回 邦楽祭

邦楽評論家 宮西 芳緒

日本医家芸術クラブ邦楽部の第六十二回《邦楽祭》は、平成二十九年十一月二十三日の勤労感謝の日、例年通り日本橋三越劇場（東京都中央区・日本橋三越本店）で開催。今回も会員の先生方による意欲的な番組の数々が披露された。

開幕に先立って、日本医家芸術クラブ委員長・太田怜先生のウイットに富んだ「開会の辞」が恒例のお楽しみとなつているが、太田先生は数日

前に倒れられて入院中の由、残念なことに今回は休演されることが知らされた。

代わつて同クラブ邦楽部事務局の二村典子先生が、九十四歳になられる太田先生の病状を伝え、「湿っぽいことがお嫌いな太田先生ですので、僕のことには心配しないで大丈夫ですから、今日は一日、どうか楽しんでいって下さい」とおっしゃると思えます」と「代理のご挨拶」を述べて、開会を告げる。

一、新内小唄 『両國夜風』 『弥次喜多膝栗毛』 『隅田の名所』
なごころ
序幕は「新内浄瑠璃の心髄を少し

でも出せればと思つております」と語る佐々英一先生（ふじ松鶴弥こと、内科／世田谷区）の唄で、糸は新内小唄二代目家元・ふじ松加奈子師、上調子をふじ松美鶴師。三曲ともに宗家・富士松亀二郎師の作曲。

『両國夜風』では八月を背にして「新内流しの二人の後ろ姿を描き、『弥次喜多膝栗毛』では八月のころの出たとこ勝負の双六」になぞらえた「急がぬ旅」を綴り、『隅田の名所』では「山谷今戸に言問わば」から、八浜町」の「酔月情話」等々、隅田川沿いの地名や風情に思いを寄せる。佐々先生の丁寧な唄で、一曲ごとに新たな情景が広がって行く。



二、謡（喜多流）『井筒』

前回同様、鈴木浩之先生（外科／練馬区）と平野宏先生（同じく外科／練馬区）のおふたりの出演予定だったが、平野先生が急用で欠演となり、今回は鈴木先生おひとりだけで勤められる。



アナウンスで「観世、宝生、金春、金剛、そして喜多」と、能シテ方に五つの流派があることが紹介されて、その喜多流の鈴木先生の登場。たっぷりとした深い声で、のうし「いまはなき世に業平の、形見の直衣身に触れて」業平の衣を着た井筒の女に、業平が

乗り移ったかのむかしおとこへ恥ずかしや
昔男の移舞うつりまいを聴かせ、うつりまい夢も破れて覚めにけり」と、深い無常を湛える。

三、河東節『助六所縁江戸桜』

すけろくゆかりのえどざくら
山崎薫先生（十寸見東薫）と、小児科／台東区）と山田英明先生（内科／台東区）は十寸見東治師ほかと浄瑠璃を勤め、三味線は山彦青波師ほか、上調子は山彦真為師。

河東節三百年を迎え、三月には歌舞伎十八番の内『助六所縁江戸桜』が本興行で、また十月には記念の演奏会が、ともに歌舞伎座で上演された記念の年に、山崎先生と山田先生が、

こゝ日本医家芸術クラブ邦楽部《邦楽祭》で『助六』を披露された。

「助六といえは花川戸。花川戸といえは山崎、山田」とアナウンスで紹介されたおふたりが、代々の市川團十郎家に受け継がれて来た粹な江戸の空気を彷彿させる。



四、義太夫『仮名手本忠臣蔵・殿中刃傷の段』

嵐裕治先生（耳鼻咽喉科／調布市）の義太夫。三味線は竹本十佐恵師。前回は事件を知ったお軽勘平の「裏問」を語られた嵐先生が、今回はまさにその「事件」を語る。

「主な登場人物は三人ですが、三人しょうのもののお三様の人物像、特に高師直の憎々しい人物像を語ることができればと思っております」と嵐先生。若狭之助へ「お詫びお詫び」とへつらい、その反動のように判官はんがんに高圧的な態度をとる師直の憎態を、じっくりと聴かせた。とはいっても、落ち着いて風格

の増した嵐先生の語り口からは、師直とは対照的なお人柄が偲ばれる。



五、長唄『鷲娘』

山崎律子先生（杵屋勝くに子こと、皮膚科／台東区）は、杵屋利光師ほか

と唄。三味線は杵屋勝国師ほか。囃子入り。

「恋の思いに悩み、苦しみ、届かない思いにじれたり、クドキは思いのかなった逢瀬のうれしさに恥じらい、ついには地獄の責めに苦しみがく娘の心の妄執を、一生懸命唄い綴って参ります」と山崎先生。

「怨みのほかは白鷺の」から次第に予感を滲ませて、しっとりとしたクドキ、そして傘尽くしの華やかさから地獄の責めへと急転するドラマチックな構成を見事に表現される。華やかさと厚みのある唄が耳に快く響いて、聴く者の心深くにしつかりと届けられた。



六、小唄『勝ち名のり』、民謡『長崎ぶらぶら節』『長崎騒ぎ』

高橋杏子先生(新水豊伎こと、精神科/台東区)の唄。三味線は新水千豊師、替手は新水豊富久師。

『勝ち名のり』は、「この邦楽祭でも先輩方の名演が数多くあったことと思います。私もお相撲が大好きなので、及ばすながら勤めさせていただきたいと思います」と高橋先生。

「小説や映画にもなった、みなさまご存知の曲」「長崎ぶらぶら節」と、「もともと『わらじ酒』といいますが、料亭の玄関先で、客人の門出を芸者衆が賑やかに見送る際の祝い唄でした」という『長崎騒ぎ』。幾分遠慮がちにも見受けられたが、いずれも艶やかで伸びのある声が充分に生かされていた。



七、小唄『笠森おせん』

善平朝昭先生(春日豊七毘裕昭)と、
内科/台東区)の唄。春日豊七と毘裕美
師の系、春日豊七と毘裕美也師の替手。

「鈴木春信の美人画に描かれたこ
とから、その美しさが江戸中の評判

となり、一世を風靡した笠森おせん
は「実在した女性」で、おせんのいた
谷中の笠森稲荷前の水茶屋には「連
日、おせんを一目見ようと、江戸の町
人が押し寄せ、おせんを描いた絵草
紙、双六、手拭いなどが飛ぶように売
れ、手毬唄、川柳、芝居の主人公にさ



れたり、人形まで作られた」という。
「わたしや見られて恥ずかしい」
善平先生の繊細な唄声は春信好みの
春愁に似合って、
「春信描く一枚絵」
「散るを惜しまん 春の宵」の風情
が漂う。

八、舞踊・長唄『手習子』

「今年は九、十、十一月の初めまで
稽古をつけていただけず、こんなに
ハラハラした邦楽祭は初めてです」
というものの、小島杏里先生(尾上杏
里こと、齒科/港区)の可憐な舞踊。
尾上菊方師が後見を勤める。

「七歳のときに一度踊っている演
目ですが、今回は、初心にかえって基



礎を忘れずに可愛らしく表現できれ
ばと思います」という通り、^{はずは}蓮葉な
ものじゃえ」と衣裳を引き抜き、恋
のいろはに「からへ天神様へ願掛け
て」へと可憐に、片肌脱いで「諸鳥の
囀り」へ梅と桜の花笠へと踊り込ん
でいく。素演奏が並ぶ番組の中、本衣

裳での舞踊が美しい彩りを添えてい
た。

九、長唄『連獅子』

「前回仔獅子を踊らせていただい
た長唄の『正治郎連獅子』を、お三味
線で参加させていただきます」「連
獅子』の三味線の手は大変難しく、ま
た男性的な強さと速さが要求されま
す。私にとつては身の程を越えた大
曲ですが、いまのベストを尽くした
いと存じます」という大川尚美先生
(小児科／横浜市)は、杵屋栄八郎師
ほかと三味線。唄は杵屋利光師ほか。
唄をサポートする箇所、リードす
る箇所、器楽曲ともなる箇所を、杵屋

栄八郎師とともにひとつひとつ的確
に表現。特に仔を蹴落とす件りはさ
らに揃って、均整の取れた演奏の中
に充分な情感を湛え、獅子の狂いの
盛り上がりも堪能させてくれた。



十、小唄『茄子と南瓜』『五万石』

「四年前に先代の事務局長がお辞めになり、急遽、会員の父・山田新太郎の命にて、私が事務局を預かることとなりました」という二村典子先生(視聴ケア/港区)の唄。三味線は伊吹清寿師。

「今年のおたまより小唄のお稽古を父のおまけで始めたばかり」で、「洋楽ばかり唄ってきておりますので、どうにも小唄の味わいが出ないことに、ようやく気付いたところでございます」と自己分析されるが、喉が開いてよく通る声がかえって新鮮な魅力。あるいは三味線の地で童謡などを唄って、子どもたちの踊りと

共演したら、微笑ましい舞台になるのでは、などと余計なことを思いながら聴き入った。



十一、小唄『権八(セリフ入り)』
げんじだな
『源氏店(しがねえ恋のうずまき)』

「芝居小唄を二曲、聴いていただきます」という山田新太郎先生(整形外科/練馬区)の唄。伊吹清寿師の三味線で、かえ手は小唄幸三希師。

芝居好きが高じて、といった山田先生の小唄の世界。「権八が身の懺悔」を語るセリフから、夢覚めの廓の賑やかな場面へ一転する『権八』と、へしがねえ恋の「から、へよしてくれ、そんなんじゃねえや」と若旦那の素地を覗かせる『源氏店』の二題。演じすぎていけないが、たっぷりとした芝居心も求められる。その按配が聴かせどころ。何より芝居への愛情が感じられる唄だった。そんな世界を、三味線が優しく包み込んでいた

のも印象に残る。



切は太田怜先生（循環器科／世田谷区）が、清元佐季太夫師との浄瑠璃、清元延志佐師の三味線、清元延志佐典師の上調子で、いなせな江戸っ

子を描いた一曲、清元『山帰り』で語り納められる予定だったが、前述の通り休演となった。この原稿が掲載されるころにはすっかりご快癒されていることを願うとともに、次回はぜひ、いつもと変わらぬ粋な喉を聴かせていただきたい。

以上、第六十二回の《邦楽祭》はつづがなく終了した。

今回のアナウンサーは浜島信子氏。柔らかな声で、優しく話しかけてくれる親しさがあって、暖かいアナウンスだった。

次回、第六十三回の《邦楽祭》は、平成三十年十一月二十三日（木曜日・勤労感謝の日）に、同じくこゝ日本橋三越劇場での開催が予定されていて、ご常連の先生方の次回作が期待される。また、同邦楽部では新規メンバーを募集中の由。医療関係者やメンバーからの推薦で、邦楽好きであれば誰でも参加できるとのことなので、七十回、八十回、そして百回の公演を目指して「奮ってご参加を」募っている旨、書き添えておこう。

医家随想



トキコの青春

田辺聖子「私の大阪八景」を楽しむ

鈴木 啓之

大阪に住む少女トキコの12歳から20歳ごろまでの生活を描いた「私の大阪八景」（角川文庫）を読んだ。トキコは著者田辺聖子の分身である。時代は昭和15年から昭和21年ごろまで、主人公の成長に沿って五話が載っている。この期間はというと日本はずっと戦争をしていた。トキコはごく普通の女の子で、父親は大阪福島で写真館を経営している。私は主人公トキコのひとまわり下になる

が、あのころはそうだったなあと思う箇所も随所にあり自分の体験をふり返りながら読み進めた。

話は昭和15年にはじまる。トキコは数えの13歳、小学校6年生で時代は日支事変（日中戦争）のさなかである。トキコは定期購読の雑誌を「小学六年生」から、中原淳一の描く眼の大きな美しい少女が載っている「少女の友」（図1）に切り替える。今年（図1）は高等女学校の試験を受けねばならず憂鬱である。いまは戦争中なので体が丈夫でないとかあんのだ、頭は少々わるくても学力試験はいらんらし



図1
トキコが購読していた「少女の友」
中原淳一の描く大きな眼の少女

い、という話が伝わっていた。三学期になると、トキコがお嫁になりたいと願っている清川アキラが級長で、トキコは副級長になる。学校では毎日戦局の話がある。生徒たちは電車道にらんで日の丸を振り、

肩をならべて兄さんと

今日も学校へいけるのは

兵隊さんのおかげです

お国のために お国のために戦った

兵隊さんのおかげです

兵隊さんよありがとう

と歌いながら兵隊さんの隊列を見送る。トキコは天皇陛下のためには命も要らないと思っている。この年私はまだ3歳で、東京の目黒区上目黒（いまは東山）に住んでいた。当時の断片的な記憶がぼんやりあるものの、この日のあの時というしつかりした思い出はない。

昭和16年、女学校に入ったトキコは中学の制服制帽に身を固めた清川アキラに街で出会ったが、女学生と中学生が町なかで話すとうるさいことになるので、おたがい知らん顔してゆきすぎた。アキラに出会えたことでトキコは十分満足であった。ふたりとも大阪に住んでいるし、いつかまた会えるだろう、とそのときは考えた。何年か後になって、トキコは友人から清川アキラが「予科練へはいりはってんよ」と聞かされる。「イヤ、そう!」と答えながら、みんな散り散りになった場所で必死に戦って

いるんだなと涙ぐむ。

予科練(海軍飛行予科練習生)は中学から入隊できる少年飛行兵育成コースである(図2)。戦時下という特別な環境のなかで、男子中学生の目指す選択肢のひとつであった。私の叔父はトキコやアキラと同年輩で、中学4年で予科練に志願し入隊した。制服制帽に身をかためてわが家を訪れた10代半ばの彼は凛々しく美しかった。そのころ男の子たちは、



図2
七つボタンの制服の予科練生
10代なかばの少年たちである

若い血潮の予科練の

七つボタンは櫻に錨

今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや

でっかい希望の雲が湧く

と予科練の歌(正式には若鷲の歌)を声張り上げて歌っていた。この歌を歌うと勇ましい気分になった。戦争末期になると予科練出身者は爆弾を搭載した飛行機で敵艦船に体当たりする特攻隊で出撃し多数が戦死している。搭乗する飛行機がなくなると人間魚雷回天や水上特攻震洋などの特攻兵器にまわされるようになる。

昭和16年12月に、日本はアメリカ相手の戦争に突入する。トキコたちは教頭先生からことある度に、「日本の臣民に生まれて天皇陛下の御ために死ぬ、これほど有難い、うれしいことがあるうか」と聞かされる。トキコは、戦場でタマに当たって死ぬ一級品の死に方ではないと値打ちがない、女に生まれてはずかしいとまで思う

ようになる。開戦当初は勝ち戦を重ねていたが、やがて戦局は不利になっていく。昭和18年、日本軍はガダルカナル島から退却する。アッツ島の将兵は玉砕する。4月には山本五十六聯合艦隊司令長官が戦死する。

山本長官戦死のニュースが報道された晩は、私の家族全員がラジオにかじりついて放送を聞いていた。ときどき家人が「うおー」と声にならない悲憤のため息を発した。6歳の私はその夜の家のなかの異様な雰囲気、部屋の間をうづくま

って眺めていた。開戦劈頭、ハワイ真珠湾攻撃を敢行した山本聯合艦隊司令長官は子供たちの間でも神様であった。小さな男の子たちは将来何になりたいかと問われると、兵隊サン、陸軍大将、海軍大将、聯合艦隊司令長官



図3
金属回収令で集められた寺院の梵鐘



図4
戦時中のポスター
銀座の街頭と思われる

と答えた。遊びは近所の原っぱで毎日戦争ゴッコである。

まもなく兵器生産の金属が不足し、町では金属の供出がはじまる(図3)。トキコの家でも鉄瓶を供出する。トキコの母ちゃんは「こんな鉄瓶ひとつやふたつ供出したからいうてなんぼの飛行機がつくれますか」と言う。トキコは「そうかてこの戦争はアジアから鬼畜米英を追い払って、圧迫民族を解放するための聖戦やで」と学校の先生から聞かされているとお

りの言葉で反論する。「ほうか、ほんなら、聖戦いうもんは金のかかるもんやなあ」と母ちゃんも負けていない。私のまわりでも、お寺の鐘や目黒川にかかる橋の金属製の欄干が無くなってしまった。渋谷駅の忠犬八公像もなくなつた。ダイヤモンドも供出の対象で、母親は国に差し出したダイヤの指輪のことを戦後いつまでも言っていた。

街には「欲しがりません、勝つまでは「ぜいたくは敵だ」などの標語が

目に入る(図4)。「ぜいたくは敵だ」の標語を作ったのは戦後「暮らしの手帖」の編集長をとめた花森安治である。この標語に誰かがひと文字を書き加えて「贅沢は素敵だ」とした。官憲に見つかればただでは済まない時代にあつても、庶民の機知と気骨はたくましい。昭和19年になると、戦局はますます悪化し太平洋の島嶼で玉砕が相次ぐ。秋ごろ母親に連れられて小学校に行き先生に名前や住所を答えたり、ボールを投げたりした。あとから考えると入学試験であつた。校舎の白い壁に職人さんが黒いペンキを塗っていた。空襲に備えた迷彩のためである。

年が明けて昭和20年4月は小学校(当時は国民学校と称した)に入学のはずであつたが閣議決定により授業が1年間停止となり、ランドセルを背負うこともなく毎日家で過ごしていた。3月10日の深夜、東京の下



図5
焼夷弾を投下するアメリカのB29爆撃機

町をターゲットにしてB29爆撃機約300機が襲来し大量の焼夷弾を投下した(図5)。この空襲により木造家屋は焼けつくされ、死者は10万人に及んだ(図6)。これを皮切りに毎晩のように空襲があり、警戒警報が発令されると防空頭巾をかぶって防空壕に退避する。

この頃になると、真つ昼間にB29爆撃機が東京上空を飛行機雲を吐き



図6
空爆により焼け野原となった東京の街並み
余燼がくすぶっている

ながら悠々と飛ぶようになる。5月24日の深夜、防空壕に退避していると、外がピカツと真昼のように明るくなったと思つたらバラバラバラと焼夷弾が落ちてきて一面が火の海になつた。火を噴く焼夷弾をヒヨヒヒと飛び越えながら逃げているひとがいる。見たことのない光景をぼう然と眺めていた。「逃げるのよ」と母に言われて我に返り、背中に妹を



図7
小学校（当時国民学校）1年生の
国語教科書の最初のページ

負ぶった母と世田谷区若林の実家まで歩いて避難した。三宿の練兵場を通つたら、サーチライトの光が一直線に夜空を照らしていた。何軒もの民家が燃えていた。

この空襲を契機に埼玉県の祖父の実家に疎開して、その1年生に編入学した。はじめて登校した日、若い女性の担任の先生に連れられて教室に入る。はじめに教壇の上に掲げら

れた皇居(当時は宮城といつた)の二重橋の写真に最敬礼するように言われ、深々と頭を下げる。授業は国語で、最初のページは「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」だった(図7)。疎開生活がはじまると、母は慣れない手に鋤を持ちサツマイモ畑の耕作をはじめた。

この年トキコは女子専門学校の2年生になる。5月に同盟国のドイツが降伏する。6月沖縄守備隊が全滅する。大阪にも頻繁に空襲があり、6月の大阪大空襲でトキコの家は写真館もろとも焼失してしまう(図8)。8月6日広島、9日長崎に原子爆弾が投下される。

8月15日、正午に重大放送があるというので、トキコの家族はラジオの前に集まる。放送がはじまり天皇陛下(昭和天皇)の流れる。

《ここに忠良なるなんじ臣民に告ぐ》

「へえーこれが陛下のお声」「ほんまに陛下かしら」

《帝国臣民のこうねいを図りばんぽう共栄の樂をとにもするは》

「わかる? いうてること」

《世界の大勢また我に利あらず》

「何や、戦争もう止め、いうてはるとちがう?」「どうも、そや、思うけどねえ」「本土決戦いうてるのとちが



図8
空襲で灰燼に帰した大阪の街
後方のビルは高島屋大阪店

うか」

「堪え難きを耐え、忍び難きを忍び、もって万世のため太平を開かむと欲す・・」

「戦争がおわり、いうてはるねんわ」

「勝ったんかいな、負けたんかいな」

「負けにきまったある」「やっぱりそうですのん」「はあ、まあ、くやしいねえ、ここまでがんばってさ」「やっぱり神風は吹きまへんでしたな」「くやしいねえ、くやしいねえ」

こうして戦争が終った。

トキコは日記帳に「・・・父とも仰ぎまつる大君を頂いて日本民族、一致団結、これから先の何十年かつづくであろう幾多のいばらの道を断乎として踏みしめ、最後の光明を仰いでひたすら、つとめにはげんでゆくのみである。おわり」と記した。

トキコが青春を過ぎ去った昭和10年代は日支事変、太平洋戦争と戦争がずっと続き、心のうちには天皇陛下

下がどしりと重く存在している。

私は終戦の玉音放送を疎開先の家で聞いた。近所の人々が放送を聞きに集まってきた。抑揚のある声がラジオから聞こえてくる。言葉が難しくて内容はまったく解らない。放送の途中で同居の叔母が泣き出し、これは大変な放送らしいと察した。太陽がカッと照りつけ、蝉しぐれのやましい8月の晴天日であった。陽射しを照りかえす乾いた土の白さが印象に残る。

9月から東京の小学校が再開されると連絡があり、すし詰めめの汽車に乗って帰京する。外壁が白黒まだらの迷彩を施された校舎で授業がはじまった。はじめての授業は、1から100まで言えるひと、1000まで言えるひとなどと聞かれて手を挙げた。「授業中に便所に行きたくなったら、いつでも行つていいです」と言われてびっくりした。

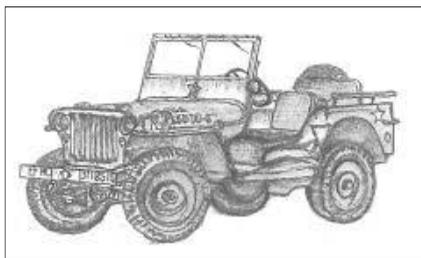


図9
進駐軍のジープ
アメリカ軍の象徴でもあった

ラジオからはいつも、赤いリングに、くちびる寄せてだまって見ている、青い空
りんごは何にも、いわないけれど
りんごの気持ちは、よくわかる
りんご可愛いや、可愛やりんご
と並木路子の歌う「りんごの唄」が明るく流れていた。街の通りにはアメリカ兵の乗った進駐軍のジープが行き交っている(図9)。

トキコは小学校時代の友人から「亡くなったなといえ、予科練にいかはった清川アキラさんもですわ、何やらエキリかチフスに罹りましたんと・・・」と聞き「まあ、清川さんが?・・・そう」と小さくつぶやく。

予科練から復員した叔父は、敗戦が受け入れられなかったのか怒声を発したりしてしばらく荒れていたが、やがて大学を出て中学の教諭となり定年までつとめ昨年89歳で亡くなった。在職中は課外活動のボーイスカウトで手旗信号を教えていたという。手旗を振るときはいつも海軍飛行予科練習生だったのである。ずっと後になって、「なんで予科練に行ったの?」と尋ねたら、「亡くなった母親がいるところのすこしでも近くに、と思っただ」という返事が返ってきた。

天皇陛下のご巡幸を大阪にむかえる。陛下の姿が見えると、トキコのと

なりにいた引揚者のトラさんが「陛下、苦勞しなはったなあ。お互い、まあえらい目にあいましたな。長生きしてくなはれやア、陛下、これからだつせ、陛下」と叫ぶ。トキコもホロつと涙をこぼす。天皇陛下バンザイの声がひびく。そしてトキコの戦後時代がはじまる。

私は毎日都電(路面電車)に乗って通学した。「民主主義になったから、先生が生徒にビンタしたら先生がクビになるんだって」「うちのお母さん、こんど戦争になったらもう逃げないで、家族みんな一緒に死のうって言うてるんだ」休み時間にこんな会話をしていた。「戦争はもうコリゴリ」という母親のつぶやきが、幼なころにも身に染みた。

学校の行き帰りに通る
渋谷の駅前広場から道玄

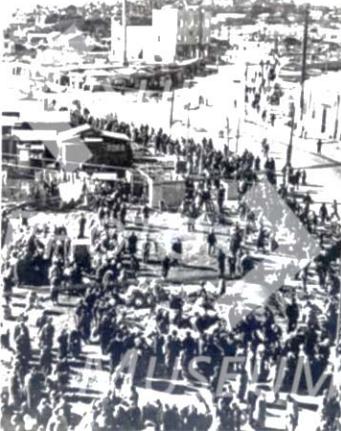


図10 昭和20年 渋谷駅前の闇市
写真上方の三叉路の角あたりは恋文
横丁とよばれ今は渋谷109ビルが
建っている

坂一带はヤミ市の露店がひしめき、汗と埃と食べ物匂の匂が一緒くたになった異臭に包まれ、その日を生きるひとびとの熱気がたぎっている。焼け野原に立つヤミ市はサバサバして明るく、学校帰りに露店を一軒一軒覗くのは楽しかった(図10)。

戦後間もなくアメリカのチューイングガムを1枚もらった。いい匂いがする。端っこをゴマ粒ほど齧るととても甘い。ちよびちよび齧って全部食べてしまった。チューイングガムは嚙



図 1
ハーシーの板チョコは宝物であった
1枚を10日間ぐらいかけて食べた



図 2
いまの忠犬ハチ公像
(渋谷駅前、2018年1月撮影)



図 3
中央の細長いビルがいまの渋谷109ビル
(2018年1月撮影)

むものだと後で知った。ハーシーの板チョコ(図11)は宝物で、1枚を10日間ぐらいかけて食べた。米粒ほど齧っても甘くて苦いチョコの味がした。忠犬ハチ公像は終戦の3年後に再建され、いまは外国人観光客の恰好な撮影スポットになっている(図12、13)。

「私の大阪八景」は、ごく普通の人がびとが戦争の激流に翻弄されながら

懸命に生きてきた時代の話である。重くきびしい時代の話であるが、主人公のトキコはいつも前向きのヴィヴィッドな少女であり読後感は明るい。随所にまざる大阪弁の会話が庶民のしぶとさ逞しさを教えてくれる。玉音放送の難しい文言と、それを聴きながらトキコたちが交わす大阪弁とのコントラストは絶妙で文学的である。田辺聖子は多年にわたる作家活

動により、平成20年皇居宮殿松の間にて現天皇陛下から文化勲章を親授された。茫茫70年、往時をふり返るときトキコの作者田辺聖子の心情やいかん。

著者の軽妙な語り口につれて、幼少の日々の追憶にひたりつつ感慨深く味わった1冊である。

チエーホフを読む (15)

ある邂逅

藤倉 一郎

主人公エフレムは故郷の村の焼失した教会の再建資金を集めるために馬に荷馬車をひかせて鐘を鳴らしながらお布施を集めているのだった。この広大な針葉樹林の光景の描写は美しくチエーホフの作品を魅力的なものにしている。

道ばたで奇妙な百姓にであった。クジマと名乗る男はいろいろと声をかけて、エフレムは教会の基金集めをしていることや、雷が落ちて教会が全焼してしまったことを話した。おしゃべりなクジマはエフレムが給料目当てにまわっているのかとか、馬は村会のものかとか、馬が死んだらどうするかとか、追いはぎにあつたらどうするかとか、お布施がいつ

ぱいになったらどうするかしつこく聞いた。

村にたどりつくくと、エフレムは鐘をならしてお布施をおねがひした。馬車が村をまわる間もクジマはしゃべりつづけ悪ふざけやいたずらをした。エフレムは宿にはいり、馬車から馬をばなしこの家の聖像の前にお布施箱と自分の聖像を安置して食事にかかった。その後自分の聖像の前に立つて祈りをあげた。そして寝入り、明け方目覚めるとクジマはエフレムに「聖者さん、白パンを食べるかい？」といった。エフレムは急に跳ね起きると胸を探り、「金がなくなつた!!」といった。「何の金だよ」「金さ、26ルーブルだよ」「俺が盗つたとしてもいふのかい、言いがかりをつけやがって、この唐変木め」クジマは拳をふりあげてエフレムの顔をなぐりつけた。「これでもくらすえ、もう一発やつたらか！聖者であるうと何だろうと容

赦はしねえからな！」

エフレムは祈りをあげるとお布施箱と聖像をもつて宿を出た。クジマは少し離れて荷馬車の後をあるいていた。クジマは「馬鹿の一つ覚えのように神、神とぬかしやがる。俺が盗んだつたら、俺を裁かせりやいんだし、もし俺が盗んでいなかったらおまえは名誉毀損だぜ」

エフレムは気のない調子でもの静かに言った。その無関心な平静な態度がクジマをうろたえさせた。クジマは相手の気持ちかわからぬまま、いったい彼が何を考えているか、どんな恐ろしいたくらみを秘めているのかエフレムを上目づかいで眺めていたが、ついに話し方を変えた。

「負けたよおっさん、お前をからかうわけにはいかねいや。すぐむきになるんだもの、さア お前の金を受け取りな。俺はふざけてみたのさ」クジマは数枚のルーブル札を取り出

してエフレムにつきつけた。クジマはさながら神を探し求めるように聖像をみつめ、空を仰いだ。

「許してくれ、お願いだ」彼は全身をふるわせて「じいさん、許してくれ」と懇願した。

エフレムは罪をつぐなうために、せねばならぬことをクジマに説き聞かせはじめた。「神父に懺悔して、贖罪の苦行をうけること、使ってしまった金を托鉢してマリノフツイへ送ること。その後はクリスチャンらしく静かに誠実に真面目に世をわたること」をさとした。

クジマは話を聞いて落ち着きをとりのどし、次第にけるつとして荷馬車がテリバーエヴォにつくとエフレムが休んでる間に酒場へ行った。

2時間ほどエフレムは休んでいたが、それでもクジマは酒場から出てこなかった。酒場の中で彼がののしったり、大騒ぎをして、酒場で喧嘩が

始まっていた。

エフレムはテリバーエヴォを出発した。信仰厚いエフレムは気落ちして出発したのである。一方クジマは一度は改心したかにみえたが、元の性格は変わることなく、飲んだくれて周辺に悪態をついているのである。対極的な人物の邂逅だったが、二人の人生はそれぞれに意味があるのだろう。チェーホフの冷やかに眺める眼がみえる。

シジユウカラ (四十雀)

とのつきあい

浜名 新

私どもの住まいがある杉並の自宅には、申し訳程度の坪庭がある。移り住んで、かれこれ35年以上経つ。坪庭にまつわる話である。

今まで10年に1回程度の外壁塗装、手すりなどの鉄骨のペンキ塗装、台風被害後の屋根の葺き替え、1階の床のはりかえ、最近、風呂場を大幅改修、段差なし、天上からの暖房と換気、長方形の浴槽で体を伸ばしてリラックス出来るようにした。

階段に手すりを付けたのは3年前であつたか。高齢者用に改造をほどこしてきた。建てなおす決断は出来ないでいる。

カミサンと所帯を持ったのは昭和45年(1970)2月。世田谷区経堂の宮坂町の4畳半の2部屋から始まり、調布市若葉町の中古の戸建てを購入、5年くらい住んだ。通勤の駅は京王線の仙川駅を利用。両隣の戸建ての新築と環境の変遷で、転居を考えざるを得なくなった。

バブルの始まる頃、杉並区松庵の新築物件が気に入って購入。公道ひとつ隔てた公園に、若木のソメイヨ

シノ・ケヤキ・柳・ユブシ・モミジが育っているのも大いに気に入った。

中古の戸建てを売って、新築を購入するので、売り買いの手続き、ローンの設定、だまされないように、心労が重なり、ヘトヘトになった思い出がある。通勤駅は西荻窪駅。

授かった子供たちは、すでにおのおの独立して、職業を持ち、区民・県民として、公民権の務めを果たしている。

私どもはおフタリさまに戻り、後期・前期高齢者となって、お互い趣味には干渉しないことにしている。ささいなことから声が大きくなるが、高齢者のご愛嬌か。

私は都立病院を定年退職し、民間の療養型病院に入職、10数年を経た。事務長の言では、医師には定年がないが、いつかやめなければならず、他人から指摘されないうちに、自ら判断してその時期を決めなければなら

らないと肝に銘じている。周囲に迷惑が及んでからでは遅いから。

カミさんは、井の頭恩賜動物公園のボランティア活動に参加して10年以上になる。活動の内容を詳しくは知らないが、子供に大人気のモルモット、リス園の案内、見張りとか、お客からの問いかけに、ガイド役として案内・説明など、それなりに役割があるようだ。

井の頭恩賜動物公園の長生きの象の「はな子」が亡くなり、銅像が吉祥寺駅北口前の広場に飾られている。

ボランティアを始めて間もない頃、ボランティア仲間の巣箱作り名人から小鳥にまつわる会話から話が弾み、シジュウカラ専用の巣箱をいただいた。シジュウカラ専用の巣箱とは、巣穴のサイズが径2.8cmぐらいのサイズで、シジュウカラがなんなく通れるサイズだということだ。

善は急げ、とばかり、カミさんは、

ひとり、背伸びして、さらに左右の手をかざして、南高梅の木の二股の枝に、悪戦苦闘して、巣箱をしつかり固定させたそうだ。梅の葉は濃い緑色で、しつかり枝に張り付いていた頃であった。

早めに巣箱を取り付けた理由は、9月頃からシジュウカラはツガイ(番)になり、抱卵する場所を選ぶのはメスで、早くからメスが興味を示し、気に入ってもらう必要がある。

その巣箱は、名人作だけあって、風雪に耐え、現在も健在で、翌年から巣箱内で2回ずつ、シジュウカラの雛たちが巣立っている。我が家のお宝となった。

ご近所の野鳥の会の、大変有名なA氏から、「餌がなくなる冬の1月から2月に限り、餌付けをするのはかまわないでしょう」とアドバイスを貰ったカミさんは、早速実行に及んだ。有言実行がカミさんの長所でも

ある。

今度は餌付けの準備である。

市販の殻付きピーナツをどこからか仕入れ、糸・針で串刺しにして、小枝に橋渡しして吊るしておく。ピーナツはシジュウカラの好物である。ブラブラした獲物を狙い、試行錯誤でようやく取り付いて、空腹を満たそうと必死である。

豆腐を入れたプラスチックの容器の底の4隅に穴を開け、紐を通して切り株断端に乗せて固定し、西友で仕入れたヒマワリの種を一握りくらいの量を入れて待つ。

また、写真撮影用のフィルム入れの小さい、白い容器を利用して、適当な甘さの、砂糖水を満たしておく。季節に応じて、ミカンやリンゴの小片を提供したこともある。以上が餌付けの全貌である。

シジュウカラはピーナツの殻をくちばしでつつき、殻を破り、実を見つ

けると実をつつき小片を飲み込む。

時に、丸ごと実を口に咥え、辺りをキョロキョロとうかがい、すばやく近くの樁の茂った小枝に移動し身を隠し、実を足指で固定し、くちばしでつつき、砕いた小片を口に飲み込む仕草が見られる。餌をほおぼる動作は、まさに一途で、くちばしでつついて殻を壊す動作は、彼らには何の違和感も無いようだ。

メジロは砂糖水の容器に近づくと、しばらく観察し、敵がいなことを確認し、くちばしを容器内にいれ一口ついでむ。害が無いことを確認し、あたりをキョロキョロして警戒を怠らない。敵から身を守る習性は、小鳥たちにも受け継がれている。

ぶうたいの大きいヒヨドリは、メジロの仕草、つまり、白い容器の液体をついばむ様子を観察していたのか、餌が欲しいとき、口が乾くとき、坪庭の白い容器を見つけ、飛来するよう

になる。フェンスをピョンピョンとスキップし、小枝に取り付けた容器に近づく。用心深く、敵がいなことを確認すると、くちばしを容器内に入れ、ゴクツ、ゴクツと豪快に飲む習性がある。

ヒヨドリが来ると、メジロはさておき、シジュウカラは一目散に繁茂した茂みに逃げ込む。

そこで、ヒヨドリとたまたま遭遇した場合、私どものどちらかが追い払うと、ヒヨドリは樹木で体を隠し、フェンスに留まり、直ぐには飛び立たず、目的を達しようとする。ヒヨドリが常連になると、シジュウカラには敵そのものに違いなく、心情的にヒヨドリを追い払いなくなる。

野鳥達が餌場で空腹を満たす滞在時間は、せいぜい1—2分くらいで、せわしく行動し、体温を維持し、糞を出して身軽になり、敵に襲われないように、絶えず身構えているように、

みえるのかもしれない。

坪庭には小さい池があり、上方に水浴び場がある。ウグイスやジョウビタキがやってくる理由かも・・・

日曜の朝、食事中、あるいは食後コーヒーを喫しながら、坪庭に仕掛けた餌場に、シジュウカラ、スズメ、メジロ、ヒヨドリなどが集まり、餌をついばむ姿を垣間見ると、なんともいえない、慶びを感じる。共に、生きているのを実感する。

餌場を設けてから既に10年余になる。近年、ヒマワリの種は切らしたことが無い。砂糖水は冬場のみ。

お宝の巣箱から、毎年、シジュウカラの雛が育っている。育った雛達はその巣箱を覚えていて、回帰するのにか否か定かでない。

平成29年3月中旬から5月にかけて、坪庭の梅ノ木に仕掛けたシジュウカラ占用の巣箱(巢穴径3cm弱)に例年のごとく、シジュウカラの産坐

造り↓抱卵↓孵化↓雛↓巣立ちの展開がみられた。

シジュウカラのペアが、子孫を残すため、抱卵の準備のため、3月中旬から、コケ類などを口に啜え、巢穴から巣箱に入るのを確認すると、安心する。応接間のカーテンを閉めて、安心して巣づくりができるようにしている。

その回数たるやおそらく数え切れないほどで、その一途な行動に頭が下る。子孫を残さねばという種族の本能に他ならない。

オスとメスで交尾するのを見たことが無い。

メスは10個くらい卵を産み落とすから、抱卵するそうだ。

メスによる抱卵が始まって、約2週間で孵化し、雛になる、雛になれば2-3週間くらいで、巣立っていく。5月の連休明けから中旬あたりが多い印象です。

雛が空腹に耐えかね、我先にえさをねだる鳴き声がジージーと、やましく聞こえ、巣立つ頃、カラスが飛来して、巣立った鳥を狙っている。無事に巣立ってくれと願わずにはいられない。

親鳥のえさを運ぶ回数も尋常ではない。子育ての愛情はすごい。平成29年初回大きく育った8羽くらい、2回目は数羽巣立ったようだ。

僕は例年10月頃、巣箱を点検し、巣立ち出来なかった雛が、ミイラになっっていないか確認している。産坐は5cmくらい厚さ、コケ類が主体で、犬の毛など混じっていた。

産坐を除去し、巣箱を空にして、翌年の抱卵の準備をする。巣箱の内部をよく洗い、1-2週間天日干した後、梅の木にしっかり固定する。今回、はしごを使い、突風にもびくともしないように固定した。

29年の10月の終わりから11月

にかけて、シジュウカラの想定外の行動に、すぐおどろいた。

帰宅して夕飯を食べ終わり、茶碗などを洗い終わると、カミさんが見せたいものがあると、やおら坪庭側のガラス戸を開けた。

午後8時過ぎの時刻で、外はまっくらである。居間は灯りで明るい。窓から光が外に向かつて、鈍い光を照らしている。だが、窓に沿って鎮座した花台に、雑多な鉢植えが並び、光を遮って、やや暗い。

カミさんがネズミ捕りの籠を運んでくると、籠の中に1羽のシジュウアラがいるではありませんか。

ネズミ捕りに、生のピーナツを餌に使ったそうで、まさかシジュウカラが入るとは予想外であったようだ。よく観察すると、腹側に幅広の黒いネクタイがある。始終見かけているオスに違いない。

「よっぽど腹が空いていたのかね。

好物のピーナツに、怖いもの知らずで、入ってしまったのか」「そうに、違いないわ。意外な子ネズミでした。それじゃネズミ捕りの蓋をあけて逃がすから」

カミさんがネズミ捕りの蓋を開けた途端、シジュウカラはあろうことか、ガラス戸を開けたまま居間側に立っていた僕の頭上から、いきなり明るい居間に飛び込んだ！

2人は嘩然とした。それから、ひとしきり、シジュウカラの捕物騒動が繰り返り広げられた。

虫取り網も無く、やむを得ずハエ叩きで追っても、居間の空間を飛翔し、瞬時に視覚で確認するのか、対角線上の止まる箇所を確保する。シジュウカラの両の目は、黒くて観察できないが、なにやら不気味にひかっていた。追い回された経験も無く、怖い初体験で、悔し涙があふれていたのかも知れない。

なおも追いかけていると、天井とカーテンレールの隙間から、廊下側の物置の棚にある、色々な物の奥に隠れて、姿を現す事はなかった。

その頃には、カミさんも僕も、疲労困憊で、あきらめ、明日の朝に期待しました。その夜、寢床の中でシジュウカラが水不足でぐったりし、飛べないのではないかと危惧した。

今考えると、そのままにして、朝、辺りが明るくなってから、蓋を開ければ自由になれたではないか。シジュウカラを追い回すことも無く、怖い思いをさせなかったではないかと。私どもは「鳥目」に気付かず、合理的判断に欠けていたと反省した。

翌日僕は早番勤務で、6時10分に出勤した。居間と物置側の仕切りのカーテンを片側に寄せて、多少明るくなった居間に、シジュウカラのお出ましを誘ってみたが、姿を現さずじまいでした。電車にゆられながら

少しは気になっていたが・・・。

帰宅すると、カミさん曰く。7時前寝室から居間に来ると、窓にシジウウカラがいて、窓を開けてくれ、と催促していたそう。周囲が明るくなり、外に出たい一心で、窓側に飛んで来たに違いない。カミさんはシジウウカラと目をあわせ、労せずして、戸を開けた途端、サーッと外へ飛び立つたそう。

そのエピソードがあつて2週間くらい過ぎた、ある日の朝、6時半過ぎ、鉢植えに保水するべく戸窓を開けて外に出た。居間側のネズミ捕りに、やはりシジウウカラが鎮座しているのを見つけた。オスのようだ。そこから1段下の軒下に置かれたネズミ捕りのなかにも、シジウウカラがいるではないか。びっくり。こちらはメスのようだ。

どうやらいつも餌場に来ている、
常連のペアに違いない。

カミさんは、それ以降ネズミ捕りの籠に生のピーナツを留め置かなくなった。

ネズミ捕りの籠に餌欲しさに生け捕られたのはネズミ・メジロ・スズメ・ヒヨドリ・シジウウカラ。

ネズミはチンチンの湯で天国へ：。
ここ数年、餌場にはヒマワリの種が毎日一握り置かれ、シジウウカラの楽しみになつていよう。

今は、数羽飛来し、実がないのを片端からポイツと捨て、実のある種を口に啜えてどこかへ飛翔し、あるいは小枝に移動し身を隠して、種を足指で固定し、くちばしでつつき、実を露出して食べている。

椿の小枝が揺れて、リズミカルな音が響いていれば、「ああ、ヒマワリの種を食べているな」とわかる。

—— ちいさな、小さな天使たちよ、学習して、しっかり生延びて、来

春、君達の子育てを、楽しみに待つて
おります。(29、12)

ヒトとライオン

出来 尚史

メソポタミア——

アッシユルバニパル

大英博物館でライオン狩りのレリーフを見た。新アッシリア帝国の首都ニネヴェから出土したものだ。王宮の壁を飾っていたという。展示室は広くて長い部屋だった。両側の壁すべてがレリーフで覆い尽くされている。途切れることなく続くのは王によるライオン狩りの光景だ。王の名はアッシユルバニバル。紀元前七世紀、帝国に最大の版図をもたらした傑物である。

戦車に乗った人間が幾頭ものライオンを目がけて矢を放っている。矢は次々と空を飛び、ライオンに突き刺さる。それでもなお歩こうとするライオン。力尽きて倒れ伏すライオン。一方で形相凄まじく戦車に跳びかかるライオンもいる。槍を構えて迎え撃つのはアッシュルバニパル王その人だろうか。

描写は秀逸だ。人間こそ横顔ばかりで表情に乏しいが、馬やライオンは実にリアルに表現されて、臨場感あふれる作品となつている。車輪の軋む音、蹄の轟き、ライオンの咆哮まで聞こえてきそうだ。二千六百年の時を越えメソポタミア草原の一大ドラムが蘇つたかの感がある。このレリーフは中東の歴史遺産の中でもその芸術性が高く評価されていると聞いた。むべなるかな、と思う。

しかし感動もそこまでだった。半分も見終わらないうちに、私の中に

不思議な感情が湧き起つてきた。いや一歩踏み込んで不快感と呼んだ方がよいかもれない。あまりにもたくさんライオンが殺されている。狩り、というよりむしろ一方的な殺戮だ。人や家畜を襲うライオンは確かに悪者だろう。成敗されてしかるべきといえる。しかしいくらなんでもこれは——悪者退治の域を超えているのでは？

ライオンの数が多すぎるのも不自然だった。ざつと数えて二十頭近く。そのほとんどが雄ライオンというのも珍しい。へある日王様が狩りに出かけた。森に近い草原で大規模な、しかも雄だらけのライオンの群れに出会いました。こんな都合の良いことが果たして起きるだろうか。私の知るところによれば「ライオンは一〇三頭の雄と、二〇十五頭の雌、その子供たちからなる群れ（プライドと呼ぶらしい）を構成する。縄張り

意識が強いため、プライド同士が結合して大きな集団をなすことはない」はずなのだが。

と、心中もやもやしたところで解説を聞いた。驚いた。ここに描かれているライオンは事前に捕獲され、飼育されていたものだといふのだ。そうか、予め必要な数のライオンをプールの善悪はともかく、話は通じる。雄を中心に群れを編成することだって可能だろう。

狩りの儀式の当日、準備された狩場、あるいは闘技場にライオンが放たれる。民衆が見守る中、王が兵士と共にそれを狩った。人間にとつてライオンは強力で残虐な敵であり、混沌たる獣の世界の代表だ。片や高貴さの象徴である王は、神々から支持されて世の中に秩序をもたらす。ライオン狩りに成果をもたらすことで、王は民にその絶対的な権威を知らし

めた。一方で天の神に向かい、地上の王としての自らの立場を祝福されたいと祈った。

最後のところは想像にすぎない。

王が天に祈ったかどうかは不明である。しかしいずれにしても、これが宗教的意味合いを持った大行事だったことに間違いはなからう。矢が飛び、槍が突き出され、ライオンに命中する。ライオンは断末魔の咆哮とともに地に伏す。そのたびに観衆は大きく手を振り、歓声を上げた——もしそうだとすれば、現代の感覚からいうと異様ともいふべき光景だ。

後に知ったことだが、こういったライオン狩りの催しはアッシュルバニ・パル王の時代よりもはるか昔から行われていたという。歴代の王は仕留めた獣の数を楔形文書に記して己の力を誇示した。幼いライオンを成獣になるまで育て上げ、狩りの場に供することもあつたらしい。

時代が違ふ、場所が違ふと言つてしまえばそれまでだが、この隔たりは越えがたい。私は別にライオンの味方をしようというわけではない。ライオンに「残虐」というレッテルを張るのなら、人間も十分残虐たりうる、と言いたいだけである。

ところでこのレリーフにはもう一つ気になる点があつた。ライオンがずいぶん小さく描かれていることだ。王を讃える作品だから、王を大きくライオンは小さく、というのが製作する時の常道だろうが、それにしても小さすぎる。後肢で立つてやつと人の背丈ほど。アッシュルバニ・パルがたとえ2 mの大男だつたとしても、ライオンの頭胴長は後肢の分を差し引いて1.5 mといかにも小型だ。当時のメソポタミアに住んでいたのはいったいどんな種類のライオンだつたのか。興味の尽きないところだが、この話は次章に譲る。



ギリシャ——ヘラクレス

へ半神半人の英雄ヘラクレスはデルフィの神託に従い、ミケーネ王の命によつて十の難業を成し遂げるべく旅に出た。その最初の試練がネメアのライオン退治であつた。このライオンはエキドナ(上半身は女、下半身は蛇の怪物)から生まれ、不死身といわれた猛獣である。

案の定、ヘラクレスが放つた矢は硬い皮膚に弾き返されて役に立たなかつた。洞穴に追い込み棍棒で殴つたがそれでも倒れない。とうとう最後に彼は腕をライオンの首に巻き、絞め殺しにかかつた。死闘の末、ライ

オンは絶命した。

ヘラクレスはその皮を剥ぎ、自ら被つて凱旋。以後頭部のついたその毛皮の外套は彼のトレードマークとなった。死したライオンはゼウスの計らいで天に上り、獅子座として夜空に君臨する。

以上がヘラクレス伝説「ネメアのライオン退治」のあらましである。あらましというには我ながらお粗末な纏め方だが、まあ大筋はこういったところだ。

ここで問題。これはいつの時代の出来事か。またネメアの怪物の正体は何だったのか。神話や伝説にもながしかの歴史的事実が隠されているものだ。荒唐無稽な作り話と切り捨てることなく、しばしこの英雄譚の謎を追つてみようと思う。

まずは時代の推定から。舞台となったネメアはペロポネソス半島北東部の地名だ。コリントの

南西、ミケーネの十km北に当たる。この地に人々の定住が始まったのは紀元前六千〜五千年のことだという。紀元前二千年には、古代ギリシャ語を話す民族が南下してペロポネソス半島に入ってきた。彼らはミケーネやティリンスを中心に高度な青銅器文明を築く。いわゆるミケーネ文明である。

この文明は紀元前十五〜十三世紀にかけてそのピークに達したが、ちょうどその頃、先行するミノア文明（クレタ島中心）の神話を包含した形で、今日に伝わるギリシャ神話の原型が誕生したと考えられている。もちろんヘラクレスの神話もその中に入っていた。

彼の活動範囲は広く、東は黒海東端のホルキス、南はエテイオピア、西はイベリア半島にまで及ぶ。いくらずい世出の英雄とはいつても、全てを彼の功績と断じるには無理がある。

それぞれの土地の伝承を一人の名のもとに集約したのであろう。だが少なくとも、ネメアのライオン退治はヘラクレス自身の武勲であった、と私は考える。なぜならばネメアはミケーネのお膝元であり、ミケーネそのものがヘラクレスに所縁の深い場所だったからである。

ジョーゼフ・キャンベルによれば、「原始の時代から生き延びた怪物の多くが、今だ辺境に棲息し、悪意や自暴自棄の念を持って人間社会と敵対している。そうした怪物は退治しなければならぬ(中略)したがって英雄の行為の根底には邪魔者を取り除く使命がある」(『千の顔を持つ英雄』関根光宏訳・早川書房)であった。ネメアはペロポネソス半島にあるとはいえ、ミケーネからみれば辺境である。このキャンベルの文章の後に続くのは「かくして英雄は怪物を退治すべくネメアへと向かった」という

ことになろうか。

ところでこの伝説、ミケーネ文明の時代に原型ができていたとすると、それより前、いったい何時頃の出来事と考えればよいのだろうか。

「英雄崇拜についての神話は、ある程度発達した高文化にならないと見られない。ある程度の規模とまとまりを持つ社会でなければ・・・社会のために活躍する英雄像を共有することができない」(松村勇『世界神話事典…英雄』角川ソフィア文庫)

この記述を参考にすると、人々がネメアに入植した紀元六千〜五千年が上限となってくる。この時期からミケーネ文明が開いた紀元前千六百年頃の間に、件のライオン征伐は起きたと考える。ここでもう少し範囲を狭めたい。紀元前六千〜三千年というのはいかがか。

この数字を挙げた理由は、かの伝説に「怪物の皮膚はヘラクレスの放

つた矢を弾き返した」の下りがあるからだ。確かに怪物は驚異的に硬い皮膚を持つていたかもしれない。しかし、立ち向かう方の武器の甘さも関係したのではないだろうか。ズバリ言おう。彼の使った武器は青銅器ではなく石製だったというのが私の推測である。

つまりこれは青銅器が導入される前、新石器時代のできごとなのだ。石製の矢じりや槍は金属製の物と比べると切れ味も悪く、耐久性に乏しい。なかなか致命傷を与えられないといったこともあったに違いない。それにもう一つ、彼が棍棒を使ったというのもその時代を思い起こさせる。もちろんそれら狩猟道具は当時の最新鋭。人々はそれぞれの得物を手に策略を用いて動物を狩った。集団で当たれば、大型の動物や猛獣相手でも十分効果があった、と思われるのである。ヘラクレスのライオン退治

も単独で遂行したわけではないだろう。

「ミケーネからやって来た勇氣ある若者が、村人と協力して怪物ライオンを仕留めました」

真相は案外こういったところに落ち着くかもしれない。当たり前のことだが一人の力でライオンを絞め殺すなど、まず不可能である。

さて、そろそろ話をライオンに戻そう。最終目標はネメアのライオンの正体を探ることだったが、その前にヨーロッパのライオン事情を覗いてみたい。

今から七十万〜三十万年前(更新世中期)のヨーロッパには、ヨーロッパホアアナライオン (*Panthera Leo fossilis*) という種類のライオンが棲息していた。イタリアやドイツで化石が見つかっている。推定頭胴長⁴ 2.4mというから巨大だ。現生ライオンの少なくとも^{1,2} 1.2倍はある。その名

の示す通り、洞窟を住処として大型の動物を捕食していたらしい。

この時代すでに人類との接点が認められる。スペインのアタプエルカ遺跡から出土した骨には人類がライオンを食べた形跡が残っているという。ライオンが人類の主要食糧だったとは考えられない。しかし狩りの獲物を巡って争う、襲いかかるライオンに逆襲する、など真剣な戦いの場面は少なからずあったことだろう。非力な人類が捕食者に対抗する。その最初の一步を踏み出した時代、といえようか。

ヨーロッパホラアナライオンが歴史の舞台から消えた後は、新しく登場したユーラシアホラアナライオン (*Panthera leo spelae*) の天下となった。前者から分化したと考えられているこのライオンは、約三十七万年前に出現して以来、四度の氷河期を生き抜いた。寒冷期には洞窟を

拠点とし、温暖な間氷期には森や草原を生活の場としたらしい。マンモス、ウマ、トナカイ、バイソンなどが主たる獲物であった。彼らは短期間でユーラシア大陸ほぼ全域に分布を広げ、シベリアからアラスカ、北西カナダに進んだ。北米大陸では独自の变化を遂げ、アメリカ (ホラアナ) ライオン (*Panthera leo atrox* : 三十四万〜一万一千年前まで棲息) と呼ばれる大型種に変貌を遂げている。ユーラシアホラアナライオン自身も推定頭胴長 2.1 m 以上、体重三百四十キロというから現生ライオンよりかなり大きい。その強靱な肉体と鋭い牙、爪をもつて三十万年の長きに亘り地上の獣王として君臨した。

同時期に生きた人類は旧人類ネアンデルタール、後に新人類クロマニヨンである。彼らの残した洞窟壁画や彫刻を見ればユーラシアホラアナライオンのイメージがおぼろげなが

らわかる。どうもこの獣は頸周囲に短毛を生やしているだけで、いわゆるたてがみを持たなかったようだ。また現在のライオンには見られない薄い縞模様あるいは斑点があつたと推測されている。少ない資料で判断すべきではないが、その大きさといい姿形といい、ライオンとは別の動物かと思いたくなるほどだ。

DNA 解析によれば、ヨーロッパホラアナライオンとユーラシアホラアナライオンは同系統に属し、アフリカライオンとは近縁だが差が大きいという。これを踏まえて最近では、ホラアナライオンの学名の *leo* を外し、それぞれを *Panthera spelae fossilis*, *Panthera spelae* と呼ぶうという意見もあるようだ。

二〇〇八年、ロシアで保存状態の良いユーラシアホラアナライオンの標本が発見された。調査によれば、その毛皮は非常に厚く、密集した波状

の下毛を硬い保護毛が覆っていたらしい。寒冷な気候への適応であろうが、通常のライオンには見られないこの皮膚の構造は実に興味深い。

ここでこの話がどこに収まるかわかったと思う。そう、私が考えるネメアの怪物はこのライオンなのだ。洞窟にすんでいたこと、桁外れのサイズ、怪物としてのカリスマ性、そしていかなる刃も通さない鎧のような皮膚——どれをとっても英雄ヘラクレスの相手に相応しいではないか。

アッティカから出土した紀元前六世紀の壺には、ヘラクレスとライオンの戦闘のシーンが描かれている。それを見るとライオンはたてがみを欠き、襟毛のみ。おまけに斑点がある。想像されるユーラシアホラアナライオンのイメージそのものである。十七世紀のスペインの画家スルバランの描くネメアのライオンにもたてがみがない。何らかの形でこのライ

オンの真の姿が後世に伝わった、とみるのは無理だろうか。

ユーラシアホラアナライオンは更新世末にはその数を減らし、完新世に入ってから一万年程前には滅びたといわれる。しかし、一部はその後も生き残り、ごく限られた地域に棲んでいた可能性も否定できない。ネメアのライオンもそのうちの一個体であったと考えたい。片や、かつてのユーラシアの覇者、不死身の怪物ライオン。此方ゼウスの子、超人ヘラクレス。さぞかし激烈な戦いであったことだろう。

待てよ、という声が聞こえる。ネメアのライオンにはたてがみがなかった？ それはおかしい。ヘラクレスの外套には確かたてがみが付いていたようだが？ おっしゃる通り。だが、あれはライオンはライオンでも別のライオンから取った毛皮なのだ。ヘラクレスはネメアに赴く前にギリ

シヤ中部のキタイロンでライオンを殺している。それがあの頭付きのコートになった。私はそう考える。

もちろんキタイロンのライオンはユーラシアホラアナライオンではない。一般にヨーロッパライオンと呼ばれているものだ。完新世の初め頃から歴史時代に至るまでヨーロッパ大陸南部全域に分布していたライオンである。イベリア半島、南仏、イタリア、バルカン半島の温暖な森林地帯に棲息し、大型、中型の草食獣を狩った。ユーラシアホラアナライオンと違ってたてがみを持つ。大きさは現在のアフリカライオンと同程度だったようだ。ホラアナライオンの子孫ではなく、アフリカライオン（*Panthera leo*）の系列だといっつ。それもアジアライオン（*Panthera leo persica*）に近いのだそうだ。更新世の終わり頃、アジアライオンはアフリカライオンから分かれ、二

万年前には一部はヨーロッパに、残りの中東、インドへと進んだ。前者のグループがいわゆるヨーロッパライオンとなる。ライオンの亜種 *Panthera leo europaea* として認められるかどうかはまだ異論のあるところだ。

ともかくこのライオンは、少なくとも一万年前にはギリシヤに棲んでいた。ここに関わる人類はネアンデルタール人でもなく、クロマニヨン人でもない、現生人類ホモ・サピエンス・サピエンスである。ヘラクレスがキタイラスで成敗したのはこのライオンであり、その毛皮が彼のトレードマークである外套となったのだらう。

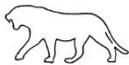
先に推定した紀元前六千〜三千年という時代はヨーロッパライオンにとつて最盛期であった。その後は人類の進出と共に徐々に数を減らした。紀元一世紀までにはヨーロッパのほ

とんどの地域で絶滅したと言われる。害獣として駆除されただけでなく、狩りの対象となっていたことが大きい。古代ローマでは闘技場で使うために大量に捕獲された。ヨーロッパ本土にライオンがいなくなると、アフリカの亜種バーバリーライオンを生け捕りにするためモロッコ、アルジェリアにまで出向いたという。追うものから追われるものへ、ここに来てライオンと人類の立場は大きく変わったと考えることができる。

前章に挙げたメソポタミアのライオンは *Panthera leo persica* のうちヨーロッパライオンと別れアジアに入ったグループのうちのひとつだといわれる。アフリカライオンに比べて一〜二割ほど小型だったようだ。彼らは一時期シリアからインドにかけて広範囲に分布していたが、人間との争いに負けて追いやられた。中東の君主によるライオン狩りを生き

延びたものたちも、近代になると英国人の狩りの対象となり激減した。現在西アジアには自然棲息例はなく、インドの国立公園で五百頭ほどが保護されているだけだと聞く。

この原稿を書いている時にニュースが入ってきた。新聞によれば「二〇一七年九月、シベリアの永久凍土からユーラシアホラアナライオンの幼獣が凍結状態で発見された」そうだ。二〇一五年にも同種の子供ライオンが二頭、シベリアで見つかり、世紀の発見と言われていた。今回の標本も保存状態が良好らしい。これによって謎の多いホラアナライオンの生態や、他のライオンとの遺伝学的つながりが少しでも明らかになることを期待したい。



アフリカ——

リヴィングストン

リヴィングストンは医師にして宣教師、そして偉大な探検家である。三度にわたってアフリカに赴き、原住民の教化啓蒙に努めた。西洋人で初めてアフリカ大陸を横断したのも彼である。途上、巨大な滝を発見し、当時のイギリス女王の名に因んでヴィクトリアの滝と名付けた話も有名だ。彼はまた奴隷の売買に心を痛め、生涯を通じて黒人奴隷の解放を訴えた博愛の人であった。

その第一回目のアフリカ滞在の時、リヴィングストンはライオンに襲われ重傷を負っている。ボツワナのマボツァという村で起きた一八四四年の事件である。それはおおよそ次のような出来事だった。

「原住民や羊がライオンに襲われた

という話を聞いてリヴィングストンは銃を携えて現地向かった。辺りを探っていると突然ライオンが跳びかかってきた。銃を二発撃ったがライオンはひるまず彼の肩に噛みついた。ライオンに倒されたリヴィングストンを見て彼の助手が慌てて近寄り発砲した。だが、弾は不発だった。ライオンはリヴィングストンから離れ、助手の方に向かっていった。そして突然倒れ、絶命する。リヴィングストンが打った弾がここにきて効果を現したのだった。」

リヴィングストンはこの時受けた傷で終生左腕が不自由だったという。しかし命があつて幸いだった。ライオンの牙がもう少し深く胴にまで達していたら、今日まで賞賛と共に語られる彼の物語はなかったことになる。リヴィングストンはその生涯をアフリカ原住民のために捧げ、一八七三年北ザンビアのチタンボで没し

た。

私がリヴィングストンとライオンの話を知ったのは絵本を通じてである。小学校へ上がる前だったように思う。本を開いて最初の何ページ目にその衝撃的な絵は載っていた。草原が舞台だった。リヴィングストンを目がけてライオンが跳びかかっている。恐ろしい目で睨みながら、口を大きく開けて——。

幼かった私はこの絵にすっかり心を奪われた。もちろん他のページに絵や、書いてある内容にも興味を引かれていた。特にリヴィングストンと米人記者スタンレーとの対面のシーンは感動的だった。それでもやはりライオンが一番だ。男の子にとつて百獣の王ライオンは神に近い存在である。この絵を見ながら藁半紙に何枚も何枚も模写した。描き始めはいつも「コ」の字型に開いた口だった。ここから頭、胴、肢、尻尾と続け

ていくのだ。私の心はライオンのみに集中。主人公であるリヴィングストンのことはあまり頭になかった。

リヴィングストンを襲ったのはクルーガーライオンだろうか。マボツアの位置から推測した。アフリカライオンにはいくつかの亜種があるそうだが私にはその区別がわからない。種類はともかく人や家畜を傷つける迷惑ライオンであったことは確実だ。

ライオンが人を襲うことは滅多にない。周囲に獲物がなくなった状況下、あるいは年老いて草食獣を追えなくなった時に限られる、とよくいわれる。しかし、この説は疑わしい。元氣なライオンが人を襲った記録はいくらでもあるようだ。

最悪の例として挙げられるのは十九世紀末に起きたツァヴォオの人殺しライオンの事件である。鉄道敷設に雇われた人たちが二頭のライオンに狙われ、三十名を超える犠牲者がで

た。甚だ狡猾な獣で、警備の隙を突く神出鬼没の攻撃だったという。九か月にも及ぶ攻防が続いた。最終的には現場監督のパターソンが二頭を射殺して、この事件の幕は閉じる。このうちの二頭は六発の銃弾を受けてようやく絶命したと伝えられる。急所に命中するならともかく、一、二発当たったくらいではライオンはなかなか死なないということだ。リヴィングストンの打った弾も当たってはいしたが、即座に倒すところまでは至らなかつた。げに恐ろしきライオンの生命力である。

そもそも人間はライオンに勝てるのか？ ある本にこんなことが書いてあった。「ライオンは百mを3.5秒で走る。」長距離はともかく短距離のバネは群を抜いているということだ。これが本当ならば、百m先に突進してくるライオンを見つけたとしても、銃を構え、狙いを定めているうちに

ライオンはもう目の前にいる。どう頑張っても間に合いつかないではないか。たとえ銃を持っていても一人で立ち向かうのは無理だとわかる。

アフリカの原住民は少し前まで弓矢や槍で狩りをした。いや現在でもなお銃を使わない民族もいるらしい。例えばマサイ族。伝統的生活様式を保つ遊牧民だ。彼らは食糧獲得の目的での狩猟は行わないが、家畜を護るための猛獣狩りをする。ライオンはその第一の標的だ。若者が勇氣ある戦士となるための通過儀礼としての意味もあるらしい。法で禁止されているにも拘らず、今だに行われているという。

私は以前「マサイ族の戦士がたった一人でライオンを倒した」という話を聞いたことがある。彼はどのようにして凶暴なライオンを倒したか。その方法はこうだ。

（地面に小さな穴を掘り、槍の石突

を入れる。槍の穂先は迫ってくるライオンの方に向けて把持し、やや下方に構える。ライオンが跳びかかろうとした瞬間、槍を持ち上げその胸元に穂先を合わせる。ライオンは猛烈な速度で槍に突っ込む。槍は地面に固定された状態なので動かない。いきおい穂先はライオンの胸に深々とめり込んでいく。なるほど、非力な人間を地球が支える形になるのか。これなら一対一でも勝てるかもしれない、とつい思ってしまう。

実はこのライオン殺しの方法、思わぬところで使われるのを見たことがある。見たとはいっても映画『ザ・ワールド(原題 The Edge)』一九九七年)の上での話だが。アンソニー・ホプキンス扮する主人公が、アラスカの山中でコディアックベアを倒す場面がそれだ。

〈彼は太い木を削って槍を作り、その元の端を岩の隙間に挟んで固定し

た。巨大な熊が覆いかぶさるように襲ってくる。彼はタイミンクを合わせ、熊の胸に目にかけて槍先を持ち上げた。熊が突っ込み、槍は熊自体の重みでその胸を深く貫く……〉

映画の作者、あるいは原作の著者はこの戦法をどこかで知り、ここに応用しようと考えたに違いない。私がマサイの勇者の話聞いたのは大學生の頃だった。映画を見たのは三十年以上も後。熊相手の応用バージョンをスクリーンの上で見ることになろうとは思ってもみなかった。

マサイ族は通過儀礼としてもライオン狩りを行うと先に書いたが、元々これも大切な家畜が襲われたことへの報復、また予防措置としての狩りから派生したものである。同族によって地域のライオンがかなりの数減ったという報告もある。だがライオンの減少は土着民の狩りが原因、とばかりはいえない。

かつてライオンは、砂漠や熱帯雨林の地域を除くアフリカ全土に分布していた。今はサハラ砂漠以南の限られた場所に棲息するだけだ。調査によると一九九〇年代からわずか二十年の間に約40%、その数を減らしたという。原因として挙げられるのは生息地の減少や人との争いである。前者は気候変動による自然環境の劣化が主因であろうが、人類の進出による影響も否めない。後者は人とライオンとの衝突そのものだ。自衛手段としての殺生はまだわかる。しかし娯楽目的や毛皮目的の狩猟は許されるものではない。

人類は地球に登場して以来、その進化の過程で様々な種を滅亡に追いやってきた。他の生物との共存という観念は頭の中になく思われる。そろそろ己の愚に気付いてもよさそうなものだが――。

今、手元に一冊の本がある。昭和九

年発行の『全動物圖鑑』（日本動物研究學會編・泰明堂）。父の蔵書だったものを生前に譲り受けた。開くと哺乳類の六ページ目にライオンが出て来る。脊椎動物―哺乳類―食肉目―ネコ科、シシ（獅子）英名ライオン、とある。学名は *Felis leo* となっていた。当時は *Panthera*（ヒョウ）属には分類されてなかったようだ。

横向きのライオンが精緻に描かれている。説明にはこうあった。

「……近年マデ印度地方ニモ生息セシガ、現今ニテハ殆ンド阿弗利加、亜細亜ノ西部ニ限ラル……」

インドのライオンはその後わずかな生存例が確認され、前章で述べたように現在はギル森林国立公園で五百頭ほど保護されている。この図鑑に記された西アジアのライオンが最後に目撃されたのは一九四二年、イランでのことであった。

動物図鑑も最新の研究成果や情報

に合わせて内容を書き換えていかねばならない。二十年後、三十年後の図鑑にはどのような説明が載るだろうか。私の曾孫がページを開いた時、ライオンの項にはただ一言「絶滅種」と書かれていた、そんなことのないよう心から祈りたいものである。

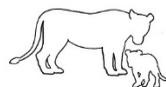


絵本の記憶を頼りにリヴィングストンとライオンの絵を描いてみた。しるろ六十五年も昔のことだ。覚えているのは、跳びかかるライオンと、草原と、青い空のことだけ。リヴィングストンや周りにいたはずの原住民がどんなであったか、全く頭に浮かんでこない。そのライオンも右を向いていたか、左だったか曖昧だ。したがって出来上がったこの絵はあらかた私の想像図ということになる。事実と異なるところがあっても勘弁願いたい。

この絵本、多分「アフリカ探検」と言った言葉が付いていたと思うが、どこかに残っていないだろうか。もし入手できれば、私の描いた絵と比べてみたい。幼いころの記憶がどれほどあやふやか、あるいは少しでも似ているところがあるのか、この目で確かめられればと思っている。

もう一つ、心に抱いていることがある。ウエストミンスター寺院にあるというリヴィングストンの墓を訪れることだ。子供の頃はライオンの事ばかり頭にあった。大人になつてからリヴィングストンの方に関心が移っている。暗黒大陸といわれたアフリカで彼はどう生き、どう死んだか。「彼の探検はヨーロッパ列強による植民地化の足掛りを作つた」と非難する向きもある。だが私は、アフリカの人々とその生涯を共にした彼の純粹な魂をいささかも疑うものではない。

アフリカでは今なお各所で紛争が続いているようだ。諸外国の思惑も絡み、平和で安定した新世界の実現には程遠い感じだ。泉下からリヴィングストンの嘆きが聞こえてきそうな気がする。



私はこれまでアフリカに行ったことがない。大自然に生きる動物たちを見たいという願望はあるが、まだそのための心の準備ができていない。探検に行くわけじゃなし、なにを大袈裟な、と笑われるかもしれない。けれど私にとつては一大事、なかなか決心がつかないのである。

アフリカに行く代りに国内のサファリ形式の動物園には繁く足を運んでいる。「果てしない大地、駆け回る野生の生き物たち」は無理としても、檻の中では見られない動物の生の姿に会えるような気がするからだ。

多摩動物公園のライオンたちもその意味でかなり迫力ある見学対象といえる。バスに乗って放し飼いにさ

れているライオンの群れの中に入つて行く。広い園内で、歩いたり、寝そべったり、じゃれ合ったり、走ったり——彼らの自由な動きを見るのは楽しい。餌台に乗つたライオンがバスの窓に密着してくると、皮膚の下に強大な筋肉が波打っているのがわかる。捕食者として進化の頂点にある獣の姿だ。

全部で十頭以上。これらの殆どがこの園内外の動物園で繁殖したものだ。と聞いた。生まれて一度もアフリカの大地を見たことがないライオンたち。サヴァンナを駆けて獲物を追うこともない、祖先から受け継いだ優れた狩りの能力を発揮することもなく、一生を終える運命のライオンたち。彼らは東京の空の下で何を考へて生きているのだろうか。

最後にこのライオン園を訪れたのはもう五年以上前になるが、私はその時のことを克明に覚えている。見

学が終わってバスを降り、動物園のゲートをくぐって外に出た時のことだ。ライオンの吼え声が聞こえた。一頭が吼え、別のライオンがそれに応え、次々と連鎖して、ついに不気味な斉唱となった。ライオンの咆哮は深く、重く、腹にずしりと来るような恐ろしい響きを持っている。五マイル先から聞こえるというから、いかに大きな声であるかがわかる。身を護るもののない場所で、しかも暗闇の中でこの声を聞けば、どんなに豪胆な者でも震え上がるに違いない。

閉園時間が過ぎ、空は茜色に染まりつつあった。ライオンの咆哮はまだ続いている。その声は、晩秋の空に向かってどこまでも高く高く昇って行った。彼らは一体何を話しているのだろうか。まだ見ぬアフリカの話でなければいいが——。これからもずっと祖先の元には帰れない。その運命を知った上で、なおサヴァンナの

夢を見続けているとしたら、そんな悲しいことはない。ライオンの言葉がわからなくてよかった。私はこの時ほどそう思ったことはない。

北アルプスでの診療

八潮 弘三郎

そろそろ大学も定年である。宏史は大学院に進学すると同時に附属病院の内科で臨床に携わることになり、以来東都大学での教員を続けている。あと一年で大学も定年である。就職して働いたという実感はない。九時五時の毎日勤務の義務がなくなる目前となつて、自分が鍛錬や我慢の修行のためのような、趣味的な興味の継続のためのような、またやりかけ作業の完遂のためのような毎日を一

日一日過ごしているうちに、とうとう四十年が過ぎてしまった。実家は横浜の相鉄線の鶴ヶ峰にあった。晩年両親二人ともが病気がちとなり、宏史は自分の勤務する大学病院で繰り返し入院をしないといけない状態まで悪化した病気の治療を繰り返してきた。急に症状が悪化し往診したまま急いで大学に緊急入院しなければならぬ機会が増えてきた。世話をする方もさせる方も段々負担になつてきた。家族で相談し宏史の住んでいる大学近くの団地に両親が引っ越ししてもらうことになった。両親が住み慣れた土地から離れる心配もあったが、元々彼らは転勤族で、育った土地に住み続けていたわけではなかったたので、品川の団地への引っ越しも病院への通院の利便性が勝り新しい生活がスタートした。予想通り、宏史が勤務する大学付属病院に繰り返し入院することになり、複数科への継続的、通院が必要になり、交通の利

便性が確保され引つ越しは目的にかなった機能を果たしてくれた。宏史は六歳年上の姉に指示を仰いで、両親の病気の世話を続けていた。しかし引つ越して数年すると、彼らの元々の持病と新たに発生した病の発端医療で対応したものの相次いで夭寿を全うすることとなった。宏史は幼少期より六つ年上の姉に頼りつきりで、幼児期の体験をそのまま五十年並行移動し、両親の相続の手続も彼女に構想に委ねた。姉の構想は両親の使っていたマンションを宏史が相続し余りの現金部分で大改造し、仕事部屋を作って宏史が医学の作業所として使うというものであった。宏史は一族の分家の跡取りなので、両親が他界した後、相続が姉の構想でつつがなく進んだタイムリングで、本家からお呼び出しがあった。江戸時代ではないのだからと思うが、武

家の作法そのままに、分家の跡取りとして墓の管理を任せられ、分家のご先祖の関連の一族にとつてのお宝を授かった。日清戦争で戦死した一族の誇りでもある信陽様の肖像画が佐賀県立美術館に貸してある。そのお宝の絵画を宏史に手渡すので、しかと受け取れとのお達しであった。期日が指定され、リフォームが完成したばかりのマンションで待っている

と、引つ越し大手の美術品部門の方々が物々しく、ぐるぐる巻きにされた油絵が届けられた。洋画壇の重鎮による作品があるのは親戚の集りの折、本家から聞いてはいた。リフォームが完成したばかりの廊下の正面に大きな肖像画を安置した。以降仕事場に入入りする度に信陽様の肖像に必ず挨拶するようになった。宏史は分家の墓守であるので、青山にある比較的広いスペースが確保されている一族のお墓の横に大きい墓石が

おいてありそこに信陽様が眠っている。宏史や彼の家族と共によく両親の眠るお墓を訪ねているが、墓参りの折には必ず両親が安置されている一族のお墓の右側にある信陽様のいらっしやる墓前にも必ずお参りをしていた。今度は直接一族の中で洋画壇の一角をなすまでになった名人による筆による肖像と日常対面することとなった。もう仕事部屋での対面でご挨拶する様になって五年余りになる。「そうだ。この機に私の仕事の区切りの話しをご先祖様に聞いて頂こう」と思った。

さっそく宏史は信陽様の肖像画の前に椅子を持っていき、愛用の革表紙の手帳に書いてあるリストを広げ、まず状況を説明してから、語りかけるように話し始めた。

そろそろ自分は大学の定年を迎える。医学部を卒業と同時に大学院に進学し、同時に附属病院の内科で臨

床に携わることになり、そのまま大学に残りあと一年で大学も退任となる。大病院医師の研修は大病院以外での臨床を体験し、初期及び中期の研修は大学と関連の病院を行き来しながら広く内科診療を学んでいく。内科以外の外科小児科なども同じシステムになっている。しかし私は一度も大病院から関連病院に出張することなく大学で仕事を続けることとなった。私は研修三年目の時に所属していた自律神経班が研究室として独立することが承認され、当時助教であった田平先生が研究室の責任者として教授に就任した。今から考えると田平先生を教授になっていたただくために研究室が大きい内科から独立させたように思う。それまでは愁訴を自律神経の側面特に起立性低血圧による脳血流の減少の病態解明をテーマにして研究してきた。独立を節目に田平先生はメンタルな

側面からのアプローチを取り入れることを新しい教室の方針とした。メンタルなアプローチの導入は現代の社会ニーズと受療側の理解を考えれば新設の心身医学の教室には当然の流れではあったが、三十年以上前の独立時に心理療法的な治療を加えることは衝撃であった。それまで研究室をまとめてきた二人の講師が研究室から離れていった。お一人は総合病院の内科部長に、もうお一人は開業された。予定の転身だったのだとは思いますが、内科医がメンタルなものを扱うことへの理念の違いがあったと思う。そのため当時若手の教授として田平先生は教室を支える水戸黄門様で言えば助さんと格さんを同時に手放すこととなり、教室は一気に弱体化した。この変化は私が大学の三年生の時であり、更年期女性の内分泌をテーマにした研究があまり始めていたこともあったが、心

理面を治療に加えることは是非必要だと考えていたので、医師歴が十年以下の中堅医師数人と共に移籍した。間島君は同級生で総合内科と一緒に入局した仲間、救命や腎センターなどの特殊な診療部門のローテーションは二人ずつペアになって回るようになっていた。私は医局の問題児であったので、安定感のある間島君がお目付け役としてペアとなったように思う。ローテーションはハードな勤務な部門ばかりで一緒に回って寝食を共にしないとやっていけない状況であったこともあり、身の上のことを色々相談する機会も多かった。呼吸器を専攻することになっていた間島君は僕の進路には反対であった。「眼科は目を対象とし、耳鼻咽喉科は鼻や耳を対象にする。内科は身体科で精神を扱う必要性は解るが必ず行き詰る」と移籍を思いとどまるこ

とを説得された。尤もな論旨ではあったが、身体面の検査治療であつても入院時の不安や不眠がしばしば起こることを観察していたことと、自分自身の幼少からの生い立ちに関連した不安への疑問もあり、これらの病態の解明を手段としての修行してみたいと強く思うようになっていた。先のことは考えずに、父親の運営している医療施設を継承するなどの将来の進路が保証されない自分にとっては、大学でまず博士号の獲得を目指すことにした。私が選んで間島が適切でないと指摘した心身医学には研究費の枠もなく、適切な論文の投稿先も整備されていない状況ではあったが、近い未来だけの目標設定をして第二内科から心療内科へ移籍して稼働することにした。新設の心療内科の外来は開店休業の時もしばしばであったが、外来は毎日初診のフルオープン体制でスタートした。

そのため要員不足が深刻となり、全く大学での外来診療体験のない宏史までも診療要員に組み込まれていった。そんな状況で、始まって心療内科であったため、以降私は関連病院に出張することなく、大学での診療を続け、心療内科でのスタッフとしての職位も拝命することになり、とうとう心療内科に二十年近く最後は教授として在籍することになった。

ここまで一気に宏史は、先祖様を前に話した。「信陽様は日清戦争時の将校であられたので、医師の世界と違う部分と似た部分があるとは思いますが、組織としては似ていると思います」と総括し、話しを続けた。そもそも私が医学部に進学することになったのも、自分は身体も弱く、気も弱い線の細い子であったので、母親はこの子に大学受験は難しいと考えていたようだ。父親の強い希望で、いや一族の理念的な流れに従え

ば幼稚舎から大学までの一貫教育を良しとされてたので、父親の通った学校への進学をなぞることが求められていた。子供ながらにその十字架を背負って、母親のプログラムした進学塾に二年間通いそれなりに準備が仕上がった状態に近づいていた。六年生の夏にプール熱が流行し、たまたま私も感染した。プール熱の経過は一週間程度で軽快することが一般的ではあった。しかし自分はその後二か月間微熱と頭痛が続き、大事な受験前の準備期間を病後の回復のための臥床の日々に費やさないといいなくなり、ただでさえ知恵が追い付かない遅れた発達をしていた私には決定的な準備不足となった。もちろん幼稚舎からの一貫教育をしている総合大学付属の普通部は中学受験の最難関校でもあり、私には全く及びでなかった。私では普通部の不合格は当時の能力相当と幼いながら納

得していたが、母親は正念場に心身共に弱い子と考えていたようだ。中学入試では当時新設であった中高一貫校の人気校にもぐりこむことができた。これも家庭教師を請け負ってくれ、長期に療養を強いられた約二か月の遅れを補って学習支援してくれた当時高校生であった姉のおかげであった。この新設校は同じ法人の傘下にある医学部に内部進学する制度が中学受験の情報としてよく知られていた。この新設の中高一貫校に私は進学したものの、成績は下三分の一を低迷し医学部進学どころではなく、進級がやつとの状態であった。中学三年生の時に、父親が東南アジアに海外赴任し母親も一緒に赴任し、更に六歳年上の姉はその少し前に結婚して家を出ていたため、自分一人が日本に残ることになった。その後三年間父親の海外赴任が続いたが、その間私は体力に自信がなかったこ

ともあり、加えて同級生との対人交流も苦手だったので、ひとりでも過ごすことを好むようになり祖母の家に世話話になりながら、祖母の家にも溶け込めず、学校にも溶け込めず、抛り所を失い姉に叩き込まれた中学受験の学習マニュアルを応用して、それまで定期試験前にだけ姑息にしていた勉強を4年後の大学入試に目標の設定を変え、孤独ではあるが、膨大なあり余る毎日の時間潰しを始めた。時間潰しには高い目標もあった方がいいかなと思いついて、進路についても教師に相談すると、「成績の悪いものは皆が嫌う科目を扱え」という不思議な指示を受け、その指示が私には妙にフィットするように思えた。数学と物理は定期試験で零点を取ったことがあるくらい苦手で嫌いな科目であったので、手元にあった参考書の例題を繰り返し暗記した。中学の教師のちよつと不思議なアドバイスのた

め多くのものが嫌うという理由で進路は理系になり、嫌いなことを反復して暗記しているうちに、いつの間にか成績だけは上澄みに押し上げられていた。母親は私が高校三年の時に帰国するが、父親との葛藤も多くあり家族構造が崩れる一歩手前の状況が続く、私の成績が主な関心にはなっていないだったので、三年ぶりに恐る恐る進路面接に行ったようだ。三年前は地を這う成績であったことは母親もよく覚えていたようだ。担任の教師から受験校の選択には困らない偏差値を持っていることの説明を受け、医学部の内部進学の方を即断したようだ。心身共に弱いためにとも大学受験には耐えられないと判断していたようだ。元々信陽様の一族を見渡してみても医学に関係するものはおらず、したがって医学を継ぐことが運命づけられている代々のクリニクもなく、私には医師に

なる必然は全くなかったと言っていると思う。その後の進路については医学部を六年学んでいるうちに自分が病弱で苦しんだ状態を説明してみようと思うようになっていた。それには内科の自律神経班が最適で、さらに心療内科に改組されて更に好都合となった。尤も新設された心療内科の主なテーマは薬物による治療の開発で、私には興味から遠い領域であったので、まだ確立していない独自の領域を自分で作って行けばよいと考え、大学での臨床実践を続けながら探索を続けていった。その結果とうとう四十年も大学で過ごすことになってしまった。

宏史はここまでやってきた経緯をご先祖様の前で話しまった。「ここにたどり着くまでの大変だった部分はまた別に機会にお聞きいただきたいので、ここでは大いに端折っています。思い出すと涙が出そうなところ

もあって、このところは改めて、信陽様にお聞きいただきたいところで」と流れ鼻水をぬぐった。宏史は私を最大支えてもらっていた妻にこのあたりの内界のモヤモヤを伝えているとしばしば号泣してしまうので、今日は別の趣旨を伝えたいので、ちよつとやめておこうと思っていた。

振り返ってみると、全般的な医師としての素養を身に着けるために総合的な内科の教室に所属し、所属した研究班が独立したために移籍し、その後人手不足を補う要員として自らを位置付け独自の領域を二十年間前へ前へと取り組んでいるうちに、高名な初代教授の定年退職に合わせて、助さん格さんよろしく教室に二人いた助教を同時に昇格する申請がなされることになり、どうゆう審査過程だったのかはわからないが、二人ともが教授の職位を頂くことになった。もちろん小さな教室に二人

も教授はいらないので、三級先輩に教室を継いでいただき、私は教室を離れることにしていた。他学の研究領域の近接していた関連の方々事情を相談すると、何人かの方が骨を折ってくれ、複数の医科大学のポストが可能な状況が作られた。自分は心療内科でありながらプライマリケア医学と言われていた総合的な診療を旨とする領域の学会の教育研修委員長と長く勤めていたこともあり、丁度世の中も大病院のような総合病院では領域別の細分化が進む中、総合診療が必要だという機運が高まりつつあったので、買手市場が動いていて私のような中途半端なものにも他学からのオファーのある状態であった。実際自分の所属している大学の理事長に東京にある同じ程度の規模で運営されている私立大学から、割愛の話しが申し入れられたようである。自分は所属している教

室以外に大学執行部に移籍の話しが持ち込まれ、割愛を受け入れてもらうことが必須であることを知らなかった。そんな経緯で丁度医師になつて二十年目に起こるはず職場の異動は、大学の執行部が受け入れなかったことから実現しなかった。自分が進路で転機を迎えていた頃に、中年の出社困難などの適応障害の要因を分析する研究を依頼される形で手掛け、判つたことは四十歳から四十五歳の時期に男性は大きな転換点があることが日本でも米国でもヨーロッパでも指摘されていたことを知った。自分自身も同じように年齢的な転換点に至っていたことが、今から思えば合点がいく。しかし四十五歳で中年期進行中の時にはそんな自分自身への客観的な自己分析はできてはいなかった。定年を一年後の間近に控えた今に至つてやっと、どうして現在の道を行んでいるのかという必然

を自分でもやっと掴みかけてきていると思う。私が心療内科で教授に昇格して以降、指示されるままに東都大学の管理業務に転向した。まずは医学部で初期研修の新規制度に対応する様に構築をし、さらに専門医に向けた次の段階の研修を有給で継続できるように構築した。医学部を離れるように指示され大学全体の男女共同参画に関する構築、研究の支援、外部資金の獲得のための組織の構築など全て新規の取り組みをしながら新組織を運営してきた。それらの管理の業務の仕事の中で、最も魅力的でスリリングでかつ全く未経験なワクワクするような取り組みは山岳診療所の運営の責任者をした五年間であったように思う。

「山岳診療所での取り組みについてが、今日は信陽様にお伝えしたいことです」と話しが一区切りとなったことを伝えた。

その年の七月の中旬に急に腰痛になった。ここ十年急性腰痛には見舞われなかったが、このところ大学のビジネスが立て込み帰宅が次の日に近くなつてしまうことがほとんどになっていた。現在は大学の管理的職務だけの業務で大学では診療を全くしていないので、診療部にいたころの日常であった病棟まで階段で駆け上がり、回診してまた次の病棟にという動線はない。明らかに運動不足である。週に一回程度診療を身体が忘れないように自分の徒弟たちや同級生が常勤で勤務していたり経営をしていたり総合病院や精神病院や老健施設などでの外来診療や回診などを担当している。

総合病院での心療内科の診療では中待合いからの呼び込みはインターフォンが用意されているが、いつもはドアを開け送り出し次のクライアントを眼で確認して診察室に入つて

いただくことを習慣にしている。その時に必要な椅子から立つ、身体をひねる、そして再び椅子に座るこの一連の動作が今は腰が痛くてできない。診察が終わると、私がお大事にと送り出すのではなく、クライアントに「先生お大事にね」と言葉をかけられる始末である。以前やはりギックリ腰で苦しんでいた時にしていた診療はその時は何とか乗り切ったような気がしていたが、後日「あの時はあまりに先生が辛そうだったので、とても自分の悩みの相談ができませんでした」といわれたこともあった。一週間で完治するだろうと、高を括っていたが、ある程度は良くはなるものの、痛みが残りなかなか完治には至らなかつた。とうとう山岳診療所の勤務の日になってしまい、山岳診療所に診療に行つて、自分が下級生に診療してもらつて帰ってくるのどうかと思ひ、私の病気の始末は息子

に頼むことにして同行してもらつたことにした。飛騨までの運転やリュックの生活用品のアシストである。彼も子供の時から繰り返し診療所にお邪魔し、山荘の支配人から登山や岩登りの真似事を教えてもらつている顔なじみでもあり、山も繰り返し登り熟知していた。

私は大学の山岳診療所にはもう三十年来要員として勤務してきた。雪のない夏の五週間だけ松本の保健所に登録する期間限定の診療所である。診療所長として五年間務めた自分として思い入れの強い執行の業務であった。開設期間の医師の配備は附属病院に勤務している医師の応募によつて構成する。実際には診療所の運営を担当する執行部が個別に頼んで一日一日埋めていく。今回も八月のこの日だけ開所二週間前になつても医師のエントリーがない。現在の後輩の診療所長と大学院の論文審査の

時に会い、まだ医師の派遣が埋まつていないことを確認して、自分が元の所長の責務としてスケジュールを調整し、腰痛も大分症状も軽快しているのと伝え、入山することにした。診療所への来所者は標高二千四百メートルであるので頭痛・吐き気を主症状とする軽度の高山病と北アルプスのごつごつした岩山なので擦過等の小外傷がほとんどで、遭難があつても残念ながら医療の登場場面がないものがほとんどで、待機となる。ポツンポツンと診療しながら、静かな一日がゆつくり過ぎていくのが日常である。

いつもの登山道を、今回は腰痛を抱えながらなので、息子に先導してもらいゆつくり登り、何事もなく一時こころ診療所に到着し、ほつとして今日下山する交代の医師とナースとオリンピックでの選手の活躍を話題に汗を拭いていた。診療所は山荘

に隣接してはいるが独立した建物がある。三十メートルくらい離れた山荘から支配人がロープとベルトに金具をじゃらじゃらさせてやってきた。息子と私に目であいさつを交わした。いつもおだやかな笑顔で接してくださっている支配人の表情が険しい。

滑落があつたのは聞いていた。ちょっと現場に行つてきますので、又連絡しますといひ終えて、走るように診療所のおきの登山道を登つて行った。ルート案内だと二時間以上かかる地点だが、四十分程で支配人から連絡がきた。遭難者は十メートル程度滑落したが、途中の岩に引っ掛かり、滑落が止まったようである。今は登山道に引き上げられていて、怪我はしているが無事であつたようだ。ヘリで吊るか診療所まで歩いて降ろしたい。しかし腕を痛がついて、これでは移動させることができない。腕の固定等の処置をお願いしたいという

息子と私への救助支援の要請であつた。

人命に関する救助支援の要請を受け、自分は現在腰痛で現場まで行く自信がありませんとはとても伝えられない。息子の顔をみたら、うなずく。視界は十メートル以下の濃い霧に包まれている。登山道の折り返し地点にあたる山荘と診療所が隣接して建ててあるので、雲の通り道になつていて、午後になると毎日のように雷と土砂降りの雨が降る。以前雷による大事故の教訓で午後の登山は暗黙のご法度になつている。時間は二時前である。ご法度の時間帯ではあるが、救助なので行くしかない。息子はナースがすぐに用意してくれた診療所にある固定の道具と傷の手当の器具を持ち急ぎ現場に向かった。僕も続いて外へ出た。霧に包まれ視界は悪い。岩でできていて濡れて

滑りやすい。風に霧が流され、時に小雨になる。真夏ではあるが気温は二十度をかなり下回っているようだ。この時間この霧の中登っていく登山者は自分以外にはいない。視界も悪いし、ご法度の時間帯だからである。何度も登りなれた登山道であるが、いつにない緊張感があつた。還暦間近の運動不足で鈍った肉体は息切れがひどく思うように現場に近づけない。息子は先に現場に着いたようである。息子から現場の状況についてメールを送つてきた。現場の霧は濃く切れそうもないので、脱臼を固定して診療所まで降ろす計画になつたと伝えてきた。

もう少し先に滑落した遭難者がいる。医療の処置と知識を持ち、職場として医業をなしているものは私しかない。苦しくて怖いが行くしかない。通称お花畑を越えたので、最初の岩山のピークに近づいていては

ずである。そろそろ現場である。風の音に混じって人の声がする。カランカランと落石の音もする。遠目に黄色いロープが見えてきた。声をかける。救助隊と山荘の支配人たちと息子が迎えてくれた。「診療所の医師です。お手伝いにきました」とやや意気込んで、でも遭難者を落ち着かせようと登りながら考えていたファーストタッチである。

しかし遭難者を含めて救助のメンバーも雰囲気が明るい。動けずに蹲っている遭難者を抱えるように一歩一歩というイメージであったが、遭難者は張ってもらったロープを伝いながらではあるが、自分で動いている。しばらくすると息子が遭難者の様子の变化を教えてくれた。腕が動かず激痛を訴えていたが、救助隊が到着したところで、身体を抱え安定した場所に移動させた。その時に急に痛みがなくなり腕が動くようにな

った。痛みも大幅に軽減して歩けるようになりこうして下山している旨説明をきいた。たぶん亜脱臼していた関節が移動によって自然に整復したようだ。処置も湿布とテープで固定しているだけだ。

緊張して登ってきたものの、本人が歩いて下山している状況では医師は役立たずとなっていた。雷にも土砂降りの雨にも見舞われず遭難者を診療所にお連れでき、全身の診察や傷の処置をした。意識等には全く問題がないが、硬膜外血腫もありえないわけではないと山裾の警察からの問い合わせに答えると濃い霧の中ではあるが防災ヘリが山荘近くのヘリポートにアプローチしてみてくれることになった。待機して待っているとヘリの音はするが濃い霧に阻まれてヘリの姿は見えない。山荘には地形的に小さなヘリポートしかない、ヒトが乗ることが出来る救助用

のヘリは着陸することはできない。したがって救助者のピックアップはホバリングで釣り上げることになる。小型用のヘリポートで待機していてもヘリの姿は認識できない。ヘリの音を聞きながら時間がじりじりと過ぎていった。その時再び奇跡の神がお見捨てにならず、一瞬本当に一瞬こちらからヘリが見えた。いや大事なことはヘリからこっちが見えたことだ。雲の中でホバリングしていたヘリはみるみるアプローチし三十センチと隙間のない狭いスペースにびたりと着陸し、そしてすぐに遭難者を乗せ飛び去った。あまりにスペースがないので今まで大型ヘリは山荘のヘリポートには着陸したことはない、ハーネスをつけて吊るのが常とう手段だったが、今回の遭難者は腕を吊っていたので、とっさパイロットの判断でリスクは承知で着陸を選んだことは後で知った。

飛び去ったヘリの後にはまた濃い霧に包まれた。翌日早朝山麓の大病院の救命センターから連絡があり、脳の画像を含め全身の検査はすべて異常なく、処置もすべて済んでいた。そのままご退院いただいたと連絡を受けた。これにて一件落着し、また静かな診療所に戻った。

「このエピソードは是非信陽様にお伝えしたかったものです。自分としてはよくできたと思つていますが」と語り終え、宏史はやつとご先祖様である信陽様に今回伝えたい話の一つを話し終えホツとした。次に山岳診療所に係わることになった経緯を話すことにした。

三十年前に山の診療所に出会ったのは、一枚の勤務医師の募集を妻が偶然見かけ、私に相談したことからはまる。妻は私の所属していた心療内科の心理士として赴任してきた心理専攻の大学院生であった。当時は

心理学には臨床心理という分野は学としては確立していなかった。しかし臨床心理という仕事は存在していたので、彼女は是非臨床の仕事をしてみたいと思つて仕事をできるところを探していたようだ。田平教授が作つたばかりの教室には心理的な見方ができるものは誰もいなかった。で、ヒトのころをある程度知つている専門家は是非必要であった。彼女はアグレッシブに仕事にまい進するというよりはマイペースで、医師が行うアプローチとは視点が全く違う心理面へのアプローチを手探りで実践していた。そのような経緯で赴任してきた彼女と早々に意気投合し、ついに一緒に暮らすことになった。元々彼女は草分け的な分野を手探りで進んでくれていたので、先進的な仕事は続けたいと二人とも考えていたので、一人目の子供が生まれた以降も、無理は承知で彼女も仕事を続

けた。二人が仕事を始めた大病院には先進的な男女共同を推進していた東都大学の前身である医専出身の前島教授が学内に保育園を設立してくれていて、安定した運営が実施されていった。私たちの授かった女の子を保育園にお願いしたいと思つたが、妊娠した時に病院のポストを離れていた。このままでは入所できなかった。医学部の一般教育には古くから心理学教育が必要であったので、心理学研究室が設置されていたが、一般教育には研究生を取る習慣がなかった。しかし一般教育の皆さんの賛同を得ることができ、大学への在籍の資格を得ることが出来た。研究生なので報酬は頂けなかったが、病院に勤務する若手の医師たちは大部分無給であった時代であったので、二人の暮らしは関連の医療施設でのアルバイトで賄つていて、決して豊かではなかったが、飢えを感じるよ

うなことはなかった。自分も先の見えない学者の修行を始め、彼女も先人のない道を歩き始め、しかも子供まで授かり、兎に角二人には時間がなかった。二人とも三十歳前後でいつも眠くてフラフラではあった。不眠不休という、まさにその文字通り乳幼児であった上の子も含め、日常生活と目の前の作業を休みなく続けていた。そんな中、大学付属病院の職員食堂に貼ってあった診療所の派遣医師募集を彼女が偶然見かけ記載に従って事務担当部署に連絡し夏の診療所開設期間の三日間の登録をした。当時の身分は研究生だったので、給与がいただけなので、大学との雇用関係もなく夏季休暇も年次休暇も存在しえない状態であった。しかし山岳診療所での診療だけは出張になるということだったので、一緒に暮らし始めて極めてレアな家族そろってのお出かけとなった。自分の所属

していた内科は当時どの大学も総合内科的診療を旨としていたが、中でも私の所属していた第二内科は内科全般の診療をするを旨としていたので、内科が扱う範囲の病態はどの領域でも自然とファーストエイド程度は身につけていたので、救援の呼べない場所での診療に不安はなかった。また山岳診療所での経験が積み重なってきてわかったことは岩でござござしていることで有名な北アルプスの名峰なので、外傷の受診者が多く来訪した。当時の内科での血管確保は鼠径部のカットダウンが日常的で毎日のように皮膚の切開をしていた。さらに現在は日常的にはあまり行われなくなったが気管切開も内科の病棟でしばしば行われていた。また近隣の関連病院に当直の業務を命じられた時などは夜間発生の小外傷の処置をすることも当たり前のことであつたので、外科的処置も一通

り経験していたので、むしろ診療する幅を広げる動機づけになってさらに境界領域についても積極的な診療を心掛けるようになっていた。

下の子はまだ生まれていなかった。上の子が二歳の時に家族三人で初めて西穂高の山岳診療所を訪れた。ロープウェイでの移動で二千メートル以上の天空まで連れて行ってくれる。そのあとコースタイム一時間半で診療所にたどり着ける入りやすい大学山岳診療所であつたと思う。しかし二歳の子供には標高差が二千メートルから約三百メートル程度は登らないといけないので、大変だつたと思うが、周囲の登山者に声をかけられ励まされながら子供の足の長さではどうにもクリアできない大きな岩を越える時以外はトコトコ登って行きととう子供用の運動靴を履いて登り切ってしまった。診療所とはいってもすぐ横にある山荘には百

人以上泊っているがそこまで山登りができる元気な方たちしか診療所の周辺には存在できないので、アクシデントが起らない限り出番はない。受診する方々も風邪による発熱などを含めても十人を超えることはない。東京の数千人の来診する大病院での外来患者さんを次々に診療している日常からはかけ離れてゆつたりした時空間であった。家族との共有する時間もなく過ごしていた東京とは打って変わって、自分も妻もそして幼い娘にとつてもいつもの不眠不休の生活と違って時間がゆつくり過ぎてゆく特別の体験を持つことができた。

目の前に焼岳がある。診療所からの一望はできないが、丸山と呼ばれている登山道の途中の小さなピークを登ると、眼下に山荘、正面やや左下に上高地、右下には川沿いに広がる奥飛騨の旅館群を見渡せ、前に焼岳

がそびえている。東は連山にさえぎられて西側は地平線のように広がって見える。雨あがり雲海に包まれ西の空に火が沈む光景はめったには見られないが、これまで見たこともない特別な景色である。この最初の山岳診療所への出張は家族旅行のような気分で入山し、北アルプスの自然の存在を強く受け取った体験となり、以降も夏になると仕事を段取りし時間を作って山岳診療所の管理の一要員として毎年のようにお邪魔することになった。

数年後三歳離れて生まれた下の子供が丁度上の子が初めて登山したと同じ年齢になった年だったと思う。その年の登山は三歳前の下の子と就学直前の上の子を連れていつもの年のように入山した。登ったその日の夕食が終わった後に、診療室の外を覗くと、雲一つない快晴で、新月の夜だったようで、丸山手前まで診療所

を一緒にお預かりしている病院のメンバーと一緒に登った。そして丸山手前の広場に寝転がって空を見上げると天の川がくつきりと認識でき闇の中さらに真つ黒に広がっている物凄く存在感の主峰に包まれていると葛藤に満ち満ちて様々な日常の満たされないことがとても小さく感じられた。きつと家族もまた診療所で一緒に過ごす医療スタッフも同じような気持ちを持ちながらところが洗われていくことを感じていたに違いない。翌朝起きると状況は一転している、眼前に見えていた周囲の山は全く見えず、早いスピードで目の前を重い雲が流れていく。次から次に新しい雲が出来ていくようにも見えた。すぐ下にある山荘に天候の変化の状況を聞きに行くと、日本海の離れたところを熱帯低気圧に変わった台風が移動しているの、このような高所では大荒れになるものようだ。

今後ロープウェイは運休と教えられた。交代が上がつてくるまで、診療所を預かるのが役目であったので、元より下に降りるつもりはなかったが、ちよつと大変らしいことは伝わった。百人も二百人も泊り客で賑わう山荘も人氣がなくがらんとしている。さらに風雨は横殴りになり強まってきた。二階建ての診療所には十人以上が楽に泊まる事が出来る広いスペースがあるが、夜半風雨が増々強くなり、風の息というのか強く吹き止まり強く吹き止まりを繰り返しながら、今まで東京では経験したことがない風の力を感じた。その日の診療所の要員はナース二人、医師は自分ひとり、あとは自分の家族である。六人は外を歩ける装備を身につけた状態で一部屋に身を寄せて布団をかぶっていた。強い風の息に反応して小屋が浮いているようにも感じた。小屋毎飛ばされたら這い出て、三十

メートルか五十メートル先にあるいつもなら目と鼻の先にあると感じている頼りになる母屋といった感じの山荘がとてつもなく遠くにある様に感じて、私も息をつめていた。荒れ狂う大自然の前に全くヒトなど太刀打ちできないことを実感し無力感を感じていた。もちろん夜間寝るところではなかった。しかし二人の子供は遊び疲れたのかぐっすり眠っていた。この時のことは彼らも鮮明な記憶として残っていたようで、二十年くらい経って再び家族四人で穂高連峰の一角に登った時に記憶をたどったことがあった。その時の記憶は怖かったという類のことかと思っていたら、すぐ傍に親たちそして信頼していたナース二人がすぐ近くにいてくれたのでとても安心だったという内省は驚きであった。私を含めた四人の大人の医療関係者は青くなっていたのとは対照的な自然の脅威への受

け取りであった。翌朝明るくなっても風雨の状態は変わらず身動きできない状態が続いたが夕方になると荒れた天候ではあったが、何とか山荘に行ったりはできる状態に落ち着き、翌日小雨模様の中下山を試みた。登山道はぬかるんでとても子供が歩いて降りれそうもない状況であったので、下の子は自分が背負子に乗せ、家族の衣類などは妻のリュックサックに全部詰め込み、上の子は長靴を持ってきていたのでそれを履かせて崖のような雨で滑りやすくなった坂道もある登山道をロープウェイまで下りた。案ずるより産むが易しで、上の子は山道を大過なく自力で降り切った。私の背中の下の子は心配したもののゆらゆら揺れながらの下山が快適だったようで機嫌よくロープウェイにたどり着いた。私はといえば翌々日に予定していた福岡での講演会までも無事こなすことができた。

このギリギリの体験がさらに山岳診療所に感じている魅力を加速的に強めることになった。以降子供が中学受験の塾通いで時間に余裕がなくなった時を除いて、ほぼ毎年山岳診療所の診療をお手伝いしていた。

私は大学に入職して拝命した仕事の中で、専攻した心療内科の診療や教育研究支援の取り組みよりも山岳診療所での取り組みが社会貢献性の高い取り組みであったと思っていることをご先祖の信陽様にお伝えしたいと思った。山岳診療所との関わりはさらに発展していく。発展してゆく過程を信陽様に話し続けることとした。

自分が三年後に医学部の新規に立ち上げる新研修制度に対応するためミッションを持った研修センターのセンター長に就任し診療部から管理部門に移り、未経験の管理業務を先輩たちに怒鳴られ怒鳴られシステ

ムを立ち上げていったが、その折胃の切除手術を受けていた基礎医学の教室責任者を務めておられた東都大出身の先輩教授から部屋に来るように電話があった。管理業務の方針についてのご注意と思いい、重い足取りでお部屋に伺った。すると私が学生の頃若手の講師であられた病理学を習った教授が部屋のドアを開けて自分を招き入れてくれ、「山岳診療所の運営委員長を引き受けてほしい」と唐突に依頼された。

診療所長は代々山岳部とワンダーフォーゲル部の部長が継代してきたしてきた歴史のある大事な役目であったので、自分は山との関りを持たずに学生時代も過ごしたので、東都大の卒業生ではあるが、自分にその資格はないと辞退した。代々教授の中の教授のような重鎮が就いたポストで、目の前で話しておられる教授も大教授の一人である。すると彼

は推薦した理由を簡単に説明してくれた。大教授は「手術を受ける前もとも山に行ける身体の状態ではなかったが、手術を受けたら増々酸素分圧の低いところに行くどころではなくなってしまった。さらに山岳部とワンダーフォーゲル部出身の若手の教授が現在はいない。次に一番教授に近いワンダーフォーゲル部出身の教授候補は神経内科の准教授である岡藤君であるが、彼の研究状況から論文の刊行を推測するとあと数年はかかる。したがって山に最も関わりが深い現役教授は君だ。引き受けてほしい。既に医学部の運営委員会は君の就任を「了承済みだ」と結んだ。

そんな経緯で現場をよく知っている教授ということで、十年位前診療所長を引き受けることになった。救助も視野に入れた責任の重い立場なので、シーズン前である六月十日の創立記念日の休日を利用して山荘に

お邪魔し、山についてもつと教えてもらおうと思っていた。冬の間は三メートル以上の積雪であるが、六月のこの時期には一メートル位まで解け日当たりの良いところは土がちよつと顔を出している。雪の解けかかった山小屋なら素人の私でもたどり着けると考えていた。次期所長の予定者であるワンダーフォーゲル部の部長をしていた神経内科の若手教授と一緒に従業員の方々とお互いに顔の見える状態になつていないと、機能的な診療所にはならないと考え、シーズン前にお邪魔することにした。診療責任者がシーズン前に山荘にお邪魔することに支配人たちは歓迎してくれた。標高が高いところでアルコールを飲むと酔うとは聞いていたが、歓迎の宴があまりに楽しく神経内科の次期教授候補の彼と共に従業員さんたちと二時間ほど話し込んで笑い転げていた。そんな中急に支配

人が真顔になり、「先生の話しは聞いているとドンドン引き込まれてしまふ。一度宿泊の皆さんの前で今日のような話しをお願いできないか？」と依頼された。私が講演をやるのはいが、医学に関連のない登山愛好家の方々に前に講演会として成り立つのか心配ではあったが、医師会の講演会や公開講座はかなり経験があったので、これからの山荘と診療所の懸け橋になるかもしれないと思いつとチャレンジすることにした。ちよつと責任も感じつつ新しい試みにちよつとワクワクする気持ちでもあった。

翌日登山道の周辺にはまだ多くの残雪が残る雪景色であった。残雪を利用して雪のある時にしか行くことが出来ない山荘周辺のルートの今は使われてはいない状態を把握しにくく予定なのですが御一緒にどうですかと支配人に誘われた。次期診療所

長の予定者は学生時代からワンダーフォーゲル部に所属し山歩きをしていたので、すぐにも行きたそうであった。私はなんとなく胸騒ぎがしたが、この時期のトレッキングは雪と土が混在し確かに魅力的であった。一面の雪景色で、雪溪を見ると両脇は少し土が顔を出している。登山道は今の時期には雪溪になつている。トラバースして雪溪の対岸を渡ればまた元の登山道に入ることが出来る。雪溪のトラバースをはじめた。二人のベテランに挟まれてのチャレンジである。支配人がロープを張り、初心者である私がロープを伝つて渡る。雪溪の幅は三メートル程度である。雪溪の下は藪である。斜面から身体を離すように支配人に言われ、ドキドキしながら一歩一歩を進めた。もう昼前になつていたので気温も高く、雪面は少し緩んでいるようだがクザクしている。ロープを張るため

に先に渡つた支配人の足跡をたどり、靴を蹴りいれると少し緩いが体重を支えるに十分の足掛かりができる。一步一步慎重に進んでいった。二十歩位で、三メートルくらいの雪溪の向こう側にたどり着いた。支配人が手の届くところでポイントを作つて待つてゐる。支配人の位置に雪溪の横から回り込むように降りようとした時に右足がスリップした。雪溪の周囲の雪が解け始めていて緩いことは分かつていたので、雪溪の向こう側に大きく踏み出せばなんでもなかつた。しかし大きく踏み出すのが怖かつたためであろう無意識に小さく歩を取り、一番地盤の緩い雪と土の境目あたりに足をかけてしまった。自分でも踏ん張ろうとするがズルズルと下へ足が移動していくことがとまらない。

どうなるのかと混乱した次の瞬間身体がキャッチされていた。支配人

がリユックを掴んでくれていた。僕の両手はロープを掴んでいたが、キャッチされなければ、ずれ落ちていたと思う。キャッチされた体を泳がし、急いで雪溪の向こう側の登山道に足場を確保し、這いながら雪溪から離れた平な場所に滑り込んだ。激しく動悸した。

大病院で働くようになってから私の選んだ心身医学の精神療法の道は先に道なし後に続くものなしで頼るものはなかつた。医学部から任されていた研修医やレジデントの管理の仕事も先例のない立案を続けることがニーズされている職務であつた。現在担当している文部科学省の教育系競争的補助金の申請も学内に先達はいなかつた。大学から与えられた仕事でガイドに従つて道を進んだこととはなかつた。しかし今回の山行に限り支配人に頼つて行動してしまい、自ら探索的に歩を進めることを怠つ

てしまったように思う。山の事故は、一番危険な状態では事故は起きないという。心の緩みが隙をつくるという教えに従い、危険と考えられる箇所を通過した後、特に慎重に歩を進めるように心がけていた。しかし信頼できる支配人の手の届くところに近づきホツとしてしまった。人の道も緩むことなく一歩ずつ探索しつつ進まなければならぬことを雪溪のトラバースの訓練で実感した。

その後一か月半が経ち、夏の管理が始まつた。依頼されていた初めての試みであつた山荘にお泊りの方々を前に食堂を片付け、九時消灯になるまでの時間を利用して、三十分の予定で講演を始めた。診療所の設立や自分の医師としての体験を話の枕に「山の命は皆で守る」というような救急蘇生の話しをし、酸素飽和度の測定装置を使って、現在の心拍数と酸素飽和度を測定するデモなどを行

い何とか講演を終了した。ありがた
いことに拙い話にも関わらず、食堂
一杯に集まっていただき、熱心に聞
いて下さった。翌朝登山道を見回る
ということもないが、外の空気を確
かめに散歩していると、昨夜の講演
を聞いて下さった方々が「気を付け
て行ってきます。昨日はありがとう
ございました」と声をかけてくださ
ったりもして、すっかり恐縮してし
まった。翌々日診療所の勤務を終え
て平湯で一泊して大学へ帰ろうとバ
スを待っていると、「先生ですよね」
と声を掛けられ「一昨日山荘に泊っ
ておりました。とても楽しいお話し
ありがとうございます」とお礼を
言われてみると、この試みはよかつ
たのかもしれないと思った。翌年山
荘の支配人にお願ひすると、高山植
物の開花情報が満載の人気のホーム
ページに七月二十何日講演決定と支
配人が掲載して下さり、勧められる

ままに始めた講演の取り組みが段々
定着してくるようで嬉しかった。支
配人からも講演の問い合わせが来て
いるとの連絡まで頂き、ちよつと嬉
しかった。期待に応えなくてはと、ス
トリーを用意し当日に臨んだ。ま
たまた支配人が司会をしてくださつ
たり、館内にアナウンスして下さつ
たりしていただき、前回以上にたく
さんの宿泊のお客さんが集まってく
ださつて、ゲラゲラ笑いながら聞い
て下さった。終わつて診療所に戻ろ
うとすると、おひとりの宿泊の方が
大きな箱を持った方が支配人と一緒
に私のところに近づいてきて下さつ
た。ホールのケーキだった。山の上ま
で持ってきてくださったようだ。ピ
ックリして「一体どうして」と尋ねる
と、「先生が今年も今日いらしている
のは講演の紹介で確認しました。昨
年家内が診療で大変お世話になりま
して」とケーキの箱を渡してくれた。

後ろで去年私が診察した覚えのある
奥さまがニコニコして控えておられ
た。私は感動し、涙が出てきた。私は
心療内科での臨床でも患者様の苦し
かったお話を伺っていると我がこと
のように思え、よく涙が出る。今日も
この様な体験ができ、あーこの山岳
診療所の責任者を引き受けてよかつ
たと改めて実感した瞬間でもあつた。
「このことも是非信陽様にお伝え
したいと思ひました」と宏史は肖像
の油絵に話しかけ、感極まつた。嬉し
かつた体験であつた。

こんなこともあつた。山岳診療所
の責任者となつて講演会を始めるよ
うになつてから、また責任者として
恙なく診療が行われているか心配だ
つたこともありかなりな期間繰り返
し入山するようになっていた。また
夏の忙しい時期を外しても山荘にお
邪魔するようになったので、診療所
の山荘の従業員の方とも顔とお名前

が一致するようになっていた。正月の元旦の日であった。私の年末年始は三十一日まで二日間両親と一緒に下田で過ごし、大晦日手広く開業して盛業に過ぎている徒弟の行きつけのフレンチのレストランにおせちを作ってもらっている。このおせちを医局時代の徒弟にレストランに受け取りに行ってもらい、下田からの帰り途中に、戻りの道すがら徒弟に連絡をして事前に受け取ってもらっているおせちを受け取る。大晦日このおせちを夕ご飯として食べ始め、旅行の反省をしつつ、年末の第九や歌合戦を見ながら、十一時ごろ番組の途中で眠気に耐えられなくなり、早々に寝てしまう。そして正月ちょっと凝ったお雑煮を妻が毎年作ってくれている。彼女は普段なかなか時間が作れずイメージに合わせてお料理を創作していくことが難しい日常である。その時ばかりは食べる役目

となる私たち家族も楽しみであるが、彼女も楽しみに作っているように思う。下田からの帰りがけにゲットしたおせちを摘みながら、オリジナルなお雑煮を美味しくいただいた。お腹が一杯になったところで、午後から未完成で気になっている書きかけの原稿の執筆を始めた。

そのタイミングで山荘の従業員のチームリーダーから切迫した感じで電話がかかってきた。お客さんが失神したようだ。昨夜縦走から夜遅くたどり着いたが、現在も少し意識も悪いようだ。脱水の症状が強いことを確認し、起坐位で誤飲に注意しながらまず水を飲んでいただくこととし、かねてより練習していただいた血圧を従業員の方に測定していただき、心拍や呼吸数も数えていただいた。夏のお客さんの多い時期を外して繰り返し一緒に練習を繰り返していた成果である。このお客さん

はこの一連の対処でドンドン回復し、午後には自力で下山できるまでになった。このやり取りは松本の事務所に待機してくれていた山荘の支配人にもリアルタイムで報告されていた。僕のメールアドレスにも繰り返し質問や状況判断の相談が送信されてきて、私も応答していた。しかし如何せん言葉と数値でした状況が把握できないもどかしさはあった。後日支配人が気象の仕事で東京に見えた折もどかしさをお伝えしたところ、「スカイプで画像を転送すれば先生のご希望された情報が送れるのではないか？」と提案を持ってきていただいた。試しにとすぐに山荘と東都大学のデスクとつないでみると、不安定で画面がギザギザしてしまう時もあるが、概ね満足できる画像が東京で得られることが判った。これはいけるといふことで、簡単な約束事を打ち合わせ作って何かあればこれを使

おうということまで話しは進んだ。私が繰り返し診療所と山荘にお邪魔していた成果だと思ひ、私が診療所の運営の責任者を引き受け現場感覚で運営してきてよかつたと感じた瞬間でもあつた。

NHKの撮影のグループは季節ごとに素晴らしい穂高連峰の景色を取材に定期的に山荘にきているらしかつた。その折電話口に大きく貼つてある東都大学との画像転送のシステムの手順を見つけ、これを朝のニュースで放映したいということになつた。正月の出来事からアイデア豊富な山荘の支配人との話し合ひで、偶然のように出来上がった約束事がニュースになるということで、ちよつと戸惑ひもあつたが、他の山岳診療所でも応用がきくし良いことと思ひ、取材と放映をお受けすることにした。ビックリしたのはニュースなので生放送でやりたいと申し入れたことで

ある。大学にも大学全体のネットワークを管理しているシステム室の技術職員にも手伝つてもらひ、朝の七時半過ぎ頃からの放送に備えた。冬の山小屋で起きた医療上のアクシデントに対して、インターネット回線を利用して、救急時のアドバイスをしよつという救急医療システムである。支配人との打ち合わせから思ひつき一年間位メールでファイルをや取り取りして、実際の画像もテストしながら準備してきたものである。テレビ中継のため私たちが構築してインターネットを回線でのテストを繰り返し、メールや携帯電話でも何回も確認した。そして番組内で話すコメントの要旨も決まつた。放送当日朝六時からリハーサルを開始した。本番は七時三十五分から開始と連絡があり生放送の準備は万端であつた。一年前からの成果がNHKニュースで放送されるのを大学のシステム室

の技術スタッフと待つていた。十分前に行つた最後のテストの時、いつもよりちよつと雑音が多いなど思つた。臨時のニュースが差し込まれ、放送予定時間が十分繰り下がつた。繰り下がりの電話での連絡を受けながらパソコンの画面を見ると、回線が切れてゐる。山荘側も慌ててゐる。こつちも技術スタッフが立ち上げなおしてゐる。しかし時間切れで画像は映らないまま放送開始となつた。東京からのコメントも電話回線を使つてのコメントとなり、「リアルタイムでの画像が救急場面では重要で、このシステムのポイントです」と言いながら、放送中に画像を送ることが出来ない。「ちよつと今は繋がつていないんですけど」と苦しいレポーターのコメントとなつた。放送が終了しコメントをした電話を切つた後、インターネット回線を繋ぐと程なく画面受け入れの許可を問う画面に変

わり、画像が映し出された。結局放送中の数分だけうまくいかなかったことになる。不首尾に終わって、技術の方にも伺ったが、理由は分からず仕舞いであつた。オリンピックの試合であつても、入学試験であつても、努力とか準備とか人智の及ぶことには関係なく、不首尾に終わることはしばしばある。本番とはうまくいかないものと納得していた。後に東日本の震災があつた時や、大きな災害が突然起こつた時に安否を確認する連絡が集中すると、回線がパンクし繋がりにくくなるということがあることを知つた。その時ああそうだったのかとニュースの時に起こつた事態が判つたような気がした。きっと本番のニュースの時も七時の冒頭に今日はこんなニュースをやりますという紹介がある。山荘のサイトは元々人気があつたので、いつも繋いで山荘のホームページを楽しんでいる

方々が次々に自分のパソコンから山荘のサイトに繋ぎ、更には別の用件で画像をやり取りしていたことがあつた方々がニュースの冒頭で紹介された時に、山荘の回線へと繋ごうとしたかもしれない。それで放送で使おうとした大学のサイトと繋がつていた回線がパンクして切れてしまつたのではないかと理解した。もしこの推論が当を得ていたとしたら、救急場面では電波が飛び交う混乱した状況になることが予測されるので、当初私たちの頭で考えたシステムには欠陥があつたことになる。放送直後は電波が切れたことは貰い事故のような気持ちで残念だったという感情で事態を理解していたが、今回の不首尾には遠隔医療システムの本質的な問題があつたと考えられると理解できた。私にとつては当時の苦しい思い出であり、不首尾に終わり、早朝からの準備で眠くて不機嫌な気持ち

で九時からの大学でのいつもの仕事を始めたことを恥ずかしく思い出した。

「こうして信陽様にお話しさせていただいたことよつて、長く整理できない自分の持つていき場のない気持ちを外に向けていたことを理解することができました。感謝です」と謙虚な気持ちになつていた。

そして宏史はもつとほろ苦い出来事を思い出し、信陽様に聞いて頂くうと思つていた。「これからお話する出来事は今日お話するつもりではありませんでした。しかしニュースのことや講演会の組み立ての話をしていくうちに、更に聞いて頂きたいことを思ひだしてしまいました」とやや興奮気味に語り、水筒に入れていつも持ち歩いているお水をゴクンと飲んだ。

母親の入院は突然だった。前の年父親が持病の悪化で他界した。その

後も気丈に同人誌への投句、水墨画の展覧会への出品、書道の教授など次々に作業を進め、こつちから用事があってもなかなか連絡が取れないような多忙な状態で以前よりも一段と元気に過ごしていた。そんな母が強い股関節の痛みを訴え急に動けなくなってしまった。大学病院の整形外科に入院してもらい検査や治療を受けていたが、随分衰えが目立つようになってきたなどは思っていた。痛みで眠りが十分でないためと勝手に高を括っていた。母親が二か月後に迫っていた八十歳の誕生日の話しを始め、「傘寿を皆で祝いたいがそこまでは無理なようだ」と弱気な話しをした。病床にはあったが、生死を意識するような状態ではなかったので、私は笑って聞き流した。療養も長期化するかもしれないと私が非常勤で勤務している病院に移ってもらうことにして、中長期の療養の段取りを

万端整えた。しかし母親の予感していたように急激に病態が悪化した。血管内凝固症候群が重症化し、一気に血圧低下とともに呼吸停止が起り、とうとう人工呼吸器の管理が必要な状態になってしまった。治療しても治療しても検査値は悪化の一途をたどり、私も姉も母親の予言通りいよいよ無理かもしれないと思い始めていた。そんな状況であっても山岳診療所の責任者としての役割は待つてはくれない。夏の診療所の開所し診療所長が入山できないまま、山岳診療所が動き始めている。大学の卒後研修の責任者としての仕事もほとんど山積みになっていくので、母親の容態を気にしながらも、メールを使って次々決済していた。仕事をしていたとうとう眠くて続けられなくなる、そのまま睡眠というよりは失神といった方が適切かもしれない状態で一日一日過ごしていた。そ

んな毎日がこのところ続いていたので、夢を見たことを覚えているということはまずなかった。

母親が他界する数日前のことだったと思う。大学で心理学の教員をしている妻はこの所ずっとメールを使って学部生の卒論の添削指導を毎晩深夜まで続けている。その日も送られてきた提出物の出来の悪さを嘆きながら、メールの返信を続けている。何十人もの卒論の指導しているようだった。息子は浪人中だったのだからこれまた寝ているんだか起きて学習してるんだかわからないような生活の繰り返しだった。後からその日の状況を尋ねると三時くらいに机の前で寝てしまったようだ。私は二時過ぎに作業が続けられなくなり、ベッドにダウンした。そしてその日に母親の夢を見た。私が母親から説教されている。母親が自分に対して話しているのを手前から見ているよう

な画像であった。「もう自分は回復の見込みがないのだから、今続けている呼吸器の治療はいい加減やめるように」と強い口調で諭された。随分はつきりした夢であった。画像の背景は後から考えると、母親が暮らしていた私に近くに引越してもらったマンションの納戸として使っていた場所のようであった。母親が亡くなった後姉に勧められマンションをすっかり改造することにし、納戸に残っていた書籍や書類を整理しているときに、安楽死に関する有印の書類が出てきた。ああこの書類を見なさいということだったのかと納得した。私が夢を見た朝夢の話を妻に伝えながら、ほとんど睡眠していない妻がいつもの簡単な食事を用意してくれ二人で朝食を食べ始めていた。ちよつと遅れて息子が起きてきた。開口一番「僕はいつも夢なんか見ないんだけど、昨夜に限っておばあちゃん

の夢を見てさ、僕に今こそ頑張んなさいと言っていたよ」と呑気に話してくれた。そして妻と顔を見合わせ、私の夢の話しを彼に伝えた。妻は「どうして私にはお母さんが会いに来てくれないの？」と不満そうであったが、すぐに自分は徹夜で卒論の返事を書いていて眠っていなかったことに気づき納得した。やがて母親は亡くなり、彼女の暮らしていたマンションでお通夜をした。母親が生前親しく行き来させていただいていたご友人の方がお通夜に普段着で駆けつけてくれた。団地の自治会のお世話になっていた役員さんに急逝したことを伝えていたので、そこから伝え聞いたようだった。その時数日前に母親の夢をみたというお話しを伺った。日にちを辿ってみると私たちが母親と夢で叱責や薫陶を受けた日であった。母親のお友達には共時した出来事であったことはお伝えしな

った。

ここまで一気に宏史は話し終え、信陽様を見上げた。大きく頷いて下さったように思えた。

母親が急逝していったこの間も診療所は苦境にあった。当時研修中の若手の医師の新しい教育制度である新臨床研修制度が始まったばかりの時で、若手の医師は指導医の元でないと医行為が禁止されたので、山岳診療所も上級医がいないと若手の医師たちが診療能力はあっても法的に診療することができない。研修病院以外の臨床病院ではひどい医師不足になっていた。私は大学の研修部門の責任者でもあったので、山岳診療所は研修施設として登録していた。したがって私が診療所において指導できる状態でありさえすれば若い医師たちも山岳診療所を行うことができる。私は母親の葬儀までは東京にいたが、一連の手続きが終わってすぐに山岳

診療所に向かった。診療所には研修医の勤務の予定になっていたが、彼らに山岳診療所で診療ができないかもしれない状態は解除出来て、山荘にも診療に支障がなく続けることができることを伝え、空白なく診療所は私が診療所にて指導体制が整ったことで、研修医の診療も可能となり、山岳診療所は以降機能を止めることなくシーズン末まで稼働することが出来た。

入山する時に人工呼吸器の装着後母親のニーズに従った治療を提供できなかったことについての気持ちを整理できていなかったのも、何冊かの生命倫理に関する哲学や臨床倫理学に関する雑誌を持って山に入っていた。母親が色々な気になっていた人々を巡って行った時、私の所にも訪ねてきたわけであるが、その時直ちに延命の処置を止めるように私に対して指示をしていた。生前から私

は母親の断定的な指示には多くは従わずいわば逆らって生きてきていた。しかし血圧が四十前後の極めて不安定な時にわざわざ私の夢枕に立ち指示されたことを引き受けなかった対応はそれでよかったのかという迷いは続いていた。山に入る前も睡眠途中で覚醒することなどないはずなのに、その後夜目が覚め暗い中独りで自問自答していた。夢枕に母親が立ったその日の昼に人工呼吸器の単調な音を聞きながら、しばらくベッドサイドに佇んでいたが、怖くてとても母親の指示に従って、人工呼吸器の接続部を抜いたり止めたりすることはできなかった。医療の指導をする経験と英知の中でできないと考えたのではない。ただただ自分が母親の命を止めるのが怖かっただけであった。すぐに山岳診療所に入ったこの時点では安楽死の捺印文書が存在していたことを私は未だ知らないわ

けであるが、母親の願いを叶えることができなかったことはそれでよかったのだろうかという問いの答えは未だ得られていなかった。山岳診療所がその時点で私が指導医として機能しているということは母親の人工呼吸器を止めてはいなかったから可能なことであることは理性では理解できていたが、納得はしていなかった。母親が亡くなってから山岳診療所に持って行った雑誌は医事法制の安楽死幫助の判例や「思想」という岩波書店が出している雑誌が「安楽死」を集めていたものがリユックに入っていた。葬儀後に一週間ほど診療所に次の指導医の存在を必要としないう者が入山してくるまで入山していた。その間持参の読みにくい内容であったが特集に組まれていた立場の違う論客の考えを読んでいた。その中に安楽死の葛藤は時間に委ねなさいと示唆している論説に出会った。

この考えに救われた気がした。論説には次のような趣旨で書かれていた。「人工呼吸器がついてるのだから、また人の命には限りがある。したがって、何も駆り立てられる気持ちに従って、今呼吸器を外すという行動をせずに時間に委ねるが良い。」という内容であった。自分は外すのが怖くて時間を止めてくれるまで待つことをしたのは、結果的にはそんなに悪い対応ではなかったように思えるようになり、そのことを母親に説明すればきつとわかってもらえるような気がして、今回の自分の取った行動へのわだかまりが少し緩んだように思え、山岳診療所での指導医としての役目を続けた。

「このことは今日お伝えするつもりはなかったのですが、山岳診療のことをお話ししている間に、頭に浮かんでしまい、お伝えすることになつてしまいました。定年を前にちよ

つと長い話しを聞いていただきました。感謝します」と宏史はご先祖様にお礼を言った。信陽様は微笑んでくださったように思った。

外は真つ赤な夕日である。南向きに建っているマンションの西側窓からの景色である。いつものような走行音を立てながらモノレールが走っている。首都高速道路は渋滞気味で速度を落として流れている。いつも光景である。また自分の小さな歴史のことをご先祖様に聞いていただくかと思つた。

病院と楽しくつきあう方法

橋爪 康子

父は、橋爪一男。

日本大学医学部教授（産婦人科）

式場隆三郎氏とともに日本医家芸術

クラブの委員長を務めた。

画家（一水会。石井柏亭に師事）

長女・康子 表参道にて画廊経営。

写真家。旅行作家。

1

私は父が医師だったため、病院に対する恐怖心とか嫌悪感を感じたことがない。反面、聞きかじりの医学知識をふりまわして先生方に嫌われることが多いのでは、と反省している。

私の初めての入院は乳がんで40年近く前になる。院長が父の友人、理事長が私のクラスメート、教授の一人が母の従弟という関係で、女子医大にお世話になった。

母がショックを受けるに違いないので、がんとは言わないでくださいと先生や看護師の皆さんに口止めしていた。ところが外科医の妻である母は、オペ後の説明があるはずだと

怒り始め、先生方は説明に困るので逃げ回るので、義弟が連れて帰った。ちようどホテルニュージャパンの火災当日、タクシーの中でも文句を言い続けるので運転手がお客さん、もしかしてあの火事の被害者のご家族ですか？と聞かれたそうだ。

当時温存手術などなく、リンパ節まで全摘になったが、担当医の一人にどのくらいとったのか聞いてみたら「80グラムです」と明快な答え。肉屋じゃあるまいし、他の言い方ないのかしらん。

リハビリを含めてひと月も入っていたが、現役真つ最中だったときで、秘書が毎朝、報告や打ち合わせにきたり、病室で会議をやったりしていた。丁度広告代理店を変えるコンペのときで、その会議のもようを秘書が録音してきて聞かせてもらったが、私の上司であるアメリカ人の支社長が発言は、飲み物はなんにします

か？とか、そろそろランチタイムだなどしか言っていないのにあきれ、これは早く復帰しなければと思ったものだ。

お見舞いの盛り花で部屋は花屋の店頭状態。普通、入院見舞いは切り花という常識だったが、院長と理事長から、全く同じ欄の鉢植えが届き、「あー病院側からすれば根(寝)ついてもいいわけだ」と、妙に納得。母の従弟は仕事が終わると、私の部屋に遊びに来て、冷蔵庫に一杯のお菓子を食べて暗くなっても電気も付けず話し込んでいる所へナースが来てびっくりし、先生、何かあったんですか？なんていうこともあった。

執刀医の藤本教授は、定評のあるオペの名手で、おまけにイケメンで、ファンが多い。今は女子医大は退職され、趣味の域をこえた水墨画を描かれる。もう80歳をこえているのに

頼まれると方々へ手術に行かれ、結構お忙しい。年に3回は展覧会に出品されているから、もうそろそろ引退して画家におなりくださいと言うのだが、「でも、手術好きだからねえ」と、いつこうにやめる気配がない。しかし、とうとう昨年亡くなられてしまい、とても寂しく思っている。

2

2度目の入院は、角膜移植だった。術後もひとりで通えるようにと歩いて10分のT病院にしたのだが、紹介なしで行ったのが私としては初めての大失敗。2年ものドナー待ちの間に、痛みがあつて診察に行くと、若い担当医に、指定された予約日でない、と文句を言われ、T病院は重症患者をみるところで、こんなことは近所の開業医にみてもらえ、という暴言に、ものもらいと同じに移植患者を扱ってもらいたくないとやめてしま

った。女子医大の眼科は糖尿病系なので、東海大の名誉教授になっている幼稚園の友達を思い出して相談した結果、この人をおいて他にない、と自信をもって紹介されたのが、東京歯科大の島崎教授だった。

初めて島崎先生の診察を受けに行った時、この先生にすべて預けたいと感じてその場で手術日まで決めてしまった。

東京歯科大は市川市にある。ドナーを待つのだと、みつかったとき先生の都合がつかなかったらなにもならないので、確実に島崎先生のオペが受けられる輸入角膜にふみきった。片眼つつ2年にわたって移植を受けたが、一回2週間の入院になるので、個室で1万4千円から2万円という安さは助かった。

オペは先生を信頼しているから心配しないが、術後2日間は天井を向

いて平に寝ていなければいけないこと。これは体が痛くなつて湿布を貼るやら、クッションを使うやら、想像以上につらい。そのあと2日は起きてもいいが下を向くなというので、トイレや食事は、ただでさえ片眼で距離感が悪いのに、ご飯はぼろぼろこぼすし、ナースも見かねて「明日からはおにぎりにしましょうね」と。まるでぼけ老人である。

初めての総回診。眼科だから機械を使うので病棟の診察室に行くと、教授の後にスタッフドクターや研修医がびつしり。患者はじいさん、ばあさんばかりだなあと感心。自分もばあさんなのだとこのことを忘れていた。

そして1日5回、1回に4種類の目薬を5分間隔で点眼するのが大仕事。これに追われて1日が過ぎる感じが。入院中はナースがやってくれるが退院3日前くらいから練習させら

れる。電車の中などで、さつとさしている人をよく見るが、私は目薬などさしたことがないのでへたくそで顔中びしょびしょ。薬がすぐ減つてしまふので、まさか飲んでるんじゃないでようねと笑われてしまふ。おまけに1ヶ月は顔を洗つてはいけないというので、退院したら真つ先に『洗顔禁』と書いた紙を浴室のドアに貼りつけた。

退院前日、移植者のオリエンテーションで24時間連絡できる緊急電話番号を渡され、ドナーへの感謝の手紙を書くように言われた。ドナーはアメリカ人だというと友人たちが言うのは一様に「じゃあ、青い目になるの？」

視力が出るまでかなりかかると聞いていたので、白い杖もなく、ちゃんと黒い両眼を開けて退院できたのはうれしい驚きでした。感謝、感謝。

年をとるにつれて大学病院に行くのが嫌になってきた。理由は、予約時間にかかわらず途方もなく長い待ち時間、そして年とともに気短かになってきた私。そこでいろいろな病院を試すようになった。だから私の手元には、診察券コレクションができた。

赤坂の前田病院は、初代の友助院長と父が親しかったのに始まり、2代目は私の幼稚園の先輩、そのあと3代目、4代目と続いて私のカルテは片手で持てない重量である。だから入院しても居心地がいい。

女子医大緊急外来―昔からのカルテがあり、夜の緊急は待ち時間なし！の駆け込み寺。

その他、耳鼻科、眼科、歯科、皮膚科など、おもに仕事場の表参道の画廊に近い所のクリニックがある。

今、私のかかりつけは、山王病院。

幼稚園のクラスメートで慶応の交友君からの紹介で外科の奥田先生にかかったのが始まり。特に気に入っているのは都内のホテルみたいな内装や雰囲気。ここは多少待つてもがまんできる。先生方やスタッフの人々も感じがよい。でもあまりたびたび行くので循環器の主治医にはうるさがれているに違いない。

耐えられない暑さだった8月の末、突然左足が痛くなった。みると静脈瘤がふくれあがっている。奥田先生に相談すると、メデイカルセンターの血管外科の予約をとってくださった。9月16日からアメリカでの写真協会コンファレンスにでるのでぜひそれまでに治したいと打ち明けたら無理してその日のうちにMRIの予約を入れてくださった。

このMRI、いつもと違い、胸一杯に心電図をつけ、1時間もかかった。

このMRIは当時最新鋭機で、他の病院からも患者がまわされてくるという。

土曜日、時間外なのに池田先生がみてくださったって血管に問題はない、なお静脈瘤は痛むものではないということで、国際医療福祉大学の脊椎センターに紹介された。

翌々日、三田病院で西山教授の診察。神経根ブロックの診断を兼ねてすることに、家族に来てもらうように言われた。姪がブロックを受けているのを知っていたので、痛み止めだと思っていたら大違い。さす時より薬が入ってくるよときの痛みはまさに地獄。あと2〜3時間は車いすでしびれがとれるのを待つのだが、痛い、立てないと私は大騒ぎ。先生は何度も様子を見にきてくださり、辛抱強く私の泣き言につきあってくたさった。所見ではそれほどひどいものではないが昔ガンをやっているの

で、念のため腫瘍マーカーと骨シンチをするように言われ、その間内服で様子を見ることになったが、次の診察予約日に出かけたら、なんと地下鉄の中で倒れてしまった。降りようとして立ち上がったら、足の痛みではなく腰が抜けたようになって立ってなくなり降ろしてと必死に訴えると、周りの男の人たちが抱え起こし、二人が閉まりかける扉を抑えて降ろしてくれた。幸いにも階段などない駅で、駅の管理室から病院に電話して迎えを呼んでもらった。

メディカルセンターではすぐに頭部のMRI、MRA、神経内科の担当になり、そのまま入院になった。ロビーム部屋も山王病院に輪をかけてホテルのよう。人間ドック用の部屋しか空いてなかったらしく、病室には常備の酸素など一式がない。代わりにパソコンがつけられるデスクがあり、フルサイズの浴室、テレビは家

で使っているのと同じ32型のシャープだからリモコンも使い慣れているのがうれしい。先生方も看護師の皆さんも明るくてしかも礼儀正しいので、大変居心地がいい。その夜から点滴が始まり、3日間続いた。院長の天野先生は回診にみえると鑑定団に出てきそうな黒革の小さい鞆からトンカチ、ぼさぼさの筆、ピザカッターをとりだし、あちこち叩いたり、足の裏をひつかいたり、手や口や目を動かしたり、不思議な診察。検査結果と合わせご診断はTIAという、脳梗塞一歩手前とのこと。一晩泊まるくらいと思っていたのが、結局一週間になって、次の三田病院の診察には看護師をつけて車で送る手配もしてくれ、至れり尽くせり。面白かったのは、血液検査で栄養失調(?)とでたらしく、食事が途中から二の膳付きになったこと。二人で運んでこられる。私の16日渡米希望というのが、

すべての先生方に伝えられていたらしく、皆さん気配りしてくださるが、内心ではやめてもらいたいと思っておられたにちがいない。私自身、自信がゆらぎ、家からパソコンをとりよせ、ホテルやロケの予約キャンセル、友達への連絡を毎日やっていた。

今回、あらゆる検査をしていたらいたおかげで、当分は安心していられるだろう。長年いろんな病気の心配を訴えては困らせていた山王病院の主治医が現れたとき、元カレに再会したような不思議な懐かしさを感じた。

点滴がとれた翌日にやっとシャワーが許された。浴槽のなかに椅子を入れ、看護師さんがシャンプーまでやってくれた。

暗くなつて窓の外を見ると、ビルとビルの上に大きな黄色いお盆のようなものが光っている。読書用の眼鏡しか持っていなかったので輪郭が

ぼやけているので、あれはなんでしょう？と聞いたら、お月様ですよ、と言う。なるほど、まもなく隣のビル
の陰にかくれてしまった。東京タワーもきれいなオレンジ色に輝いていた。

フランス通信、他

吉元 昭治

フランス通信

手許に滝沢敬一氏が戦中にフランスにあつて書かれた『フランス通信』の第一、第五、十巻(岩波書店)がある。原稿の第一は昭和十二年五月(一九三七)に始まり、昭和十六年(一九四一)の支那事変、大東亜戦争が始まってから戦後昭和二十六年(一九五二)にわたる、フランスにあつて書かれた随筆風の通信である。フランス

の敗戦でリオン市に逃れて書きつづられたが、初め原稿が岩波書店に届いたのは昭和十八年十二月三十日(一九四四)の異であつたという。しかし当時の出版事情が戦時中で不可能であり、ようやく戦後昭和二十一年(一九四七)に出版された。第十は昭和二十七年四月(一九五二)になつた。戦時中のフランスの様相をよく伝えてくれて、ペタン將軍のヴィシー政府がなくなり、ペタンは罪人となり、ラヴァール首相は死刑される。若い頃、この一連の本は、戦後、外国の情報に飢えていたのでよく読まれた。私もその一人だつたが、今でもよく憶えている一章がある。それはフランスでは「日曜日などの休日に病気になるのはその人が悪い。医者
は休日には休んでいる」というのだ。ここを読んでこれは医師の道に反するのではないか、休日でも診るのが急ならば医師の務めであろうと思つ

ていた。その後自信が医者となり日夜診療をつづけ、当初、病院経営、救急病院、産科をして休むひまもなく働いた。しかし歳と共に体力の限界を感じ、病院や救急病院を閉じ、産科も止めて、診療所として休日は休んでいる。考えると医者は神様ではなく一人の人間である。最近医師で労災死があるという。若い医師が命をかけて働いているのだ。自分の若い頃と比べて痛切な想いがしている。こういつてもこの歳になつても患者を診ている。まことに「雀百まで踊りを忘れず」であり、これでも国民の大義務「勤労、教育、納税」は果たしているつもりである。

滝沢氏の生没はよくわからないが、明治三十四年(一九〇二)一高入学、東大法科を出て正金銀行に入り、フランスのリオン支店に行き、そのままフランスに留まり、フランス人と結婚し、子をもうけられている。この

間、殆どフランスにおいて『フランス通信』を送っていたのである。

落語 感じは難しい

登場人物、御隠居(御)と八つあんこと八兵衛(八)。時代は江戸時代。場所は下町、ある横丁。

八「御隠居はいるかい? お早う」

御「おう、八つあんじゃないか。そんな所に立つてないで、まあ、お入り」
八「それじゃ遠慮なく、おじゃまします」

御「して、今日、八つあんのおでましのわけは?」

八「それがですねえ、近頃あつし瓦版をやつと読めるようになって、ひらがなというのはわかつて来やしました、どうもあの漢字というのはよくわかんねえ。そこで物知りの御隠居に聞こうと思つてやつてまいりました」

御「おおそうかい。私にわかる事ならいいがね。またあの横丁の小町娘が嫁に行くというのを聞いて心配になつて来たと思つたよ」

八「へえ、そんないい色な話ならようすが」

御「昔の人はえらかつたね。漢字を勉強するのに例えは《戀》という字は《言》しという心」とか、《櫻》という字は《二階の女が気にかかる》といつて覚えたものさ」

八「そりやスゲエや、昔の人の頭がよかつたでしたね。御隠居、《狸》と《鯉》は親戚ですかね。里という字にケモノが狸で、魚は鯉さんすね」

御「ハアハア、全くそうだね」
八「猫と錨も同じムジナですかね。苗にケモノが猫で金ものとなると錨(錨)になりやすね。《蛇》は虫なのですかい?」
御「全くその通りだが、私にもよくわからない」

八「ごめんなせえ、もう一つ。《風》と《風》とはなんでタテに一本ないのが風で、あるのが風になるんですね」
御「今日は八つあんに逆に教えられたよ。よくわからないからひとつ先の横丁の寺子屋の大先生に二人でいつか行つて教えてもらおう」

八「そう願います。ところで御隠居、今日の御賽銭は?」

御「そんな事より今月の店賃たなちんを忘れないで早くもつといで」
八「こりや一本とられのすけど」

そういえば、今の現代漢字もよくわからないのがある。例えば《鐵》と《鉄》である。金を失うのがなんで鐵なんだろう。金を失うのは貧乏人になつた事で貧乏人は鐵なのだろうか。よくわからない。もつとわからないのは中国の簡体文字だ。余りにも簡約しすぎて謎ときのように見てみる

とわかる字が多々ある。それをして
みるのも又、おもしろい。

昔のうたと今の世相

「歌は世につれ、世は歌につれ」と
いうが、昔の歌と今の世の有様と比
べてみると、世相のうつる変わりが
わかってくる。

○昔の子守歌。「坊やはよい子だ
ねんねしな、……、里のみやげに 何
もろうた、デンデン太鼓に 笙の笛。」
このデンデン太鼓や笙の笛は何処に
行ったら見られるのだろう。昔の子
供の玩具（おもちゃ）だったのだ。デ
ンデン太鼓は探せば今でもあるかも。
○お茶とお菓子を前にして、ひと
こともしやべらぬ、そばでラジオは
甘い歌を…

喫茶店の風景。今ではラジオの代
わりにテレビだろうが。

○お茶を飲んでも ニュースを見
ても、粋なあの娘はフランス人形

これも喫茶店のはなし。お茶を飲

むというのは今ではコーヒーショツ
プで飲んでいるが、当時は男女の語
りの場でもあった。ここでニュース
を見るとあるが、ニュースは聞くも
のでは？ 当時ニュース映画という

のがあつて国内外の出来事をいち早
く映画で記録し、ニュース映画専門
館というのがあつて上映していた。

時間もオール一時間余り、料金も
従つて安かつた。同時に、ポパイ、ミ
ッキー、ベティちゃんなどのアメリ
カ漫画映画をも併映していた。(ディ
ズニー映画はまだなかった)

○青い背広で 心も軽く、街へあ
の娘と 行こうじゃないか、……、今
夜言おうか 打ち明けようか、いつ
そのまま 諦めましょか

なんともいじらしい昔の青年らし
い。青い背広で彼女を誘つて多分映
画でも見に行つたのだろう。しかし
心の底を打ち明ける決心はつかなか

つたのだ。

○雨雨ふれふれ かあさんが、蛇
の目でお迎え うれしいな、ピッチ
ピッチ チャップチャップ ランラ
ンラン

蛇の目とは蛇の目傘。和傘で油紙
の和紙に、竹棒の骨がついている。今
では花街辺りの芸者衆がお持ちだろ
う。この和傘に対して今の傘は洋傘
と言つていた。絹製のものが上等で
あり、防水加工というものを施して
いた。

○空にや今日もアドバルーン、さ
ぞかし会社で今頃は、お忙しいと思
うたに、あゝ それなのに それな
のに、ねえ おこるのは おこるの
は、あたりまえでしょう

宣伝媒体としてよくアドバルーン
が上がつていた。「……大売り出し」
「○○○(商品名)」、戦争中には「皇
軍百万杭州湾敵前上陸」と勇ましい
のを今でも覚えている。

戦前や戦後の早い時期、アドバルーンはよく上がっていた。空を見上げるといくつもいくつも上がっていた。

まだまだ続きがある。

ある時、婦人が診察に来られ、診察すると特別に悪いところもなさそうで、ただ目が泳いでいるようであった。そこで「あなたは、夕方になるとユーウツになりませんか」というと「そうです」、「なんだか泣きたくないですか」と聞くと「はい、その通りです」と言われるので私は何気なく昔の唄を歌い出した。

へひと目見たとき 好きになったのよ、何が何だか わからないのよ、日暮れになると 涙が出るのよ、知らず知らずに 泣けてくるのよ、ねえねえ 愛して頂戴ね、ねえ ねえ 愛して頂戴ね」と。するとその御婦人は「そうです。愛してもらいたいのです」とおっしゃる。多分御主人との間

がうまくないのだろう。そしてさっぱりとしたお顔になって薬も出さずに帰っていただいた。時にはこのような療法も必要となる。彼女は誰かに話を聞いてもらいたかったのだ。

この唄は、佐藤千夜子さんが昭和四年に発売されていて、この曲をパリのジャズバンドがアレンジしたレコードがどういう訳か我が家にあつてよく聞いていたから憶えていたのである。

次は昭和十年前後。サラリーマンの若夫婦を唄ったのが流行した。「資本主義が生まれ、大会社、三井、三菱、住友などが、また製薬会社では、タケダ、シオノギなど江戸時代の伊勢、近江、大阪、京都商人の流れがつづいて巨大化してきて、また西川など江戸に生まれた商家がそのまま会社となつていく。このような背景でサラリーマンという社会階級が生まれたのである。

○ワイフもらつて嬉しかったが、いつも出てくるおかずがコロツケ、今日もコロツケ、明日もコロツケ、これじゃ年がら年中、コロツケ

○あなたと呼べば あなたと答える、山のこだまのうれしさよ、「あなた」「なんだい」、空は青空 二人は若い

○姿やさしく 美しく、何処がかわいかわからない、ここかあそこかわからない、なんです あなた、いや別に 僕は その あの、パピペパピペ。パピペ。パピペ。うちの女房にや ヒゲがある

○もしも月給があがったら、私はパソルル買いたいわ、……、いつ頃上がるのいつ頃よ、そいつがわかれば苦勞はない

パソルルは今日は安く買えるが、当時は高嶺の花だったのだからか。

○月が鏡であつたなら、恋しあなたの面影を、夜毎うつして見ようも

の、こんな気持ちでいる私、ねえ、忘れちゃイヤよ、忘れないでね

この中には映画の中で唄われるのもあり、杉狂児などがよく出て唄っていた。

最後に、昭和始め頃のものと思うが、意味不明の「ストトン節」というのがある。

○ストトンストトンと通わせて、今更イヤとは胴慾な、イヤならイヤだと最初から、言えばストトンで通やせぬ、ストトン ストトン もっと古いのには、

○国を出るとき ふんどし忘れ、長い道中 ぶらぶらと

昔の平和な時代から生まれた唄のいくつかをご紹介したが、なにぶん記憶も古いものなので或いは間違っているやも。その節は御容赦願います。

記備談語 10 (29・08) 29・11

佐藤 玄祥

意向と威光

「間違え」は具体的なミスや取り違いを言う。「誤り」は正・不正の基準に沿って判断を下す。「過ち」は社会規範や道徳面から否定的な行動結果を言う。また、取り返しが付かない失敗さらには過失を意味する。「錯誤」は認識が事実と違ったり、間違った認識による判断を言う。「誤謬(ごびよう)」は考えや知識などの間違いに對し使う(広辞苑)。

最近の安倍首相の言動は、これらの本来の意味を取り違え、公正であるべき政策が国民感情を逆なでするような国会答弁に見られる。総理の「意向(威光)」に歪められ、周囲の人間は諫(いさ)めるところか付度で追従する。黒でも白と平気で押し

通してしまふ。

人間は誰にも「過ち」はある。改めるに憚(はば)かること勿れ」は論語の教えだが、日本人は潔(いさぎよ)さを尊び、反省する相手を許す寛大な心を持つている筈だ。

上に立つものは、非があれば素直に認め、頭を下げる勇氣も必要で、「弥縫(びほう)」「失敗・欠点などを一時的に取り繕うこと」をすべきではない。(29・08)

自己管理

大相撲名古屋場所は2横綱1大関休場の中、横綱白鵬39回優勝と前人未到の1050最多勝で幕を閉じた。1047勝を挙げた時、ご本人から本場所での調整法を知った。「稽古5日間で5kg落とし、残り1週間稽古を積んで体重を戻す。だから15日間持ちこたえられるのだ」更には「トップより記録に並んだ方が嬉しい。

不思議だ、まあ一つ待った（11日目御嶽海に26連勝を阻まれた）があつたからね」と御嶽海を称えていた。

スポーツマンの自己管理は、如何に長くその地位にあり実績を増すかに懸かつていて、徹底した鍛錬法を知ることは少なかった。

長寿社会の肉体の自己管理は、先頃105歳で亡くなった日野原重明博士をお手本に多くの長寿者の食事内容や運動法を、その経験則に従って学び、実施し、理想とするPPK運動推進のためにも、寝たきりにならず、耄碌（もうろく）せず、明るく、楽しく、清潔な老人としての「百壽」を目標に頑張りたいたいものだ。（29・08）

記憶と記録

やっと国会閉会中に、学校法人加計学園の獣医学部新設を巡る審査会が開催される事になった。追及する野党も加計問題に焦点を絞るようだ。

政府が一体となって疑念払拭の態度に欠け、支持率急落と相俟って、渦中の安倍首相は冒頭から「国民目線に丁寧な説明を重ねたい」また「李下に冠を正さず」とも言い、強気から一転、反省に徹したような姿勢であったが、他の官僚らは相変わらず「記憶にない」「記録にない」と切り捨てる物言いが目立っていた。前川前文部次官と和泉首相補佐官のやり取りは、引責退官した前川氏が正しいと見えます。

「記憶と記録」の喪失は高齢者だけの問題ではないようだ。隠蔽しようとするから「知らぬ、存ぜぬ」になるのだ。「眞実はひとつ」のはずなのだが？ 事実を明らかにするには当該加計学園理事長の証人喚問が必要だ。利害が無いのなら、首相が「貴方のことと疑われている。出て来てくれ」と言える筈である。（29・08）

免疫療法

6月に亡くなった市川海老蔵令夫人小林麻央さんは手術を拒否して、医学的には全く根拠の無い「水素温熱免疫療法」「HSP療法（既報）で体温を上げ、ガン細胞を攻撃したり、身体の修復に関与している」を受けていたという（週刊現代8/12号）。水素水は医学的にガンに対する効果は不認で、明らかな「葉機法（旧葉事法）」違反、しかも法外な治療費を取っていた。正に自由診療のため（100万〜200万円単位）カネを払う側が自己責任として、回復の効果が全くなくて転帰しても裁判沙汰にならない。一方、ガンがビールスであるとして、70年代からワクチン療法で免疫細胞療法を用いてガン患者に対応し「丸山ワクチン（V）」「蓮見V」等が開発された。現在ガン・ヘプチッドV・樹状細胞V・キメラ抗原受容体（CAR）・遺伝子導入T細胞輸注療法など

があるが、詳細な学会への医学的データ報告が少なく、これら全て現時点で医療診療と認められず、高額が多い自由診療なのだ。溺れるものは藁をも掴む心理を利用した医学詐欺的行為を暴くと、良心ある医師の告発（同誌）もあった。（29・08）

表彰状（40回出席）

「継続は力の証」一般社団法人日本指圧協会が毎年実施している「指圧治療夏期大学」で40回参加の「表彰状」を授与された。

指聖浪越徳治郎先生が創設された第1回の指圧治療研修のための全国大会として昭和37年より連綿として続いている伝統と権威のある夏期大学が、今年55回を迎え、節目で昭和52年から参加して表彰を受けた訳だ。

表彰する協会の副理事長として主催者側の立場で受け取ることは面映

ゆかったが、後進の為にと思い有り難く受賞した。

今年も国外支部、特にベトナムから12名の方々が「指圧」を学びに参加された。

因みに浪越徳治郎先生先生は「よく学び・よく遊べ」と夏の時期2泊3日温泉地に缶詰で「勉強と観光」（今年は熱海海上花火大会）することを提言された。（29・08）

食中毒（アニサキス）

夏の高温期に冷蔵庫は過信しない方が良い。又、水分の過剰摂取や冷たい飲み物によつて胃液が薄められ、胃酸による殺菌が阻害され、ポツリ又ス菌・ノロウイルス等の病原菌による食中毒が起こるシーズンになった。

生のサバやサンマなどの青魚を食べた後に激しい腹痛が起きたら疑うべき病気は寄生虫「アニサキス」の幼

虫による食中毒がある。この幼虫は体調2〜3cm幅、1mm弱で白色、青魚の内臓筋肉に寄生し、生食の際、胃などの粘膜に潜り込んでアレルギー物質を出し、強い痛みを引き起こすという。厚生労働省によると2016年国内食中毒1139件中、1ノロウイルス（354件）、2カンピロバクター（339件）に続き、3位（124件）であった。

予防には冷凍・火を通す・内臓は除く・目視除去など。酢や醤油、ワサビでは死なない。胃酸に耐えるほど強い。60度1分過熱・マイナス20度24時間冷凍と厄介だ。国内の天然産ほど注意が必要。この時期、生食や寿司も程々に！（29・08）

国連の制裁決議

グアム沖へ弾道ミサイル発射を予告するなど挑発を止めない北朝鮮に、トランプ大統領は軍事報復をも辞さ

ない姿勢を強調した。

北朝鮮の動きは七十数年前の日本の状況と重なる部分、A B C D包囲網など石油を巡る国際社会の圧力が日米開戦に繋がったのだ。

両国指導者は、歴史に学ぶ姿勢が見えず、北朝鮮が国連安全保障理事会の制裁決議（石炭・鉄鉱石・海産物などの全面禁輸する制裁措置）の経済政策への打撃が予想される中、国内の団結と引き締めを図るため、反制裁の連日官製集会が報じられている。

一方、米専門家は、米領グアム周辺へのミサイル発射計画に関し、商業衛星画像の分析では、米軍との衝突を想定した有事態勢をとるまでには至っていないとの見解を示している。核には核を”では地球破滅になる。被爆国は何をしたらいいのか！

イソップ物語「北風と太陽」を思い出す。
(29・08)

沈黙を破る

治安維持法の復活とも指摘される「共謀罪」法が施行されたこの夏、戦後72年で一番「あの時代」に近づいてると、特攻隊（特別攻撃隊）生き残りの方々が「一度は生き残ることを諦めた」が「沈黙は中立では無く、権力者への従属だ」として、記憶の薄れない間にと、当時の心境を語り出されている。

我が鷺宮剣友会の師範大館和夫氏(92)も、8月13日TVで、池上彰キャスターの問いかけに応(こた)えておられた。特攻隊生き残りとしての生き



ざまに、戦後警察官として身分を公にしながら、名刑事として又少年剣道師範として元気で活躍されている中で、今語らねばならぬと、「ゼロ戦特攻隊から名刑事へ」(芙蓉書房)既報(28・05)出版やTVに出演されたのだ。
(29・08)

ガン遺伝体質

遺伝子BRCA—1又はBRCA—2に変異があると、乳ガン6〜12倍・卵巣ガン8〜60倍になり易いという。

米国女優アンジェリーナ・ジョリ—さんはBRCA—1変異があり(母、叔母)、乳ガン対応で、両方の乳房をガンになる前に切除し話題になっている。この遺伝子の変異は50%の確率で、親から子へ伝わる。遺伝体質を知っていれば意識して検査を受けられるので、早期発見に繋がる。但し、この検査に対する受け止

め方、伝え方で心理的ショックがあり、ガン発生率が高いと知るダメージが大きいので、検査を避ける傾向とどう対応するかが今後の課題である。遺伝子情報の「ガン治療」への活用はまだ始まったばかりの段階で、「先ずは正しく知ってもらいたい」と埼玉ガンセンター赤木先生は言う。家系を辿り、病因を探り、体質を理解することで徒に不安がらず、毎日の生活に注意することが肝要とのこと。**急報：新薬**「オラパリブ」(アストラゼネカ社)が遺伝性卵巣ガンや前立腺ガン対象の国内初の治療薬として承認申請した。(29・09)

足のつり

夏冷え対策に第2の心臓といわれる足元を温める理由として、足の「ふくらはぎ」は全身の血液循環を助ける重要なポンプの役割を持つからだ。

重力の関係で全身の血液は約7割が下半身に集中している。脚部を冷やすことは全体の「冷え」に関連し、体調不良の原因でもある。寝ていて足に激痛が走り、堅く痙攣する状態は「こむら返り」とも言われる。(こむら〓ふくらはぎ)。多くはふくらはぎ部だが、太もも・足指・腹部・背中の筋肉も「つる」こともある。「つる」は筋肉の痙攣で、異常に収縮し緩まなくなる状態である。筋肉表面の感覚受容器が痛みのセンサーを刺激するため、猛烈な痛みを感じる。原因として大量に汗をかいたり、血中電解質(Ca・Mg・K)バランスの乱れが筋肉の収縮弛緩を起こす。もう一つには血行不良で、寝ていて体温が下がるポンプ異常である。水分補給(ポカリスエット等)や冷やさないことと、しばらくすると寛解するが癖になるので、漢方では「芍薬甘草湯」を薦める。(29・09)

のど仏さま

COPD「慢性閉塞性肺疾患」(既報29・01、29・06)については多くの知見を得たが、一つの原因の誤嚥(ごえん)の肉体的予防が「肺炎がいやなら喉を鍛えなさい」(西山耕一郎著)に詳しい。

喉は呼吸・嚥下・発声を同時にこなす絶妙な交差点器官である。嚥下の時、瞬時に鼻に抜ける通路と肺に向かう器官に蓋をする。0.5秒の速さが、老化と共にタイミングがずれる。これを支える咽頭挙上筋群を日頃鍛えればよい。喉仏は60歳を過ぎると、筋肉の衰えから下がり始め、男性が頭著で判る。喉仏とは、火葬の際第二頸椎が連結部位を含めて、座禅の「仏様」に見えるから命名された。誤嚥調整の外部に分かり易く見せてくれる存在の「仏様」である。挙上筋を鍛え(本誌に詳しい)カラオケで日頃か

ら、高音と低音を交互にだす効果的発声法で、誤嚥性肺炎を防げれば、日本人の寿命は更に10年程延びる。カラオケで死因3位を下げようではないか。(29・09)

インパール白骨街道記

終戦記念日の夜、「戦慄のインパール」(NHKスペシャル)を見た。予備知識として、敬愛する土屋喜市氏(長野県人会連合会副会長長文京区在住)の「果てなき白骨街道・インパール作戦死闘の記録」(信州の東京2016・6〜9月号)を読んで置いた。無謀な作戦計画と残酷な命令遵守の規律に、極限の様相を知り、「天皇の命令」で生きること拒否された人の生命の軽さと、戦争の愚かさを改めて考えさせられた。

破竹の勢いの日本軍の昭和17年・18年前半、南方を占拠し、連合軍の「援将ルート」を遮断すべく、インド

国内の「反英運動」を支援するためインド北東部の要衝都市「インパール」の占領を狙った作戦が、この始りであった。現地調達物資・弾薬等の種々補給が困難での作戦反対の中、第15軍司令官牟田口廉也中将からの強行支持で、昭和19年3月、インパール作戦死闘が開始されたのだ。食料・武器無き戦いは、戦死3万・病死4万という。愚かしさ、鎮魂あるのみ。(公掌) (29・09)

モラルとモラル(官僚の)

先の国会で、官僚答弁の崩壊を象徴したのが「森友学園」問題で対応した「佐川財務省理財局長」(当時)だ。事実究明を拒み、国税庁長官に栄転し、諸般の事情(便利な言葉)で就任会見を避けている。前川前文部科学次官や谷查恵子氏(安倍夫人付き)の件もある。官僚の意識は保身へ向かい、モラル(道義)とモラル(士

気)の欠如に繋がる。

2014年5月発足した内閣人事局の影響があると、成蹊大学高安教授は言う。同局は各省庁の事務次官など600人の幹部人事を一元管理している部署である。菅官房長官は「政権が掲げる政策に向け方向性を一つにして働く官僚を選ぶ」と選挙基準を語った。政権の思惑に沿わない者は除外する訳だ。

日本と同じ議院内閣制の英国も政治主導だが、政権から独立した第三者機関の人事委員会が各省庁から選定し首相に推薦する。無能な政治家や時の政権の意向を忖度せず国民の奉仕者という原則を胸に官僚の人事には中立的制度が必要なのだ。(29・09)

8月の雨

夏が来て、夏休み真っ黒に日焼けした「黒んぼ大会」の少年時代を思

い出す。新学期が始まったが、今年の小学校の定例プール水質検査が8月は雨で出来なかった。

東京都心では、この8月、27日間も雨が続いた。観測記録のある1886年(明治19年)以降の最多記録(気象庁発表)に並んだようだ。

オホーツク海高気圧の勢力が強く、北東からの冷たく湿った空気が流れ込んだという。8月の平均気温が7月より低かったため、地熱が弱く豪雨を齎す夏の象徴の積乱雲が発生し難かったと分析される。

日照不足は稲作・野菜・エアコン・ビール・アイス・プール等に影響が顕著に現れる。迷走台風5号から始まって、東西に長い日本の地形で各地に大雨による水害が発生していたこの夏、不穏な「火星12号」も現れ、人智の及ばない自然との戦いの上に、更なる余計なものは不要である。

(29・09)

かりゆし

カラオケ教室の古い会員Sさんが十数年ぶりに沖縄から来宅し、お土産に「かりゆし」を戴いた。蒸し暑い夏の都会で、こんなに清涼感のある衣服があるとは、着用してみても気が付いたが、素晴らしい沖縄の特産品の一つであった。「かりゆし」は地元という言葉で「めでたい」という意味で、県内で縫製された沖縄らしいデザインのもの」という定義があり、県庁では正装とされ、年中着用OKだそうだ。政府内でも2000年の「九州・沖縄サミット」で各国の首脳が着用したのを切っ掛けに広まったのだ。ハワイの「アロハシャツ」と共に、日本でもリゾートウエアとして酷暑に効果を發揮している。この「カリリュシウエア」は沖縄県や内閣府のHPによると、1970年に「アロハシャツ」を参考に作られた観光PR用の

「沖縄シャツ」が原形という。そういえば、「アロハシャツ」は日本からハワイに渡った移民が和服の着物を仕立て直したのが起源とされ、今ではハワイの正装である。夏の良いお土産でした。(29・09)

タウ(タンパク質)

アルツハイマー病かどうかを、血液から診断出来る手法を京都府立大 学徳田隆彦教授が開発発表された。

タウというタンパク質の中で脳内に蓄積し易いタイプのタウが増えることアルツハイマー病が発症するので、このタウの血中濃度を測定すれば判定が可能である。ただし、脳から血中には極微量しか移行しないため、タウに結合する抗体(目印)を利用し、特殊な分析方法で従来の1000倍の感度で検出可能となった。

簡便・迅速に測定出来るため、記憶テストなどの前に実施する患者のそ

クリーニングなどに利用可能で、実用化に向けて関係企業との共同研究を検討してゐる。

外見・行動等を人が確認しなくても、脳内タウタンパクの測定により、治療と対応が事前に可能になるのだ。

(29・09)

風を読む(998)

9月9日福井県営競技場で行われた日本学生対抗選手権100メートル決勝で「9秒98」の日本新記録を樹立した東洋大学4年桐生祥秀選手の記事は、号外発行に裏打ちされう程、日本人待望の「10秒の壁」を破った出来事であった。

本人の努力は当然の事ながら、裏方でもあるスターターの「風を読む」経験を駆使した援護があったことを知った。2.0mを超える微妙な競技場での「追い風」は、当日11レースが全て「追い風記録」であった中で、ワ

ンチャンスの微妙な号砲でスタートさせた福岡スターター(福井県立高校)の存在があったのだ。

スポーツの原点ともいえる100メートル走は、己の肉体で勝負する世界、アフリカ系・アジア系の足の形態の違いの中で、桐生選手は「歩幅・脚の回転」の常識を破った「ジェット筋肉」を鍛えたのだ。その成果を讃えたい。

高校時代の「998」のゼッケンの写真が記録達成を暗示していた。因に世界記録はボルト選手(ジャマイカ)9秒58(2009)。追い風参加記録ではなかった。(29・09)

巾着田と高麗神社

秋たけなわ、彼岸花が赤一色満開の飯能近郊、巾着田が見物(みもの)である。別名「曼珠沙華(Manjushaka梵語)」は仏語で如意花と訳すとか、これを見るものは自ずから悪行を離

れるという「天界の花」である。彼岸の頃、墓地に多く見られたのでその名がある。

星先生作詞作曲「巾着田の詩(うた)」が著名だ。漢方療法で、腹水を除くため、その根を磨り潰し荏胡麻(えごま)油と混ぜ、足底裏に貼る外用薬として古来から使われていた。

近く日高市高麗神社も秋の散策コースになっている。

9月22日、天皇・皇后両陛下が、朝鮮半島からの渡来人「若光」を祀るこの神社を訪問された。我が国は高麗・新羅・百済三国が鼎立(ていりつ)した時代から、千三百年以上におよぶ渡来人を通じての先進的な文化を受容しながら、1910年日韓併合以来の不幸な時代が続いた忘れられない事実があり、今回の天皇のご訪問は朝鮮半島に深い関心を示された貴重な機会であった。(29・10)

HDLとLDL(コレステロール)

コレステロールは、身体の組織の原料となったり、ホルモンを合成したり、人が生きて行くために欠くことのない重要な成分である。ハイ(H)とロー(L)があり、通常、善玉と悪玉と分けて考えられている。血液中のコレステロールを全身の各組織に届けるのが「運び屋(LDL)」、余ったコレステロールを回収する「掃除屋(HDL)」と、夫れ夫れ別の役割を担っている。回収されない「余分」が危険な「悪玉」と呼ばれている。これが血管壁に溜まってしまふと命に関わる深刻な事態を招くため、そのバランスを検査して、健康管理に役立つているのだ。近年、悪玉を消費させる「キトサン(不溶性食物繊維)」を含む「トクホ食品」が認められている。朗報として、治療薬「スタチン」が効かない患者に、新

タイプの「PCSK9阻害薬」が開発された(帝京大)。 (29・10)

新国劇百年

チャンバラに明け暮れた昭和の小学生の頃、颯爽と武光を振り見得を切る大山少年とバツサリ切られ役の僕たち。「新国劇(1971年創設)」に憧れた大山君が、母君の後押しで「辰巳柳太郎師」に弟子入りしたのが戦後すぐの1942年の事。劇団員として、「中里介山」の「大菩薩峠」に初出演の大山君(芸名大山克巳)を同級生と激励観劇した。沢田正二郎が創設し、島田正吾・辰巳柳太郎の双壁の師匠に鍛えられた「大山克巳」は立ち回りの殺陣(たて)で頭角を現し「殺陣田村」は看板芸となり、「新国劇」を背負って立つ次代のスターとして多くのファンを魅了して来た。

剣劇と大衆劇で人気を博したが、



昭和31年6月19日 明治座楽屋にて
大山克巳氏(25歳)と！
写真：(左)私 (右)大山克巳氏

1987年スポンサーの倒産で解散となった。若手の笠原章氏が「劇団若獅子」を立ち上げ伝統の灯を守り、この度9月26・27日に新橋演舞場で「結成30周年・新国劇百年」の公演をした。5年前亡くなった大山君、生前「殺陣では上だが剣道6段には負けた」が懐かしい思い出である。

(29・10)

突然の解散

9月28日、安倍首相は伝家の宝刀を抜いて国会を解散した。

小池新党が「希望の党」として発足、民進党が党首選挙で前原氏が選出され、希望の党に急迫、その結果民進党消滅、残った枝野氏が「立憲民主党」を立ち上げる。慌ただしい週末が月末と重なり、その結果小誌はあまりの激動に国会周辺の記事は様子見をし、流れに任せる事にした。今の段階ではどう情勢が変化するか全く予想も立たない。

北朝鮮の動向も、国連の制裁規制も、米国の北との対話模索等国際問題も緊迫している中で、国内の政変はあまりにも平和ボケの日本国民に如何なる警鐘を受けるのか、不安がよぎるのだ。

ここへ来て「自民・公明の与党」に新たに「希望の党と維新」そして「立憲民主党と共産党・社民党ほか」

の保守・中道・革新の3極が競う様相が顕著になりながら、選挙戦に入ると「改憲・消費税」で違いが鮮明、結果予測は不能だ。(29・10)

薬の卵

その昔、合成化学に興味を持ち薬学を選んだ経緯がある。特に有機合成はマジックで、 $A + B \rightarrow C$ と新しい化合物が研究開発され、合成化学は70年前の薬学生時代の頃から見ると急速の変化を遂げている。

現今、遺伝子を自在に改変出来るゲノム編集の技術を利用して、ガンや肝炎治療にも使われる高価な医薬品の原料成分を含む「卵」をニワトリに生ませ薬を安価に作る新手法を「産業技術総合研究所関西センター(大阪)」が開発した。

この成分は免疫に関係する「インターフェロン β 」(タンパク質の一種)で、ニワトリの精子の基の細胞

にこの成分をつくる遺伝子をゲノム編集で導入、卵に移植し生まれたオスと複数のメスと交配させ、遺伝子を受け継いだヒナを育成、生んだ卵(卵白)から安定的に(100 mg / 1個)生産可能となる。それが「薬の卵」なのだ。

ガンや肝炎に対応する安価な薬の開発が期待出来る朗報である。(29・10)

中吊りの見出し

週刊誌・月刊誌の中吊り広告は一流ジャーナリストによる極端なセンセーショナルな見出しで注目させている。項目別のタイトル(10選)ありである。

《世界》「米国」で「日本核保有論」が台頭、トランプ大統領が変質させる同盟関係で危険なアジアの安全保障代わり論。急転「米朝対話」は有り得る。トランプ背信で日本孤立の

危険。『中国』が仕掛ける「世界漁業戦争」地球規模での乱獲。『ロヒンギヤ』が世界テロの火種に。『中国軍部』「台湾進攻シフト」の不気味。

『政治』「私欲解散」安倍の自滅
『小池を読みちがえた奢りの報い』。
『天皇即位』を翻弄する安倍政権、皇室の意向一切無視の官邸。北朝鮮「核容認論」政府極秘検討。

『経済』「セコム」首位独走の荒稼ぎの裏で揺らく「安心と安全」。
『JAL』エンジン炎上事故連発の恐怖利益優先、危うい社風が原因。

『社会文化』共同通信「平壤支局」名ばかり取材拠点。終末期「緩和ケア医療」の酷い実情。拉致帰国者の知られざる現実 e t c。 (29・10)

女性職員(続)

政治分野に於ける男女共同参画推進法案が突然の国会解散で廃案になってしまった。折角全党一致で法案

成立(29・03)に漕ぎ着けたのに、成立を働きかけて来た「クオーター制を推進する会」代表の赤松良子元文科相は、法案は「共謀罪法」を巡る駆け引きなどで審議入り出来なかつた。営々と積み重ねて来たのに解散で、また第一歩から始めなければならぬと嘆く。そして各政党に対し、超党派で今回の衆議院選挙に「比例代表で女性候補を名簿上位に位置付ける」等の取り組みを提案している。

赤松さんは旧労働省婦人局長として1985年の男女雇用機会均等法の成立に尽力し、1999年には社会の様々な場の「性差別」を無くす「男女共同参画社会基本法」が出来たが、政治の世界では取り残されていると言っている。

因に解散前の女性議員比率は9.3%、今回の女性立候補者は209名過去最高だが、公約に掲げる「男

女均等」には程遠い。クオーター制が望まれるのだ。(29・10)

4・2・3

黒井千次氏が転倒負傷されたエッセイ(9・29読売新聞)は「ひとごと」ではない。ご自宅前の道路で足のもつれから顔面制動で血だらけになり、奥歯の噛み合わせが狂い、その後長い間食べる時の苦しみをサラッと書かれていた。幸いに骨には異常なく、メガネが破損、眼球は無事と。

不謹慎ながら「滑稽」を感じる描写をされていた。打ち身の痛さよりも物が噛めず難儀されたとのこと。足の筋肉の衰えは年齢と共に進行する。「老い」を感じる一文であった。

TPO(時・所・場合)が大事を小事にすることが有る。不幸中の幸いであった。スフィックスの「ナゾナゾ」を思い出す。「4から2、そして3へ」は何か? 人間の一生が答え。

2で長く止まって居るために、食事による筋肉の強化が大切なのだ。不労萎縮を防ぎ、ロコモを意識し、注意深く、無理せず、毎日の運動が必要なのだ。安全のために3(杖)も仕方ないか！
(29・10)

旧制高校寮歌

最近関係する歌謡大会で、敬愛する星桂三先生作詞作曲の「生涯青春歌」懐かしの寮歌エッセンス」を歌う機会が多かった。CDで歌った歌手は何と85歳の早稲田大学名誉教授「三野昭一」さん。昭和4年生まれ、同年近い誼(よしみ)で歌っていた。昨年輪禍で急逝され、一緒にする機会を失ってしまった。

戦後の学制改革で廃止された旧制高校(新制大学に昇格)出身者たちが各学校の寮歌を歌う「全国旧制高校寮歌祭」が10月9日「ベルサール新宿」で開催された。旧制高校38校の

OB等約300人が参加し、懐かしい寮歌を思い思いに歌い上げた。2011年OB達が夫れ夫れ伝わる寮歌を守ろうと今年で7回目を迎えた。多くは85歳以上に該当する。旧制高校教育は日本の発展に多大な貢献を果たし、その原点の寮歌を後世に伝統として残し、続けて欲しい。三野先生も喜ばれて居ることだろう。私も旧制最後の年齢層の一人、寮歌ファンのためにも「生涯青春歌」を歌い続けよう。
(29・10)

ICAN(ノーベル平和賞)

ノーベル平和賞が決まった。国際非政府組織(NGO)「核兵器廃絶国際キャンペーン」ICAN」の受賞である。

7月に国連で122カ国の賛成で採択された核兵器禁止条約の発効に向けて、今後も広島・長崎の被爆者の体験を世界に繋げる活動だけでなく、

世界で唯一の被爆者から「核兵器が如何に非人道的であることの認識」を受け継ぐと「ICAN」の運営委員が語っておられた。「ICAN」は2007年オーストラリアで設立された。「NGO」で、日本のピースボートなど101カ国に468のパートナー団体を持ち、スイスのジュネーブに本部がある。「ICAN」のメンバーは30歳代、ノーベル委員会は被爆者(HIBAKUSYA)が次にバトンを託す集団と見ている証しである。

核禁止条約を、世論で日本の参加(残念ながら日本政府は未批准)を促進して欲しいという。Yes I Can」がある。
(29・11)

銭湯のペンキ画

東京都内にピーク時1968年に2687軒の銭湯があった。時代の流れ(内風呂の普及)により本年9月

末現在568軒に減ってしまった。

(浴場組合調べ)

懐かしい浴場の背景画は、もともと有る絵の上にペンキを塗り重ねて描く。銭湯絵師は丸山清人さん(82)のほか若手(女性)を含めて数人しかいないが、浴場には「富士山」が一番合、数年に一度書き換えるようだ。

「1010(せんとう)」と名付けられた浴場組合の機関誌が各銭湯の宣伝をしている。町田さん(フロマニア)が蘊蓄を傾けていた。銭湯は都の協定価格460円で一日の疲れを癒やしてくれる。アパート住まいの学生や勤め人の外、家庭に風呂があっても健康保持のマイナスイオンが1万以上溢れる銭湯が利用されているのだ。

HSP入浴法(28・08)で馴染みの高円寺「小杉湯」ロビーに10月いっぱい、丸山さんの作品のミニチ

ユア(富士山が多い)が数十枚展示されていた。(29・11)

資格・無資格

日本が誇る自動車メーカー2社(日産・スバル)が出荷のための完成検査に、無資格者による(印鑑の不正使用)検査承認が永年実施されて来たという。神戸製鋼所の検査データ改竄問題が深刻化している中で、世界的評価の高い日本の品質管理が問題になったのだ。スバル社はリコー25万台、50億円を超えと言う。そもそも、法治国家であれば法律に則り、夫れ夫れの資格試験を実施し合格者が有資格者として、夫れ夫れの業務に携わるのは当然の事なのだ。いくら技能が優れていても、資格の有無は絶対なのだ。永年実施されて来ていることは、「資格」を全く無視していることになる。不足なら資格者を補うのが原則だ。

国家試験をマスターして初めて有資格者としての存在と責任の重要性を認識し、意識する。「スバル」の社長は、不正意識が無く「悪意は全く無い」と言い切っている。
安全・安心は何処へ行って仕舞ったのか? (29・11)

健康長寿の心得

「人の世は 山坂多い旅の道 迎えが来たら そう言つてやれ」
還暦(六十歳)・・・とんでもないよと追いつ返せ。
古希(七十歳)・・・未だ未だ早いと突っ放せ。
喜寿(七十七歳)・・・急(せ)くな老楽これからよ。
傘寿(八十歳)・・・何の未だ未だ役に立つ。
米寿(八十八歳)・・・少しお米を食べべから。
卒寿(九十歳)・・・年齢に卒業は無い筈よ。
白寿(九十九歳)・・・百歳のお祝いが済

むまでは。

茶寿(百八歳)・・未だ未だお茶が飲み足らん。

皇寿(百十一歳)・・そろそろ譲ろうか日本一。

こんな落首がお祝いとして届いた。「ため口」でもこんなのは、ほのぼのとして年寄りに相応(ふさわ)しい。何処まで行けるか、行き先不明の旅の道ではある。今を大切にしよう。



(29・11)

国民病糖尿病

厚生労働省は2013年度から第2次「健康日本21」で糖尿病患者数を、22年度迄に1000万人に抑制する目標を掲げていた。

前年ながら、2016年の国民健康栄養調査の推計で「糖尿病」が強く疑われる人が初めて1000万人に達し、1997年の初回の調査時から20年間で5割増加となった。原因としてひとつには高齢化があり、初期段階では自覚症状が現れ難く、口の渇きや排尿量の増加等長年の食べ過ぎ、運動不足など不適切な生活習慣が引き金で可成進行するケースが殆どである。合併症が怖い。放置すると血管が傷つき、脳梗塞や失明、足の壊死に繋がりが兼ねない。更に腎臓機能が低下し、人工透析(糖尿性腎症)が必要となる。

今月14日は「世界糖尿病デー」で

ある。「糖尿病」(血中ブドウ糖の異常増加とインスリンの分泌量の減少)を予防し、限界にきた1000万人到達を下げるべく健康診断の徹底や自治体・医療機関が連携して生活改善や治療促進が必至である。

(29・11)

危険ドラッグ依存蔓延

大麻や覚醒剤などに似た成分の化学物質を普通の乾燥植物や液体に混ぜた製品を言う。いわゆる「合法ハーブ」「お香」「入浴剤」と偽って販売する店が急増し、幻覚や興奮作用を生じ、社会問題化して来た。

厚生労働省は中枢神経に影響する有害物質を「指定薬物」に規定し、11月9日現在2361種あり、所持や輸入・購入や販売などを禁している。規制強化で該当店舗が消え、インターネット販売に移行、依然として盛んに取引されている実態が報告され

た。

中野区に於いて1983年(昭和58年)東京都覚醒剤等乱用防止推進中野区協議会(当時)が組織化を完了し、薬剤師会を中心にして、私は事務局長を経て会長に就任、薬物乱用防止運動を推進し、2013年後進に会長職を譲った。11月9日開催の第31回薬物乱用防止中野区民大会に於ける中学生による「ポスター・標語」の表彰式に参列した。若い人の「薬物乱用ダメゼッタイ」への関心の高まりが嬉しい。(29・11)

回文(2)

40年前、佐藤土砂として東京都薬剤師会誌への投稿の「回文を作りませんか」「回文をどうぞ」を秋葉保次都薬相談役が発掘?され、「記備談語余録」として発表したところ、反響が大きく感動している。久しぶりの作品を、披露します。

☆書いて告げる。知事に「何時(いつ)?」「豊洲よ」と遂に自治る。決定か!(5・25)

☆総理の意知る。「苦!」菅疑惑湧き、数「苦しい則(のり)」。嘘。(6・13)

☆加計ありき。理屈作り切り上げか!(6・17)

☆関心事か、また森友の戻りも現金(たま)か、人心か?(9・22)

☆「加計」に総理 嘘逃げか!(9・22)

問題がいろいろ有り過ぎて、ひとつも解決していない。今現在加計獣医学部新設「可」のニュースが入った。疑問ばかりなのに。

回文は静音・濁音併せて作れます。(29・11)

納め場所のハプニング

大相撲九州場所が開幕した。早々

にとんでもない事件が発生した。一人横綱で奮闘した「日馬富士」が場所前10月26日夜「貴ノ岩」に暴力を振るって傷害事件を起こし警察沙汰になり、2連敗中の3日目から休場となったのだ。神聖で在るべき横綱の権威と品位が問われるのは、前代未聞の出来事で、相撲協会の対応と警察の調査が待たれる。

角界では過去にも暴力行為が繰り返され、社会問題となり、その体質が問われて来た。2010年の横綱「朝青龍」の一般人への暴力事件で引責引退もあった。「貴ノ岩」の提出診断書も疑問が在る。特におかしのは翌日からの稽古や巡業をこなし、場所間際入院そして休場の事態、当事者間で和解したのこともビール瓶不使用もおかしい。

隠蔽体質が相撲協会の改革派の親方「貴乃花」による顕在化された形にも見える。相撲ファンとして今後

の成り行きを見守るしかない。〃御嶽海〃は今年5場所すべて勝ち越し、東正関脇を占め、年間最多勝の行方も霞んでしまった。(29・11)

ライブペインティング

既報。ペンキ背景画(29・10)の丸山清人さんが「銭湯絵師スゴ技披露」として、立川市の小学生(立川市立第六小学校)に地域で学ぶ授業の一環としてライブペインティングが10月24日行われたと報道された。

高円寺小杉湯で11月9日(木)定期休業日に、その丸山さんの



背景画書き換えの現場に招待(実は一般解放)の機会があった。普段は入れない女湯から書き始め、三原色と白・黒のみのペンキを調合中を3時頃見学した。助手の女性の手助けもいらず、一人でどんどん書き上げた82歳は見事。予定が在り最後まで完成は翌日ゆつくり拝見した。(29・11)

※タイトル「記備談語」について

「記事・備考・談話・語録」の頭文字から「きびだんご」として、健康関連情報や関係団体の新情報、世相のニュースから勝手連的に、日々アンテナを巡らせ、頭の老化防止に努めております。(笑覧下さい。少しでもお役に立てば幸いです。

薬剤師・指圧師・剣道6段・NAK認定歌謡講師 佐藤 玄祥(博)(土砂)

ワインの中に真実がある

豊泉 清

最近ではワインの愛飲家が増えてきた。ビールや日本酒と併せてワインが用意してある宴席も多く、最初からワインを注文する人も多い。酒店の陳列棚には国産だけでなく諸外国から輸入された多種多様な銘柄のワインも所狭しと並んでいる。ワインに関する豊富な知識や情報を披瀝して蘊蓄を傾ける通人もいる。私は凝り性ではないが、若い頃からワインに少なからず興味や関心があり、自宅での夕食時や宴席でも程々に楽しんでる。

ではワインに関する世界各国の格言を披露してみたい。先ずドイツ語である。

Der Wein ist ein Spiegel der

Menschen.

「ワインは人間の鏡である」という直訳である。姿ではなく心を映す鏡である。酒を飲むと酔った勢いで本音を語るという意味である。

In alte Schläuche neuen Wein
füllen.

「古い皮袋に新しいワインを満たす」
聖書に載っている言葉だそうである。
Es ersaufen mehr Leute im Wein
als im Rein.

「ライン川で溺れる人よりワインに溺れる人の方が多い」酒の飲み過ぎで命を失うのは万国共通の現象のようである。川の名前の「ライン」とブドウ酒の「ワイン」が韻を踏んでおり、快い音声のリズムを醸し出している。

Wein, Weib, und Würfel ist ein
dreifach w.

「ワインと女と賭博は三重の罪悪である」酒と女と賭け事は男の身を滅

ぼす三種類の罪悪……という認識も

また万国共通のようである。ドイツ語の Wein(ワイン)、Weib(女)、Würfel(賭博)という単語はいずれも W で書き始める。ドイツ語のアルファベットの W は単独で「ヴェー」と発音し、罪悪を意味する Weh という単語

も、単独の W と同じ「ヴェー」という発音である。つまりドイツ語の「三重の W」と「三重の罪悪」は、日本の文学にもよく登場する掛詞の技法が使われている。

Im Wein liegt Wahrheit.

「ワインの中に真実がある」という直訳になるが、酒を飲むと酔った勢いでつい本音を喋ってしまうという意味で使われ、冒頭の「ワインは人間の心を映す鏡」と同じ発想である。

次にフランス語の格言を挙げてみたい。

Quand le vin est tire, il faut le

boire.

「樽から出したワインは飲まなければならぬ」日本語の「乗りかかった船」に相当し、一旦始めたら後には引けない状況を指す比喩的表現である。Le vin entre et le raison sort.

「ワインが入ると理性が出て行く」酒が口に入ると、脳ミソが空っぽになると解釈できるが、少量のアルコールならば素面(しらぶ)の時よりむしろ大脳が活性化されるのではないかと、個人体験から反論を述べてみたい。

Qui entretient vin, femme et dé,
mourra en pauvrete.

「酒と女と賭博を楽しむ者は困窮して死ぬ」ドイツ語の「三重の罪悪」と軌を一にする表現である。

次にイタリア語の格言を紹介してみたい。

Il buon vino fa buon sangue.

「良いワインは良い血を造る」良い血とは良好な健康状態の比喩的表現である。「酒は百薬の長」のイタリア版である。

Il buon vino non vuole frasca.

「良いワインに看板はいらない」美味しいという評判が広まれば、わざわざ宣伝しなくても大勢の客が遠くから買いに来る。漢文の桃李不言下自成蹊（桃李言わざれど下自ずから蹊を成す）と軌を一にする表現である。

次はスペイン語の格言である。

Donde no hay vino y sobra el agua,
la salud falta.

「ワインが無くて水ばかり多いと健康が損なわれる」ワインは大いに飲むべしと読み取れる。スペイン版の「酒は百薬の長」である。

El buen vino es de oro fino.

「良いワインは純金に匹敵する」ワ

インに対する最高の賛辞である。

Vino y amigo, aliejo.

「ワインと友達に古いほどよい」長い年月をかけて充分に熟成されたワインは高品質である。

中国語辞典で次のような表現を見

つけた。

酒后見真情

「酒を飲んだ後で真情を見る」酒を飲むと本音を語るといふ西欧の格言と同じ発想である。

好酒貧眠是貧窮之源

「飲酒と惰眠は貧窮の源である」福島県の会津民謡の「朝寝、朝酒大好き」で財産を失ったという歌詞とそっくりである。

酒是把宝箒 可以掃除憂患

「酒は宝の箒である。憂いを除くことができる」日本語の「酒は憂いの玉箒」とそっくりである。

沈溺干酒以致喪失理性

「酒に溺れて理性を失う」フランス語にも酒が入ると理性が出て行くという類似の表現がある。

酒醉心不醉

その一方で「酒には酔うが、心は酔わない」、つまり酔っても理性は失わないという逆の表現もある。

海溺者寡 喪酒者多

「海で溺れ死ぬ者は少ない。酒で命を落とす者は多い」ドイツ語のライン川で……という格言と同じ表現である。寡は少ない、喪酒は酒の飲み過ぎで命を失うと解釈できる。

醉翁之意不在酒

「酔っ払いの真の目的は酒を飲むことではなく何か別の所にある」日本の「花より団子」に相当するといふ解釈が辞書に載っている。花見とは言うものの、実は団子を食うのが主たる目的である。

酒逢知己千杯少

「親しい友人と逢って飲む酒は千杯

でも少ない「盃に千杯は、白髪三千丈」式の中国人好みの誇張表現である。宴席の雰囲気は誰とどんなお喋りをするかで大いに左右される。私の最もお気に入り中国の格言の一つである。

最後にギリシャ語の格言を披露してみたい。ギリシャ語には固有のアルファベットがあり、本文中では印刷できないので、別表として掲げました。(図参照)

1. 「金属は姿を映す鏡、ワインは心を写す鏡」古代ギリシャではガラスではなく、ピカピカに磨いた金属を鏡として用いていた。

2. 「古いワインを賞讃せよ、新しい詩を賞讃せよ」古代ギリシャには、宴席で自作の詩を朗読する優雅な習慣があったそうである。平安貴族のような上流階級の娯楽だろうか。それとも江戸時代の俳句や川柳の結社の

ギリシャ語の格言

1. *κάτοπτρον εἶδους χαλκός ἐστ', οἶνος δὲ νοῦ.*
2. *αἶνει δὲ παλαιὸν μὲν οἶνον, ἄνθεα δ' ὕμνων νεωτέρων.*
3. *ἐν οἴνῳ ἀλήθεια.*

ような一般庶民の娯楽だろうか。
3. 「ワインの中に真実がある」このギリシャの格言が出発点となつて、諸外国語に訳されて広く流布したそうである。

これからも百葉の長のワインを飲んで、肉体と大脳の健康維持に努めながら文筆に親しんでいきたいと願っている。

2018年(平成30年) 謹賀新年

<p>日本医師会 会長 横倉義武</p>	<p>日本薬剤師会 会長 山本信夫</p>	<p>公益社団法人東京都医師会 会長 尾崎治夫</p>	<p>日本医家芸術クラブ委員長 太田 怜</p>	<p>日本医家芸術クラブ副委員長 美術部 榎本貴夫</p>
<p>日本医家芸術クラブ副委員長 写真部 本村美雄</p>	<p>日本医家芸術クラブ副委員長 邦楽部 山田新太郎</p>	<p>日本医家芸術クラブ副委員長 洋楽部 萩野仁志</p>	<p>日本医家芸術クラブ再生委員 美術部部长 白矢勝一</p>	<p>日本医家芸術クラブ再生委員 文芸部 安井廣迪</p>

2018年(平成30年) 謹賀新年

日本医家芸術クラブ再生委員

美術部副部長 鈴木啓之

第66回医家美術展

有楽町・交通会館ゴールドサロンにて

2018年11月4日(日)〜10日(土)

ご出品 大歓迎です!

日本医家芸術クラブ再生委員

美術部 津谷喜一郎

新春のおよろこび申し上げます

洋楽部 松木耀子

新春をお喜び申し上げます

医家芸術の益々の発展を祈りつつ

洋楽部 小川昭子

「記備談語」継続中で米寿を迎えました
老化予防策です

文芸部・邦楽部 佐藤玄祥(博)

新春をお慶び申し上げます

式場隆史

医療法人 式場病院 理事長

謹んで新春のお慶びを申し上げます

文芸部 出来尚史

謹賀新年

文芸部 藤倉一郎

埼玉県北本市 藤倉医院

新春のお喜び申し上げます

文芸部 福富清子

東京都 品川区

2018年(平成30年)謹賀新年

皆様の御多幸を祈っています

文芸部

吉元昭治

吉元医院 院長

本年、4月1日～6月27日、東京富士美術館にて
「晁斎・晁翠伝―先駆の絵師魂！ 父娘画の真髄―」
展を開催いたします。

文芸部 河鍋楠美

埼玉県蕨市 蕨眼科

公益財団法人河鍋晁斎記念美術館

会員の皆様のお役に立てる様努めます。ご指導ください。

日本医家芸術クラブ事務局

〒一八七・〇〇四一 東京都小平市美園町一・四・十二

FAX 〇四二―三四四―〇八七九

メール: igeiclub@coral.ocn.ne.jp

※順不同にて掲載

多数の年賀広告のご協力ありがとうございました



医芸俳壇



静岡 岩本 漂人

赤富士のあせゆく挽歌ルリビタキ
富士見えぬ日も囀れりオオヨシキリ
登りつめアカゲラ飛ぶよ夕虹に
夕焼けやツバメに代る蚊喰鳥
さるすべり咲き残る頃コガモ来る

東京 福神 規子

しんしんと心が澄んで冬木見る
頼りたく頼られてゐて冬の菊
朴落葉 堆うずたかくとは古墳めき
背貼りせし質屋台帳一葉忘
一葉の恋はうたかた枇杷の花

東京 福富 清子

虚と実のひとり遊びや初日記
雪女郎と風の Rond や夜もすがら
除夜の鐘かぞへ八百比丘尼泣く
冬眠の用意おそろし寝ずにおく
落葉誘ふ駅前酒場自動ドア



群馬 豊泉 清

大寒波俺の懐一年中
野菜高肉と魚だけ鍋の中
鍋料理まず野菜から箸を付け
豪雪禍寒波噴火の3K県
温暖化寒冷化どっちに行くの我が地球

医芸柳壇



医芸歌壇



ティツイアーン

東京 小松 安彦

マグダラのマリアの絵をば眺めある和服の人の帯締めを見る
ギリシアの神話の本に眺めしはティントレットとティツイアーンの絵
アルテミスかアフロディテかわからぬと言ふ絵の女見詰め続ける
ダフネよりダナエを好む画家たちの様様に描く黄金の雨
「ウルビーノのヴィーナス」に似るフロラーの顔と右手の花を見てゐる

鳥取砂丘

茨城 羽生 藤伍

晩秋の鳥取砂丘駱駝乗り見れば彼方は山陰の海
行く秋の鳥取西部大山は雪を被りて富士の風貌
秋深き出雲の足立美術館紅葉山茶花庭おく深し
霜月の水戸県庁に招かれて表彰受けし一人となりぬ
鄙ひなの家赤き柿の実鈴生りに夕陽に映えて紅きにぎわい

スヴェトラーナ

東京 林 宏匡

スヴェトラーナのCDに耳を傾けて紹介し給ひし大人をぞ偲ぶ
樺連の集ひに唱ひし「チエルボナルター」クリミア生れの樺太育ち
角隠つのしに神前式を挙げしてふクリミア生れの女心は
スヴェトラーナのCD曲に誘ひき込まれいつしかクリミアの星の夜に入る
いにしへのクリミアに想ひを馳せにつつ戦いくさ続きし彼の地を悼む

かるた取り

東京 横 田 英 夫

一瞬の手捌き見事かるた取りひい孫咲良十才の春
技練りてクイーン目指すかさにあらず団体戦に勝ちたしと言いう
ひい孫に刺激を受けて読み返す「ちはやぶる」等百人一首
詠み人の女流歌人を知りたしと問われて吾は答に窮す
古の女流歌人も現代も変わるることなし愛と悲しみ

表紙の言葉

広島 奥田 哲章

『白い風車群』

ドンキホーテで有名なスペイン・ラマンチャ地方の粉挽き用の風車群です。四方に平野が見渡せる、風当たりの強い、小高いコングエラの丘に連なつてそびえています。今ではもっぱら観光用で、夜になるとライトアップされ遠くから白く輝いて見えて幻想的です。この絵は昼前の時間帯ですが、左前面に大きく風車塔を配置し、右端に石造りの投光器に少年が座つて遠くを眺め、思いにふけていた様子が何か気になり描いてみました。#

(第六十四回 医家美術展出展作品)

次号 原稿募集のお知らせ

次号 締め切り

平成30年6月12日(火)

毎号、会員のみなさまのご協力、誠にありがとうございます。

今号の発行が大幅に遅くなつてしまいお詫び申し上げます。次号の原稿を募集させていただきますが、年々の会員減少による運営費不足など、諸事情により、年4回の発行は難しくなつて参りました。今後は年2回発行を基本とし、次号は秋頃の発行を予定しております。皆様のご投稿お待ちしております。

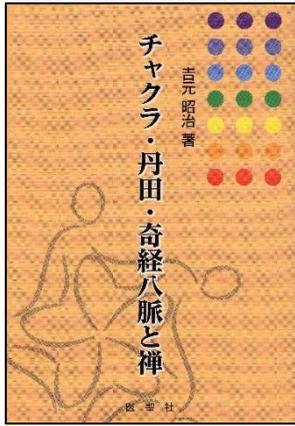
引き続き、会員の皆様のご支援・ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

※一部500円にて機関誌の追加購読も承っております。ご希望の方は事務局までお知らせください。

『チャクラ・丹田・奇経八脈と禅』

吉元 昭治 著

題名にある3つの『チャクラ・丹田・奇経八脈と禅』が互いにどう結びれているのか



それぞれのルーツをたどり、どう習合、混合、伝播、吸収しあっていたのかを考える



健康とか、健康長寿という言葉の響きには身体健康・丈夫な体で長生きをするというように思いがちだが、

一つ「心の健康」というのを忘れがちではなかるうか。道教では「精气神」を重視するが、認知症とか、うつ状態では、このうちの神(心)がおかしくなり、やがて精气(身体的機能)にも変化を産むようになる。

一方、体の病気では精や気がまずやられ、体力、エネルギーは消耗し、やがて神(精神的状態)も侵されてくる。誠に身(体)と心(精神)は一つであり、両者が全うしていれば健康ということになる。まさに「心身一如」

「梵我一如」なのである。(後略)

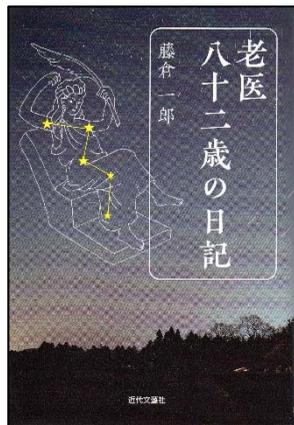
【あとがき】より

(医聖社・三、五〇〇円)

『老医・八十二歳の日記』

藤倉 一郎 著

生涯未完成で終末を迎える貧しい老医のつづきである



八十二歳にもなって、まだ自己を確立することのできない老医の日記である。人は結局何の結論もえられないで死んでいくのか。



混迷を極める現代の只中であって

人は危機の対象になりやすく、その被害状況は、日々の報道に止められるとおりである。不安の時代である。これを時代の所為や社会の罪にして、安易にかたづけられない。危機の青年期を何とか乗り越えたのに、まだこの不安におびえている心情はいったいなにか？ 人間の生きる意味、人間の社会に果たす役割、幸福の追求、そして自己をどのように確立していくか。八十二歳になって、まだ自己を確立することのできない老医の日記を出版するなどまったくナンセンスである。人間は何歳になっても、結局何の結論も得られないまま死んでいくのであろうか？

【はじめに】より
(近代文藝社・一、〇〇〇円)

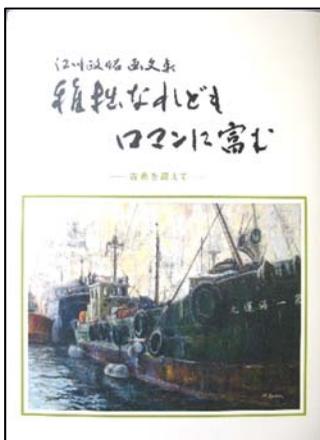
江川政昭画文集

『稚拙なれどもロマンに富む』

—古希を迎えて—

江川 政昭 著

古希を迎えた節目の画文集



50点を超える絵画と江川先生による文章を収録。



一昨年暮れ、2年後に迎える70歳の古希の記念に自分史の一つとし

てこの画文集の制作を思い立ちました。掲載する絵は、30年前に描いたものから最近のものまでいろいろあり、長い間にあちこちに分散しており、中には所在が不明のものもありました。(中略)

編集や校正の段階で絵や文章を見たり、読んだりしながら、その作品を完成した頃のことの色々と思いだされ、大変懐かしく、自分を見つめる楽しい時間となりました。この画文集は一つの区切りですが、これからもできる限り、絵を描き、文章も書き続けたいと思っています。(後略)

【あとがき】より

※表示価格は税抜きです。

会員の著作を紹介する欄です。近著を事務局まで送ってください。



機関誌『医家芸術』発行の遅れのお詫び及び今後の発行について

今号におきまして、例年の新年号にもかかわらず、発行が大幅に遅れてしまったこと、深くお詫び申し上げます。ご投稿いただいている先生方を始め、多くの会員の方にご迷惑ご心配をおかけいたしました。誠に申し訳ありませんでした。人手不足により原稿をデータ化するのに多くの時間を費やしてしまい、ご投稿いただいた方への校正のご連絡が遅れてしまい、発行が遅くなってしまうました。

今後は会員減少に伴う予算不足もあり、年2回（前期と後期）の発行とさせていただきたく、ご報告申し上げます。度々の発行遅れで本当に申し訳ありませんでした。



平成30年度の会費納入のお願い

平成30年4月から平成31年3月までの年会費の振込用紙を順次送付しております。お手元に届きましたら、郵便局にてお振り込みをお願いいたします。日頃より会員の皆様のご支援ご協力を賜り誠にありがとうございます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



透視像



「天の声を求めて」

榎本 貴夫

古の日本人の胸底に常に存在していた美意識はどうなっているのだろうか。何でも見聞きできるIT・AIの時代、今でも在るのだろうか。江戸時代、東海道五十三次を見て心が踊り空前の旅行ブームが沸き起こったと聞く。現代人の私たちが今、ページをパラパラとめくってみても動悸させるのは少ない。随分前になるが東山魁夷が現代人の心の弱体化を指摘していた。氏によれば美(あるいは自然)は常に情報を発信しているのだが残念ながらそれをキャッチする現代人のアンテナが大分破損している、というのである。江戸初期の俳人、松尾芭蕉は季語を通して宇宙の声と会話を交わした。翁によれば「笈の小文」に(・・造化(自然の意)にし

たがひて四時(四季の意)を友とす。見らる花にあらざしということなし(・・)とある。心を込めて在るがままの自然に向き合えば、すべてのものが花と輝く、の意だ。アンテナを直し、今一度天声を聴き自らを見つめ直すことも必要ではなかるうか。

最近私が交わした自然との会話を1点紹介したい。絵は朱昏—寶峯湖—である。中国湖南省張家界市武陵源・寶峯湖に遊んだことがある。湖は奇岩奇峰に挟まれた谷間の巖に沿って広がる。深い青緑色に染まる水面に朱塗りの東屋が張り出し、中から地元少数民族の



娘の絹を引き裂く高音の叫ぶ様な、うねる様な歌声が湖面を滑って彼方の山巖に消える。静かに臉を閉じると脳裏に、暗黒の湖面、暁に燃える奇岩、蒼天に屹立する奇峰、日没の予感に泣く木々など天の声が走馬灯のように駆け巡った。後に筆をとりその妄想のうちの幾つかをカンバスに残した。本稿では宵に向かう前、一瞬の輝きを朱昏として供覧する。朱昏という語は辞書に無い。夕景を表す言葉に黄昏がある。文字は美しいが語音タンガレには悲しいイメージが色濃い。落ちていく陽のはかない美しさより時間を重ねた日輪の華麗さを表現したい。その意味で朱昏の造語には自信がある。

編集後記



今回も発行が大幅に遅れてしまい大変申し訳ありませんでした。今後もより一層精進してまいります。よろしくお願い致します。